帰国シニアの挑戦
15年のあゆみ

15周年

記念誌

2019年12月

特定非営利活動法人
シニアボランティア経験を活かす会

Reライフ
人生充実

活躍の舞台 次は海外

家電修理を40年。あっという間に年を重ね、何かお役に立ちたいという思いが強くなってきました。シニア海外ボランティアについて教えて下さい。

長年の経験 支援に生かせる

シニアボランティア経験を活かす会理事長　須山勝彦さん

電機メーカーで研究開発に携わっていましたが、45歳ごろから管理や事務の仕事が多くなりました。一から自分でやる海外の仕事が合っていると思い、53歳で退職。国際協力機構（JICA）のシニア海外ボランティアとして、ネパール、マレーシア、カンボジアで職業訓練校や工業大学で電子工学を教えました。

最初に行ったネパールはアジアでも貧しい国。人々は親切で暗記は得意ですが、身分社会で勉強が仕事に結びつきにくく、理数系の科目はあまり勉強していない。任期の2年間でなんとかしたいと苦労した国で、忘れられません。

生活費は出ますが、無給です。私の場合は妻が働いており、思い切りました。とはいえ相談を受けたら、子の教育が終わる50代後半まで我慢した方がいいと言っています。

海外での活動には健康が第一。それと英語は最低限必要です。現地の言葉は話そうという気持ちが大事。言葉はおぼつかなくても気持ちは伝わります。

支援できる専門性を持っていないという人がいますが、そこは心配しなくていい。何十年も働いていれば、経理でも営業でも経験を仕分けすると見つかります。途上国は私たちが若い時の状態なので、私たちの経験が一番の専門性になります。

日本と違う社会を知ると、安全、勤勉さ、利便性、伝統文化など普段意識していない日本の良さが見えてきます。定年後の活動の幅も広がります。私たちの会は国際理解の出前授業や外国人の子の学習支援にも取り組んでいます。

すやま・かつひこ　1947年生まれ。電機メーカーを早期退職後、海外でボランティア活動。一昨年からシニアボランティア経験を活かす会理事長。

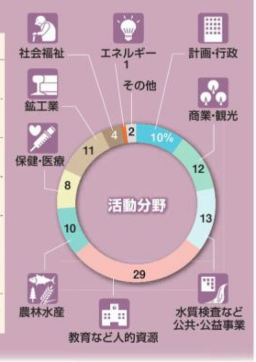
シニア海外ボランティア

シニア海外ボランティア	60カ国	441人	平均60歳
日系社会シニア・ボランティア	5カ国	24人	平均57歳

応募・選考の流れ

	春募集		秋募集	
書類提出	4～5月		10～11月	
1次選考	5～6月		11～12月	
2次選考	6月		12月	
合否通知	8月		2月	
派遣前訓練	3次隊 10～11月	4次隊 1～2月	1次隊 4～5月	2次隊 7～8月
出発	1月上旬	3月下旬	6月下旬	9月下旬

国際協力機構のパンフレットから作製



グラフィック・小林 世以子

どんな分野があるか　途上国で福祉・美術・工場… 1

横浜市で7月、シニアボランティア経験を活かす会の体験発表会があった。佐藤敬子さん(68)はペルーの日系人向け老人ホームで昨春まで取り組んだレクリエーションプログラムについて報告した。地方公務員を59歳で退職し保育園長を務めた後、国際協力機構(JICA)のシニア海外ボランティアに手を挙げた。

101歳のおばあさんは亡くなる直前まで、佐藤さんが持参したお手玉と「鶴の恩返し」の絵本を手にしていた。「お年寄りは日本語の話し相手が少なく、自分が必要とされていると感じた。長い間の夢がかないました」

現地での交流は財産になる。外資系医療機器会社に勤めていた木場貞成さん(76)は63歳で退職、ラオスの保健省で在庫管理などを支援した。今も毎年訪れる。「第二のふるさとになります」

山内茂夫さん(69)は約20年間続けている陶芸をドミニカ共和国の美術学校で指導した。「新たな学科で一から教え、生徒の作品が売れるまでになった」。ベトナムなどで工場の生産管理を指導した鈴木新さん(71)には、今もメールが届く。「お前がいたときは生産性が20%上がったが今は35%増しだ、見に来いと。やってよかったと思います」。

青年海外協力隊との世代を超えた交流も魅力という。

興味をもったら　JICA、全国で説明会 2

JICAのシニア海外ボランティアと日系社会シニア・ボランティアは40～69歳が対象。1990年から75カ国に延べ約6千人が派遣された。

青年海外協力隊事務局募集課によると、青年の派遣先はアフリカが最多だが、シニアの場合は中南米やアジアが多い。「これから成長期に入る国々で、日本が高度成長期から積み上げてきた技術がぴったり合う」と永田健課長。例えば、日系の自動車産業が進出しているメキシコでの品質向上への支援などだ。

期間は原則2年。今春の各国からの派遣要請一覧を見ると、太陽光パネルから観光開発、教育、スポーツ指導まで幅広い。「応募には健康が特に重要」と永田さん。現地の気候条件や医療のレベルは様々だ。持病は治しておきたい。英語能力はTOEIC330点が最低基準だ。

待遇面では住居費、渡航費、業務費のほか、生活費（派遣国により月570～1510ドル、7万～19万円程度）が支給される。安全対策などを在外事務所が支援する。家族同伴も可能だ。

募集は春秋2回で、合宿訓練もあり出発まで1年近くかかる。シニア海外ボランティアは昨秋383人が応募、111人が合格した。次の募集は10月開始で、説明会が全国各地で開かれる。

言葉の壁は？　通訳付ける団体も 3

「一度行くともう一度行きたくなる」という経験者は多い。政金驍さん(73)は両親をみとった後、チャレンジの気持ちで応募、68歳でアフリカ・マラウイへ行った。住宅の契約から苦労したが、2年間自動車整備の指導をした。「やる気があればなんとかなる」。また行きたいと思い、日本財団が支援する技能ボランティア海外派遣協会（NISVA）に登録したところ昨年フィリピンへ派遣された。

NISVAはアジアの若者が技術を身につけ自立できるよう原則1年間派遣し、現地の職業訓練校などで指導する。職種は溶接、金型製作、家電修理、看護師、縫製などで、04年から延べ400人を派遣した。技術は持っているが、言葉の壁があるシニアでも参加しやすいように必要に応じて通訳アシスタントが付く。対象は50歳以上で生活費支給。「定年後、働く場の選択肢のひとつになるのでは」とコーディネーターの田邉智男さんは話す。（佐藤実千秋）

■JICAボランティア（03・5226・9813、http://www.jica.go.jp/volunteer）
■技能ボランティア海外派遣協会（03・3506・7300、http://www.nisva.org）
■シニアボランティア経験を活かす会（http://jicasvob.com）

「Reライフ」面は月曜日に掲載します。次回は夏の休載を挟み8月24日の予定です。

朝日新聞（2015 年 7 月 27 日）に紹介されたシニアボランティア経験を活かす会

左の当会ロゴマークは2016年4月に制定、商標登録されています。

当会の設立趣旨と活動目的である「国際協力」や「国際理解」の増進を、地球上で手と手を繋ぐデザインで表現しています。

会員公募により応募作品を基にロゴ・ロゴマーク審査委員会で吟味検討が加えられて理事会で決定されたものです。
審査委員会メンバー（敬称略）
浅川克彦　北脇和夫　斎藤祐子　野口烝治　山内茂夫（担当理事）

15周年記念誌表紙のデザイン

水面に波紋が拡がるように、「シニアボランティア経験を活かす会」の理念や活動を世界の人々に届けることをグラフィカルに現しています。　デザイン：山内茂夫

刊行の辞

温故知新の精神で、新しい事業の創出と展開に果敢な挑戦を！

特定非営利活動法人　シニアボランティア経験を活かす会
理事長　鈴木　新

シニアボランティア経験を活かす会（SV 会）は、2019 年に創立 15 年を迎えました。設立に当たっては当時の有志が大変な努力をされたと伺っています。創立期の理事長、会員の皆様の「自らやろう、進んでやろう」という正にボランティア精神のもとで、JICA シニアボランティア経験者の組織的な社会貢献活動がスタートしました。

その後の会員活動の活発化により、SV 会は大きな成果を上げてきました。これは多彩なそして個性的な SV 会会員の活動の賜物と思います。また、この背景には、JICA の組織及び関係者の多大なご支援がありました。15 周年を迎えるに当たり、改めて御礼を申し上げます。

今年の初めに、「15 周年記念誌」の発行の話が提起され、会員 11 人による記念誌編集委員会が発足しました。企画・取材・記録整理・編集などがすべてこの編集委員会で行われました。特に素晴らしいことは、多くの会員のそれぞれの活動がこの記念誌に掲載されていることです。SV 会では、創立期から会報の発行、2010 年から会員の JICA ボランティア活動記録の冊子化、2014 年から会の出前講座等各種事業の活動記録のデータベース化などを行い、データの活用化を図ってまいりました。これらの整備された活動記録が今回の「15 周年記念誌」に結実したものといえます。このような「継続的な文化創造活動」自体が、SV 会の信頼できる体質の表れでもあるでしょう。SV 会の「15 年のあゆみ」については本誌に詳しく記されていますので、ここでは略させていただきます。

一方、最近における残念なことは、15 年も経ちますと、創立期に活躍された会員がご高齢になり、SV 会の活動から少しずつ身をひかれていることです。このことが記念誌の原稿を読ませていただいた時、特に強く感じました。また会員数も最近は最盛期を下回っています。これは、JICA-SV 全体の人数が減少していることもありますが、昨今の定年延長の影響で、海外から戻られた後、復職される方や新たな仕事に就かれる方も多くなっており、SV 会への入会者が減少したことにあります。「人生 100 年時代、JICA-SV を卒業してもまだ働きたい」という方も多いようです。SV 会としては、こうした方に対しても、新たな会員を募ることをこれからも積極的に進めてゆきたいと思います。

SV 会を取りまく環境も変わってきました。温故知新の精神で、即ち、15 年の歴史にある活動を大事にし、これらの事業を更に発展させるとともに、新しい事業の創出と展開に果敢な挑戦が必要と思います。この記念誌が次のステップへのジャンプ台になることは間違いないと思います。また次の 15 年に向かって若き人材が SV 会発展の牽引者になっていくことを期待しています。

「新しい日本社会で更なる輝きを」

独立行政法人　国際協力機構
青年海外協力隊事務局
事務局長　小林 広幸

この度は、「特定非営利活動法人 シニアボランティア経験を活かす会」の皆様におかれましては、設立 15 周年を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。また、JICA ボランティア事業への長きに亘る多大なご貢献に心から感謝致します。

皆様の応援をいただきまして、この 15 年間で JICA ボランティア事業は大きく成長し、2017 年には累計派遣人数が 5 万人を超えました。そして、1990 年に当時はシニア協力専門家（1996 年から「シニア海外ボランティア」と「日系社会シニア・ボランティア」）として開始されたシニアの参加も今年累計で 7000 人を超えております。

シニアの皆様の参加には特別な意義があります。一つは、何よりも皆様の豊かな経験と知見です。経験と知見とは、国内での仕事や生活を通して培われた人間性や技術力のことを指しますが、何よりも重要なのは「日本の発展」を経験されているという点です。参加されたシニアの方から、途上国の風景や様子に懐かしさを感じたというお話を時々お聞きします。まさに日本のかつての様子と今の途上国に多くの共通点があり、当時の日本がどのように課題を解決し、発展したかを、身をもって経験されたシニアの皆様は、必ずや途上国の今後の行く末をイメージしながら、そこの人々にとって今一番大切な視点を育まれたと確信します。

更に、シニアの皆様は日本国内においても、広いネットワークや社会への影響力をお持ちの方が多く、そのような方々に途上国での活動や生活を経験していただき、その経験を帰国後に国内で活かしていただく意義は非常に大きいと思います。その観点から、貴会の長年の取り組みは、地域から日本の社会を変える原動力となっています。特に、近年、日本では外国の方々との共生社会実現が大きなテーマとなる中、皆様の存在と活動が益々重要性を増しています。

世界も日本も大きく変わった 15 年間。その中でも変わらない普遍的な価値を発信し続けていただいている皆様は、令和の時代を迎え変わりゆく新しい日本社会で更に輝きを増すと確信致します。皆様の益々のご発展とご健勝をこころからお祈りいたします。

「熱い思い、優しさで、人と人を繋いで」

独立行政法人　国際協力機構
国内事業部
部長　岩上 憲三

NPO 法人シニアボランティア経験を活かす会設立 15 周年、誠におめでとうございます！また、日頃より、JICA に対する多大なるご支援に心より御礼申し上げます。

日本は「第 2、第 3 の開国」の時代に入ったと言われています。少子高齢化、過疎化、といった様々な課題に直面する国内各地域にとって、地域社会を担う人材を海外から迎え入れることが不可欠な時代となりました。

先日、国内で活躍する JICA 国際協力推進員が本部に集まりました。その多くは海外協力隊として途上国の現場で汗を流した若手人材で、彼ら・彼女らが肌で感じ取った地域のニーズは以下のようなものでした。「幸福度 No.1 と言われる地域であるが、地元で働く外国人から見ると必ずしもそうではない。外国人の地元ライフを応援する活動を展開したい」「日本に就労する外国人に選んでもらい、好きになってもらえるような地域を目指したい」といったとても心強く印象的なものでした。

こうした日本社会の大きな転換期を迎え、新たな課題に JICA がチャレンジしようとする中、貴会が 15 年にわたり展開してこられた軌跡は、貴重なお手本であります。はじめて大きな外国人と接し、会話を交わした小学生にとって、その体験は大きな衝撃であり目線を海外に向ける大きなきっかけになるでしょう。同様に、海外の研修員にとって、日本の学校で子供たちと触れ合うことで日本を知り、好きになる、忘れ得ぬ大切なひと時であると思います。

こうした心のこもった一つひとつの活動の積み重ねが、多文化共生社会を実現する礎となり、同時に世界各国に親日派を増やす、すなわち人と人との触れ合いによる究極の安全保障に繋がっているものと確信いたします。

貴会会員は、多岐にわたる技術、豊富な人生経験をお持ちであることはもちろんのこと、開発途上国の現場の匂いや空気をよくご存知であり、そして何よりも「人」を大切にされる皆様で構成されています。その熱い思いや優しいお気持ちを、この先、20 年、30 年、50 年と引き継がれ、貴会が益々ご発展することを心よりお祈り申し上げます。

･･･JICA のパートナーとして、一層のご発展をお祈りします･･･

独立行政法人　国際協力機構
東京センター
所長　木野本 浩之

シニアボランティア経験を活かす会の発足 15 周年を心よりお慶び申し上げます。貴会におかれては、メンバーの皆様のシニアボランティアとしての途上国での活動もさることながら、会の活動を通じて帰国後の社会還元に努めていただいていることに深く敬意を表します。JICA 東京としましても、募集説明会へのご協力をいただいていることに感謝申し上げるとともに、学校での出前授業など貴会の活動を大変高く評価しております。2016 年に JICA 理事長表彰をお受けいただいたことは、我々のシニアボランティア経験を活かす会との関わりを象徴する出来事であったように思います。

この 15 年間、世界の情勢は大きく変わりました。米国一極構造から多極化へと従来とは違う力学が働きつつあるように思えますし、経済のグローバル化が進んだ一方で自国優先主義の台頭などの排外的な動きも顕在化しています。自国優先だけでは生きられない日本にとっては難しい時代になったのかもしれません。

また、日本国内を見ても、少子高齢化が急速に進みました。人手不足による外国人材の受入れ拡大やインバウンド旅行客の急増など、海外との関係はより深く、より我々にとって身近なものになってきています。外国人とかかわりあうことなしには我々の社会は成り立たないとさえいえるでしょう。言い換えれば今や日本国内の問題と海外の問題は切り離せない世界になったということだと思います。

こうした中、途上国で活動されたボランティアの皆さんがその経験を活かし、日本国内でさまざまな活動を行っていただくことは、大変に大きな意味があると思います。一般の人々や学校の生徒に途上国について知ってもらうことや、地域の外国人との共生に力を貸すことなど、まさにこれからの時代に求められていることだといえます。今回 15 周年という節目を迎えられましたが、ぜひ末永く活動を続けていただければと思います。我々の重要なパートナーとして大いに期待しております。

貴会のますますの発展とメンバーの方々の一層のご活躍をお祈りします。

社会に新しい価値の創造をめざして挑戦する SV 会の 15 周年を祝う

独立行政法人　国際協力機構
横浜センター
所長　熊谷 晃子

NPO 法人シニアボランティア経験を活かす会（以下、SV 会）の設立 15 周年にあたり、心よりお祝い申し上げます。また平素より、SV 会の皆様方には、私共 JICA の事業に暖かなご支援、ご理解を頂いており、この場をお借りしまして改めてお礼申し上げます。

振り返りますと、「シニア海外ボランティア」事業は、その前身である「シニア協力専門家」が 1990 年に、その後「シニア海外ボランティア」と改称して 1996 年に開始されました。ですから前身から数えますと 30 年、改称後から 24 年が経ったところ、ということになります。その中で、SV 会の皆様方が、海外のボランティア活動を終えられてから、「その経験を活かす」として、志を同じくされる方々として集い、既に 15 年も継続して活動されていることに、深い尊敬と感謝の意を禁じえません。JICA のボランティア事業ではご存知の通り、ボランティアの方々のご帰国後の、「日本社会への還元」も非常に重視されていますから、それを皆様が具現化しておられることに、JICA の一員として本当にありがたく感じております。

皆様の活動は多彩であり、国内の様々な場所での市民の方々を対象にした各種講座や、特に次代を担う子供たちへの出前事業等の、国際協力への理解を深める活動のみならず、近年 JICA も大変力を入れている民間企業さんの海外展開支援関連活動や、さらに、外国にルーツを持つ・ゆかりのある子どもたちが抱える困難に手を差し伸べる活動など、時代に即した課題に応える事業を、様々に展開しておられます。これはひとえに、皆様の高い志、気概とともに、SV 会の方々が本当に多士済々である、ということを示しているものである、と感じます。

知識基盤社会といわれる世にあって、生涯学習が謳われ、また分野の垣根を超えたネットワークの重要性がしばしば指摘されていますが、まさにこうして、様々な分野の方々が、おのおのの経験を持ち寄り、新しい価値を創造し、社会とかかわりあっていく、という形お姿は、周囲の人々、特に次世代の方々に対し、いろいろなことを示してくださっている、と思います。

いつも本当にありがとうございます。今後ともよろしくご指導いただけますようお願い申し上げます。

目次

刊行の辞	温故知新の精神で、新しい事業の創出と展開に果敢な挑戦を！	NPO法人　シニアボランティア経験を活かす会　理事長	鈴木　新	3
祝辞	「新しい日本社会で更なる輝きを」	独立行政法人 国際協力機構　青年海外協力隊事務局　事務局長	小林　広幸	4
祝辞	「熱い思い、優しさで、人と人を繋いで」	独立行政法人 国際協力機構　国内事業部　部長	岩上　憲三	4
祝辞	・・・JICAのパートナーとして、一層のご発展をお祈りします・・・	独立行政法人 国際協力機構　東京センター　所長	木野本 浩之	5
祝辞	社会に新しい価値の創造をめざして挑戦するSV会の15周年を祝う	独立行政法人 国際協力機構　横浜センター　所長	熊谷　晃子	5
■はじめに■	私たちは何をしてきたのか		編集委員会	8

第1章　SV会の歴史

1	15周年記念式典	“創立の精神”を思い起こし、新たな出発を	9
2	ビジュアル15年史	一目でわかるSV会の15年史	10
3	SV会のあゆみ	先人の叡智を学び、未来に活かそう	12

第2章　SV会の活動

1	JICA支援	JICA支援活動は、今日のSV会の礎を造る	16
2	国際協力（東京地域）	国際協力の啓発活動、首都圏で2つのイベント	18
3	国際協力（神奈川地域）	「えっ！　そんな国あるの？」、驚きと感動を伝える	19
4	出前授業（杉並・新宿）	SV会の出前授業を牽引する杉並・新宿プロジェクト	20
5	出前授業（JICA研修員）	出前授業の新しい潮流、JICA研修員による英語教育	22
6	出前授業（東京オリパラ）	異文化に、子供たちは、驚き、感動、そして笑顔に	23
7	出前授業（理科教育1）	楽しさを通じて、環境への理解を深める理科教育	24
8	出前授業（理科教育2）	理科や“ものづくり”の好きな子供を育てる	25
9	市民講座（体験発表会）	自分の言葉でリアルに再現、「国際協力の現場」	26
10	市民講座（あーすぷらざ）	「国際協力の現場」、シニアと若手の共演・二重奏	27
11	翻訳（学校だより）	ささやかな活動が地域社会に期待される大きな活動へと発展	28
12	学習支援（新宿）	異文化体験者として、外国籍児童生徒を支える	30
13	学習支援（横浜）	孫のような生徒が慕ってくれるのは、シニアの生き甲斐	31
14	ホームステイ・サポートファミリー	“草の根外交官”として、多文化共生を支える	32
15	中小企業海外展開支援	SV会の「新たな事業の創造」をめざして	33

第３章　SV会の運営

1	パートナーシップ（外部団体）	パートナーシップで活躍の場が拡大、拡がる輪	34
2	パトーナーシップ（特別会員）	SV会の国際理解教育や翻訳活動を支える	35
3	組織運営	委員会、PM制度の導入で、組織の活性化	36
4	広報活動	時代の変化とともに、多彩なメディアで社会へ情報発信	38
5	出前講座委員会	会活動を牽引した出前講座委員会、広範な文化創造を目指して	40

第４章　会員の活躍

1	座談会Ⅰ（創立期の思い）	自分の持てる技術を活かし、会の運営に参加	42
2	座談会Ⅱ（明日に向かって）	夢は広がる。「世界の未来を創るSV会でありたい」	44
3	会員の提言	･･･公募に応募した8会員の証言･提言･発言･･･	46
	① 創立期の頃	迸る熱気･･･創立期に燃えたシニア魂	46
	② 途上国支援1	ライフワークは「日本とキルギスとの懸け橋」	47
	③ 途上国支援2	千里の道も一歩から･･･トンガ防災ICTシステム構築の道のり	48
	④ 難民支援	“Stop Killing in Syria” を訴え、シリア難民支援活動	49
	⑤ 日本語教育	在日外国人児童に寄り添って、成長見守る	50
	⑥ 国際交流	MIAで学んだこと･･･できることをできる範囲で、そして長く続ける	51
	⑦ 古参会員の声	会活動の活発化を期待、その一方で親睦会的役割も	52
	⑧ レセプション	外務大臣主催レセプションに参加、SV会の活動が評価される	53
4	会員の意識調査	アンケート回収率　88%達成！活かそうアンケート結果	54
5	児童生徒の感想文	心に響く児童生徒たちの言葉、会員の励み	56
6	途上国への思い	帰国後も途上国に思いを馳せ、今も絆を保っている会員たち	59
7	親睦会･会員交流	人生100年時代。“第二の青春”賛歌	62

第５章　資料編

1	統計資料	会員に関する情報等		64
2	SV会のプロフィール	SV会の基本データ、15年間の実績		67
	■あとがき■	「15周年記念誌」で新たな文化創造を！	編集委員会	68

私たちは何をしてきたのか

開発途上国で活動をしてきたJICAシニアボランティアの有志によって、NPO法人「シニアボランティア経験を活かす会（SV会）」が設立され、今年（2019年）で15周年を迎えました。私たち帰国シニアは、この15年間、その経験を活かして、日本や地域社会で何をしてきたのでしょうか。それに応えるため、また、市民の皆様に知って頂くため、この記念誌を編纂しました。

本記念誌は、5つの章から構成されています

第1章は、SV会の15年のあゆみです。会の歴史の全体像が俯瞰できるよう、年毎に象徴的な出来事をリストアップし、略年表と解説で簡単に紹介します。「ビジュアル 15 年史」は一目でSV会の活動が分かるようにしてあります。また、創立15周年記念式典も掲載しました。

第2章は、SV会の事業活動の記録です。主要事業の3分野（国際協力、出前講座、外国人支援）を中心に、最近新たに興った中小企業海外展開支援についても記述しています。

第3章は、SV会の運営についての記録です。主に内部の運営ですが、NPOの精神に則り、誰でも参加できる会運営の透明性・公開性がどう担保されているか、分かるよう配慮しました。SV会は、会員以外の多くのパートナー（外部団体や在日外国人）のご協力を頂き、運営されており、パートナーシップ、組織運営、広報活動、出前講座委員会を中心に記述します。

第4章は、会員を中心とした人々についての記録です。SV会はボランティア精神に基づく団体です。その活動の喜びが私たちの喜びです。この章では、座談会を通して会員のSV会への思いや期待、会員の任国への思い、児童生徒の「驚きと感動」の声をお届けいたします。また、「会員の証言」と題して、公募した会員8名の個人的活動の記録を掲載しました。

第5章は、資料編です。SV会にとって重要な活動記録を図表として載せました。最後に「SV会のプロフィール」として、会の基本情報と15年間の活動実績を一覧表としてまとめました。

本記念誌は、地域社会と世界を結ぶ“若き”シニアたちの“第二の青春”の記録であり、“地域社会への応援歌”でもあります。本記念誌を一読され、“会”と“会を支える会員たち”の織りなす多彩な活動の一端を知って頂ければ、望外の喜びです。ささやかではありますが、この記念誌が社会貢献活動の一助になることを願っております。

2019年12月25日
15周年記念誌編集委員会

■本冊子で頻繁に使われる用語・略語■

JICA	Japan International Cooperation Agency の略　独立行政法人 国際協力機構
SV	Senior Volunteer の略。JICAのシニアボランティアの総称、中高年ボランティア
JICA-SV	JICAのシニア海外ボランティア、日系社会シニアボランティア
JOCV	Japan Overseas Cooperation Volunteers の略　青年海外協力隊
JOCA	Japan Overseas Cooperative Association の略　（社）青年海外協力協会
CP	Counter Part（カウンターパート）の略。SVが派遣国で技術移転を行う相手方
専門家	JICAとの契約に基づき、派遣国において専門的技術を活かし仕事をする人
㈱VSOC	Vision and Spirit for Overseas Cooperation Co.,Ltd　の略　社名
PM	Project Managerの略　プロジェクトマネージャー
東京オリパラ	東京オリンピック・パラリンピックの略
SV会、会	「特定非営利活動法人 シニアボランティア経験を活かす会」の略称
SOVA	Senior Volunteers Overseas Associationの略 「SV会」の英文名称

SV会創立15周年記念式典

2019年5月22日

特定非営利活動法人シニアボランティア経験を活かす会（SV 会）は、2004 年 1 月 31 日に創立（2005 年 11 月 NPO 法人化）、2019（令和元）年に 15 周年を迎えました。5 月 22 日午後 3 時から、2019 年度定期総会の開催に合わせて、「SV 会創立 15 周年記念式典」が開催されました。式典会場となった JICA 東京には、木野本 JICA 東京所長はじめ JICA 関係者、来賓の方々、会員 50 余名が参加し、創立 15 周年を祝いました。会場は、将来への期待で、熱気に満ちていました。（写真：来賓挨拶の木野本所長）

政金理事長

式典では、まず、政金驍理事長が「創立以来 15 年の長きにわたって、㈱VSOC 様のお世話になったことに謝意を表し、SV 会事務所を移転したこと。15 周年記念誌の発行に向け動き出したこと」等の挨拶を行った。

木野本所長

続いて、木野本浩之 JICA 東京所長の来賓祝辞として、SV 会の帰国報告会の主催等、JICA ボランティア事業協力への感謝の言葉、昨年度のボランティア事業の制度変更の説明のあと、「少子高齢化の令和の時代のキーワードは、『海外』と『シニ ア』である」とのお話があり、15 周年を迎えた SV 会シニアにエールが送られた。

吉満相談役

続いて、創立 15 周年を記念して、SV 会に多大の貢献をされた以下のお三方に対し、政金理事長から感謝状と記念品が贈呈された。

① 会創設に当たり惜しみないご支援をいただいた㈱VSOC 相談役 吉満博様
② 会設立者・初代理事長 掛川周男会員（ご欠席）
③ 創立時より当会の発展と財政基盤の確立に尽力された角井信行会員

角井会員

角井会員

最後に、15 周年記念式典における記念講演として、受賞者の角井会員による講演が行われた。講演では、設立当初の活動に絞り、当初、会員が持ったフィロソフィーを思い起こし、会の将来の参考にしてもらうことに主眼を置きたいとして、時に、ご来賓の吉満相談役を巻き込んだトークショーを組み込みながらの記念講演にふさわしいお話をしていただいた。

SV 会が 15 周年を迎えることが出来ましたのは、ひとえに JICA をはじめ、関係者の温かいご支援とご協力のお蔭であります。これからも引き続き、SV 会発展のため、地域や関係機関との連携を深め、社会貢献活動に邁進致しますので、今後とも一層のご支援ご協力をお願い申し上げます。　2019 年 5 月 22 日　SV 会会員一同

SV会15年

2004.1月
「シニアボランティア経験を活かす会」
設立

2004年
1月　会長に掛川周男氏，顧問に藤田公郎氏を選出
3月　4つの分科会（茨城、多摩・山梨、神奈川、日本語教育）を設置

2005年
7月　神奈川分科会で第1回「体験発表会」を開催　以降定例化
11月 NPO法人シニアボランティア経験を活かす会が認証される

2006年
2月　SV会の公式ホームページが開設
4月　杉並区との共同事業始まる
8月　第1回SV帰国報告会を開催

2007年
2月　新宿プロジェクト（大久保小学校・外国籍子弟支援）が始動
10月　川崎市民アカデミーの講座「開発支援」始まる

2010年
1月　会員2名がボルネオ島で野生ドリアンの植林指導
11月　「シニアの挑戦ー国際協力の現場を語る（第1集）」を発刊

2011年
1月　「教育活動充実部会」が発足（第1回打合せ）
12月　JICA横浜で「SV会の活動写真展」を開催
（翌年1月地球広場でも開催）

2012年
9月 SV会の活動拠点をJICA広尾から中央区「協働ステーション中央」へ
10月　会報100号を達成

2015年
2月　会員向け「出前講座資料館」の開設
7月　朝日新聞(全国版)にSV会が紹介される
9月　ＳＶ会パンフレット(リーフレット版)を発行
11月　SV会、JOCV発足50周年式典で
JICA理事長特別表彰盾を受賞

2016年
4月　SV会のロゴマーク制定
5月　プロジェクトマネージャー(PM)制が本格的始動
10月　第一回東京オリパラ出前授業を実施
（板橋区立小学校）
10月　SV会、第12回JICA理事長賞を受賞

のあゆみ

2008年

4月　新宿区との協働事業始まる

10月　「よこはま国際フェスタ」に初出展参加

2009年

4月　SV会主催の「何でも相談会」始まる

5月　神奈川県「環境・エネルギー学校派遣事業」に会員提案の2件が合格

2013年

5月　広報誌「帰国シニアの挑戦～地域社会と世界を結ぶ～」の発行

12月　体験発表会100回記念パネルディスカッションを実施

2014年

5月　あーすぷらざ市民講座の開催（第一回）

5月　出前講座検討委員会の発足・・・包括的検討始まる

11月　会員向け「公式資料保存庫」の開設

2017年

1月　SV会独自の「講師派遣依頼書」を制定

2月　「JICA研修員」参加の御成中プロジェクトが始まる（以後毎年）

2018年

4月　湘南ビーチFMで、SV会員のライブトークショー始まる（隔月）

6月　在日外国人支援（翻訳、学習支援）で文部科学省を訪問、政策提言

7月　「中小企業海外展開支援」プロジェクトが発足

2019年

2月　SV会事務所を移転（㈱VSOCオフィスから独自オフィスへ）

5月　創立15周年記念座談会を開催・・・創立期その時代を語る

9月　SV会ホームページの更新（サーバー移設、スマホ・動画への対応）

2020年

年	月	出来事
2004	1	「シニアボランティア経験を活かす会」設立総会、会長に掛川周男氏を選出
2004	2	ＪＩＣＡ東京で「ボランティア家族連絡会」に初参加。任国事情を語る
2004	3	４つの分科会（茨城、多摩山梨、神奈川、日本語教育）を設置
2004	4	ＪＩＣＡのＳＶ募集説明会に初参加
2004	7	神奈川分科会、公立中学２校で初の出前授業（国際理解教育）
2004	8	杉並区で初の本格的な市民講座「中高年の海外でのボランティア活動は」開催
2004	8	ＪＩＣＡ八王子の要請で、ＳＶ会初の研修員のホームステイ
2004	10	ＪＩＣＡのＳＶ募集説明会で「パネルトーク」始まる
2004	10	会報第１号発行（当時は同報メールと称す）
2004	10	会員の高校出前授業がＮＨＫ番組「団塊の世代は・・・」で放映
2004	11	臨時総会を開催、会のＮＰＯ化の検討
2005	4	ＪＩＣＡのＳＶ募集説明会で「よろず相談」始まる
2005	5	２００５年度定期総会、理事長に掛川周男氏を選出。ＮＰＯ法人化決議
2005	5	ＪＩＣＡ東京とＪＩＣＡインドネシアを結んだテレビ会議に参加
2005	6	ＳＶ会（東京地区）に「会員のひろば」開設（以後定例化）
2005	7	神奈川分科会で第１回「体験発表会」が実施される（以後定例化）
2005	9	ＳＶ会事業提案、杉並区の協働事業に採用される
2005	11	ＳＶ会、ＮＰＯ法人として認証を受け東京都に登記する
2006	1	板橋区ふれあい館で「人生を語る会」を共同企画（１月～３月）
2006	2	ＳＶ会の公式ホームページが開設
2006	4	ＳＶ会の活動拠点が渋谷の㈱ＶＳＯＣからＪＩＣＡ広尾（地球ひろば）へ
2006	4	杉並区との協働事業始まる（２００６～２００７年度）
2006	7	横浜「さかえ未来塾」で出前講座（自主講座）を開設（７月～１２月）
2006	8	第１回ＳＶ帰国報告会が開催。メディア（日経、毎日、朝日、ＮＨＫ）が取材
2006	9	「グローバルフェスタ（日比谷公園）」に初参加（以後毎年）
2006	10	日本財団の補助金内定、日本財団との協力関係構築へ
2007	2	新宿プロジェクト（大久保小学校・外国籍子弟支援）が始動
2007	3	ＳＶ会が大久保小学校に５か国語の「春休み心得」を贈呈。翻訳事業が始まる
2007	4	中央区ＮＰＯ・ボランティア団体交流サロンへ登録し、中央区で活動が始まる
2007	4	第１回「協力隊まつり」に参加（以後毎年）
2007	5	２００７年度定例総会、理事長に鈴木庄一氏を選出
2007	6	ＮＨＫ衛星放送のディベート「どうする日本のＯＤＡ」に理事が出演
2007	8	高齢期雇用就業支援センターの団塊世代向けセミナーに協力（８月～翌８月）
2007	9	中央区姉妹都市豪州サザーランド市の中学生親善使節に通訳ガイドで協力
2007	9	新宿区協働事業の公開プレゼンテーション、ＳＶ会事業提案が採用される
2007	10	かわさき市民アカデミーの講座「開発支援」始まる（１０月～翌２月）

●2002 年 8 月、㈱VSOC の仲介で JICA シニアボランティア経験者の有志 10 余名が渋谷の同社に集まり、翌年夏に発起人会（世話人：掛川周男氏）を設立した。それから 1 年有余の模索の期間を経て、「我が会」の誕生へ・・・・

■草創期：組織基盤を整備、行政と協働事業が始まる■

●JICA-SV 経験者（97 名）が集まり、2004 年 1 月 31 日「シニアボランティア経験を活かす会」の設立総会が JICA 広尾で開催された（会員 143 名）。理事を中心に JICA 各機関、行政・自治体等を訪問し、活動分野を開拓して回ると同時に、3 つの地域分科会と日本語教育分科会を設置し、組織基盤の整備に取り組む。SV 募集説明会など JICA 事業へ協力し、学校や地域社会に出前授業・市民講座の先生や講師を派遣した。これらの活動はメディアの目を引き、一会員を通じて“団塊の世代”の活動が世間に紹介された。

●2005 年、春募集で SV 会の協力による「よろず相談」が始まる。7 月に神奈川分科会で SV 体験の発表の場として“市民に開かれた”体験発表会（第 1 回）が開催された。これは毎月 1 回開催され、2019 年 12 月で 171 回を迎える。この年の 11 月には念願の SV 会の NPO 法人化を実現した。また、杉並区に学校支援に関する協働事業を提案し、採用され、この協働事業はその後の SV 会活動の柱となる。

●2006 年は SV 会にとって飛躍の年であった。4 月から杉並区 2006 年度協働事業が始まった。また事業の拡充を検討する中、新宿区の外国籍子弟教育問題で日本財団と連携し協力関係を築いた。SV 会主催の第 1 回「SV 帰国報告会」が始まり、SV の活躍がメディアの注目を浴びた。また市民講座では、板橋ふれあい館の共同企画や「さかえ未来塾」の自主企画が、以後の市民講座企画の基盤を創った。

■成長期：「団塊の世代」始り、多岐に亘る活動を展開■

●2007 年、念願であった新宿区立大久保小学校の外国籍子弟支援が年初めに始動した。秋には新宿区 2008 年度協働事業に応募し、SV 会提案の学校支援が採用された。中央区でも活動が始まり、同区の依頼で豪州姉妹都市の中学校親善使節の通訳ガイドを実施した。またこの年は「団塊の世代」が一斉に 60 歳定年を迎える年であった。高齢期雇用就業支援センターと首都圏 4 都県で「定年後海外でボランティアを」と題した巡回セミナーを行った。「かわさき市民アカデミー」では大規模な市民講座「開発支援」を開講した。

SV 経験を活かす会設立総会（JOCV NEWS 2004.03.01）

中央区姉妹都市豪州サザーランド使節団通訳 2007 年 9 月

「SV 経験者に聞く」第 1 回 2008 年 2 月

2008	
2	第１回「ＳＶ経験者に聞く」が地球ひろばで開催
4	新宿区との協働事業始まる（２００８～２００９年度）
4	「総合的な学習の時間」支援で、杉並区教育委員会の委託事業が始まる
7	文科省助成金プロジェクト「子供の居場所作り等」が始動（７月～翌２月）
8	「総合的な学習の時間」の冊子「授業提案書」が完成、学校関係に配付
9	港区立商工会館のビジネス講座「日本の技術力を世界へ」で協力（～翌３月）
10	「横浜国際フェスタ」に初の出展参加（以後毎年）
11	「日本語学習支援」受講中学生、国税庁作文コンクールで新宿区長賞を受賞

2009	
4	ＳＶ会主催の「なんでも相談会」始まる
4	「日本語学習支援」で新宿未来創造財団の委託事業が始まる
5	神奈川県「環境・エネルギー学校派遣事業」に会員提案の２件が合格
5	２００９年度定期総会、理事長に角井信行氏を選出。理事会機能の強化
8	公益信託地球環境日本基金「ボルネオ島野生ドリアン植林」（８月～翌１月）
10	神奈川分科会で「体験発表会」が５０回を迎える。発表内容の冊子化を検討

2010	
1	会員（２名）がボルネオ島で野生ドリアンの植林指導
1	荒川区の小学校長会・中学校校長会に「総合的な学習の時間」支援を働きかけ
4	「総合的な学習の時間」支援で、新宿区教育委員会の委託事業が始まる
7	市民講座のための冊子「もっと知りたい、世界の事情」を発行
7	（財）地方公務員等ライフプラン協会主催セミナーへ講師派遣が始まる
9	中央区トークカフェ「あすなろの木」の第１回講演会に参加
11	冊子「シニアの挑戦！国際協力の現場を語る」（第一集）を発行

2011	
1	「教育活動充実部会」が発足（第１回打合せ）
2	横浜・保土ヶ谷高校１年生４クラスに４会員が出前授業、以後毎年実施
2	鎌倉市生涯学習センターの市民講座（きらら腰越）に参加（翌年きらら鎌倉も）
5	２０１１年度定期総会、理事長に舟田正夫氏を選出
7	ＳＶ会ホームページをグレードアップ
11	東日本大震災協力案件予備調査の実施（岩手県釜石市、大槌市）
12	ＪＩＣＡ横浜で「ＳＶ会の活動写真展」を開催（翌年１月ＪＩＣＡ広尾でも）

2012	
4	冊子（社会貢献編）の編纂始まる（２０１３年春に発行予定）
6	「新規プロジェクト推進委員会」が発足（第１回打合せ）
7	海外日系人協会から日系研修員のホームステイを受け入れ（３会員）
9	ＳＶ会の活動拠点がＪＩＣＡ広尾から中央区「協働ステーション中央」へ
10	会報第１００号を達成。記念特集「草の根外交、研修員のホームステイ」
10	よこはま国際フェスタのＳＶ会ブース、工夫を凝らして大盛況
11	臨時総会で定款変更。活動分野を３分野から８分野へ拡大
12	新規プロジェクト推進委員会とミャンマー現地ＮＧＯとの協力関係が進展

●2008 年には 4 月、新宿区の協働事業が新たに始まり、杉並区の協働事業は2年間の実績の下、委託事業となった。7 月からは文科省の助成で「居場所作り」が始まる。今までの小中学校の出前授業の成果を冊子「授業提案書」に集大成し、学校や教育委員会に配付し、新たな学校の発掘に努めた。子供だけでなくビジネスマン対象に港区立商工会館でビジネス講座「日本の技術を世界へ」に協力した。

●2009 年、SV 会が JICA に提案した「なんでも相談会」が始まる。SV へ応募する人々への支援であり、SV 募集の一助となっている。また新たな試みに挑戦、一会員の努力で地球環境日本基金の助成を受け、翌年マレーシアに会員 2 名を派遣し、途上国支援「ボルネオ植林」を行った。

■変革期：部会・委員会を設置し、新たな活動を推進■

●2010 年 4 月から新宿区の協働事業は委託事業となった。市民講座の拡大のため冊子「もっと知りたい、世界の事情」を作成しアピールに努めた。地方公務員等ライフプラン協会主催の講師派遣に参加、シニアの定年後の人生設計を支援した。体験発表会 50 回を記念してその記録をまとめた冊子「シニアの挑戦！国際協力の現場を語る」（第 1 集）を発行。翌 2011 年にも同第 2 集を発行した。

●2011 年、出前授業や市民講座の拡充を図るため、会員の意見交換の場として「教育活動充実部会」を設置した。新たな市民講座として鎌倉市生涯学習センターに会員が出向き、市民講座を開拓した。この 2 月 SV 会で開拓した保土ヶ谷高校の出前授業は好評で、現在も同校と協力関係が続く。3 月、未曾有の東日本大震災が発生。JICA 施設も一時閉鎖された。SV 会でも震災の支援活動ができないかと、現地に調査団を派遣した。また、市民に広く広報するため会員から写真を公募し、JICA 横浜と JICA 広尾（地球ひろば）で「SV 会活動写真展」を開催し、好評を博した。

●2012 年、海外日系人協会の依頼で会員が日系研修員のホームステイを受け入れ、この特集記事を組んだ会報 100 号が発行された。この年の「よこはま国際フェスタ」の SV 会ブースは多くの市民が参加し大盛況となった。設立初期のような活動を再興するため、定款変更（活動分野の拡大）し、また、「新規プロジェクト推進委員会」を立ち上げ、「ミャンマー支援プロジェクト」が検討された。9 月、JICA 広尾閉鎖に伴い、SV 会の活動拠点が中央区に移った。

横浜国際フェスタ 2009（パシフィコ横浜）2009 年 9 月

㊥&㊦ SV 会の懇親会（“若きシニアたちの第二の青春” 応援歌）2013 年 翠葉&JICA 横浜

第1章　SV 会の歴史（SV 会のあゆみ）

2013											
1	2	4	4	5	5	7	8	10	12		
海外日系人協会から日系研修員のホームステイを受け入れ（４会員）	会員がＪＩＣＡグローバル教育コンクール２０１２（写真映像部門）で受賞	現地ＮＧＯの要請で会員をミャンマー日本大使館付属幼稚園へ紹介	ＪＩＣＡ市ヶ谷で「ＳＶ会の活動写真展」を開催	２０１３年度定例総会、理事長に須山勝彦氏を選出	広報誌「帰国シニアの挑戦～地域社会と世界を結ぶ～」を発行	ＪＩＣＡ二本松・青年海外協力隊訓練所の見学会を実施	横浜市鶴見区役所の要請で外国籍児童生徒の夏休み学習支援を実施	ＪＩＣＡグローバル教育コンクール２０１３（グローバル教育部門）に応募	体験発表会１００回記念パネルディスカッションを実施		

2014											
1	1	3	4	5	5	7	11	12			
「あーすぷらざプロジェクト」委員会の発足	ＳＶ会（有志）ミャンマー視察旅行	冊子「シニアの挑戦！国際協力の現場を語る」（第三集）を発行	ＹＯＫＥの依頼で横浜市（南区、中区）の外国籍中学生の学習支援に参加	あーすぷらざ市民講座の開催（第一回）	出前講座委員会の発足・・・包括的検討始まる	「ＳＶ帰国報告会」の新しい試み・・・茶話会を導入	日本セカンドライフ協会の市民講座を会員が引き継ぐ	会員向け「公式資料保存庫」の開設			

2015											
2	5	6	6	7	9	11	11	12			
会員向け「出前講座資料館」の開設。講座履歴とプレゼン資料登録	２０１５年度定例総会、理事長に須山勝彦氏を再選（二期目）	東京地区の「会員のひろば」を再開	かながわ国際交流財団の依頼で会員が在県留学生の「サポートファミリー」に	朝日新聞（全国版）にＳＶ会が紹介される	ＳＶ会パンフレット（リーフレット版）を発行	ＳＶ会の活動拠点が中央区「協働ステーション中央」からＪＩＣＡ東京へ	ＳＶ会、ＪＯＣＶ発足５０周年式典でＪＩＣＡ理事長特別表彰盾を受賞	「日本とキルギスを繋ぐ友好チャリティーコンサート」をＳＶ会が支援			

2016									
3	3	4	5	6	6	10	10		
「ＪＩＣＡ研修員の通訳業務」をＳＶ会が請け負う	ＳＶ会初のお花見会（千鳥ヶ淵公園）・・・以後、定例化	ＳＶ会のロゴマーク制定	プロジェクトマネージャー（ＰＭ）制が本格的始動	「東京オリパラ教育推進支援事業」へ参加、講座登録２件（単独、ペア）	(株)栄光の新宿区外国籍中学生学習支援に会員が参加	ＳＶ会、第１２回ＪＩＣＡ理事長賞を受賞	第一回東京オリパラ出前授業を実施（板橋区立小学校）		

■安定期：東京地区の活動は中央区を拠点に■

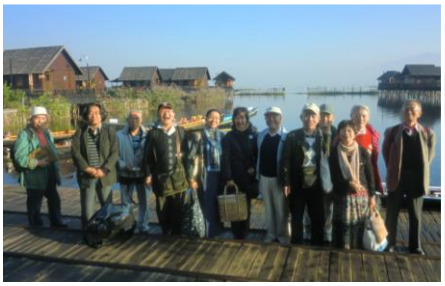
●2013 年、前年のミャンマー支援プロジェクトが実を結び、会員をミャンマーに派遣した。また、会員がグローバル教育コンクールに応募し見事入賞。そこで、会も総力を挙げ、杉並新宿プロジェクトの成果をまとめて、入賞をめざした。前年から手掛けた広報誌はこの年 5 月に完成。社会に SV 会の存在をアピールした。このような活動は会にとって初めてであり、以後の活動の羅針盤となる。

●2014 年は、SV 会創立 10 周年。この年は大きな事業があった。市民講座の開拓と出前講座委員会の設置である。市民講座では、神奈川県立あーすぷらざに働きかけ、JICA 横浜の協賛を得て、「あーすぷらざ」市民講座を開拓した。これは大きな成果を生み、2018 年まで 18 回開催され、以後の SV 会市民講座活動を牽引した。出前講座では、その在り方が議論になり、出前講座委員会が設置された。開かれた出前講座を目指して包括的な検討が始まり、講座履歴やプレゼン資料を収納する「資料館」の建設も始まった。これを機に、会の公式資料などを一元的に管理する「保存庫」もできた。また、横浜国際交流協会の呼びかけで、神奈川地区で初めて本格的な外国籍生徒の放課後学習支援に取り組み、2018 年度まで 5 年間続いた。会員有志のミャンマー視察旅行も、SV 会で初めて企画実施された。

●2015 年、念願の「資料館」がオープン。会員がホームページでいつでも出前講座資料や公式資料を検索できるシステムが出来上がったことは画期的であった。かながわ国際交流財団の依頼により「サポートファミリー」事業に参加し、会員たちが親代わりに留学生の日本での生活を支援した。SV 会が初めて全国紙朝日新聞一面に取り上げられ、また JOCV 発足 50 周年式典で JICA 理事長特別表彰楯を受賞した。11 月、東京地区の活動拠点が中央区ボランティア施設から 3 年 2 か月振りに JICA 施設に戻り、その後 JICA 東京との連携が一段と進むことになる。

■成熟期：JICA との連携の下、活動進む■

●2016 年、JICA 東京の研修員出前授業の通訳が SV 会へ委託された。都教育委員会の東京オリパラ事業が始まり、JICA 東京と共に参加。国際理解教育の講座登録を行うと、秋には第一号のオリパラ出前授業の依頼が舞い込み、現在まで多くの小中学校から依頼を受けている。また以前から



SV 会（有志）ミャンマー視察旅行 2014 年 1 月　SV 会初のお花見会（千鳥ヶ淵公園）2016 年 3 月　第 12 回理事長賞受賞（漆塗りの写真立て）2016 年 10 月

2017														2018												2019											
10	12	1	1	1	1	2	4	5	6	7	8	10	12	12	4	4	4	6	6	7	7	9	12	2	3	3	3	4	4	5	5	9	9	11	12
「ＳＶ帰国報告会」再開・・ＰＭ制を導入	『クロスロード２０１６』に翻訳プロジェクトおよびＳＶ会が紹介される	ＪＩＣＡ副理事長（越川和彦氏）が「会員のひろば」で特別講演	南富士㈱の要請で会員をハノイ工業大学（ベトナム）へ紹介	ＳＶ会独自の「講師派遣依頼書」を制定	出前講座資料館の大規模改修（分野別分類等）	「ＪＩＣＡ研修員」参加の御成中プロジェクトが始まる（以後毎年）	介護技能実習生支援プロジェクト、会認定で是非論争	２０１７年度定例総会、理事長に政金驍氏を選出	四者（ＳＶ会・ＪＩＣＡ・研修員・御成中）による御成中プロ報告会を開催	ＳＶ会（有志）キルギス視察旅行	翻訳プロジェクト、読売教育賞に応募	出前講座の「講師プロフィール」登録を開始	冊子「シニアの挑戦！」（第四集）を発行、国内外ＪＩＣＡ事務所に寄贈	民間企業との連携（パートナーシップ）について是非論争（～２月）	出前講座の「講師選定基準」を制定	湘南ビーチＦＭで、ＳＶ会員のライブトークショー始まる（隔月）	翻訳プロジェクト、翻訳ＰＭ＆協力者による新体制へ移行	定例会運営を月４回から２回へダウンサイジング	在日外国人支援（翻訳、学習支援）で文部科学省を訪問、政策提言	河野外務大臣主催レセプションに招待され、役員参加	「中小企業海外展開支援」プロジェクトが発足	ＪＩＣＡ東京の出前講師募集・講師選定は「ＳＶ会からＪＩＣＡへ」と変わる	『平成最後の年末、大いに語ろう会』を実施	１５周年記念誌編集委員会の発足	出前講座委員会が外部雑誌「社会教育」に初寄稿・・・シニアの挑戦	ＳＶ会事務所を移転（千代田区紀尾井町（㈱ＶＳＯＣ）から平河町へ）	ＪＩＣＡ研修員プロジェクト、ＭＲＡハウスから助成金を受ける	ＳＶ会初の会員向け大規模アンケートを実施、回収率９０％に迫る	ＪＩＣＡ研修員出前授業プロモーションビデオ（ＡＩナレーション付）を制作	創立１５周年記念座談会を開催・・創立期その時代を語る	２０１９年度定例総会、理事長に鈴木新氏を選出。１５周年記念式典を挙行	ＳＶ会ホームページの更新（サーバー移設、スマホ・動画への対応）	出前講座委員会、１００回目。「１００回記念大会」を開催	季刊誌『エール』から「人の役に立つ生き方」について取材を受ける	創立１５周年記念誌「帰国シニアの挑戦～１５年間のあゆみ～」を発行

試行していた PM 制がこの年本格化し、以後、会員による自律的なプロジェクト活動（御成中プロ、翻訳プロ、学習支援プロ等）が華々しく展開されていく。新規会員の獲得をめざし、凍結されていた「SV 帰国報告会」も再開された。また、この年も前年に続き、JICA 理事長賞を受賞した。

●2017 年：出前講座委員会では以前から出前講座講師選定について透明性・公平性の観点から改革の議論がされてきた。この年、講師希望者は予め講師プロフィールを登録し、翌年、講師選定基準に基づいて講師を決めるシステムを採用した。また、JICA と協議し、SV 会の出前授業に研修員が参加することが認められ、御成中学校プロジェクトが始まった。2015 年度から拡大した翻訳プロジェクトも、翻訳開始 10 周年を機に総括を兼ね読売教育賞に応募した。冊子「シニアの挑戦」第 4 集を出版し、国内外 JICA 事務所（海外 20 か国）へ配付した。この年は技能実習生支援事業や民間企業連携についての是非論争が興った。

●2018 年：会員の高齢化に伴い、理事会では会の運営の簡素化を検討し、月 4 回の定例会は 2 回とし、2014 年から 18 回続いた「あーすぷらざ」もよこはま国際フェスタと統合し、この年をもって休止となった。翻訳プロジェクトも高齢化で困難に直面したが、協力会員を募り新体制で乗り越えた。翻訳問題など在日外国人支援について文科省に政策提言を行った。また、JICA 東京の出前講座管理業務の改革により、講師募集・講師選定の主体は「SV 会から JICA へ」と変わった。新たな試みとして、中小企業海外展開支援プロジェクトを立ち上げ、また、湘南ビーチ FM で SV 会員によるライブトークショー（定期番組）が始まった。

■創立 15 周年：明日に向かって、新たな取り組み■

●2019 年、15 周年を迎え、記念誌の刊行が計画され編集委員会が発足した。定期総会では記念式典を行い、創立期に功労のあった会員や関係者に感謝状が贈られた。記念座談会も行われ、創立当時の様子を語り合い、当時の思いを後世に繋いだ。近年会員の減少傾向が続き、活性化に向けて会員の意識調査（大規模アンケート）が実施された。また、SV 会ホームページが時世を反映しスマホでも見られるよう大幅に改善された。こうして、15 周年記念誌の発行と併せて、外部世界への情報発信が強化され、令和の新しい時代に向けた取り組みが行われている。

JICA 横浜・研修員バトミントン交流会 2017 年 11 月

SV 会事務所移転（千代田区平河町）2019 年 3 月

2019 年度総会（15 周年記念講演）2019 年 5 月

2019 年度上期「SV 帰国報告会」　2019 年 6 月 1 日　JICA 東京

SV 会は創立以来 JICA から有形無形の支援を頂いているが、SV 会も JICA を支援している。本稿では、「ボランティア事業」を中心に、SV 会の JICA に対する支援について述べよう。最後に、最近の支援活動についても触れる。

JICA支援活動は、今日のSV会の礎を造る

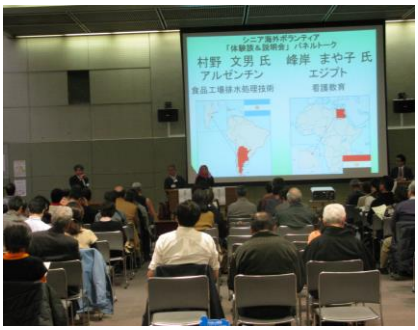
SV 会は JICA ボランティア事業最盛期の頃の 2004 年 1 月に設立された。しかし、SV 会設立当時と現在（2019 年）とは JICA を取り巻く環境が変わってきた･･･①ODA 予算低減の中でボランティア制度の変更、②JICA ボランティアに応募する市民の減少傾向、③民間委託により JICA 管理業務の一部が民間企業へ委託された、④JICA 事業はボランティア事業だけでなく、民間連携・中小企業海外展開支援など広範な活動へと広がった。

SV 会は創立以来、JICA とどう関わって来たか、JICA を取り巻く環境変化の中で、会の JICA 支援活動 15 年の歴史を見ていこう。

■SV 募集の支援活動･･･時代の流れの中で終焉■

SV 会は、創立間もない 3 月下旬に JICA 各機関を訪問し、「ボランティア精神に則り、JICA ボランティア活動の活性化に寄与したい」と JICA ボランティア事業への協力を提案した。早速、JICA から 4 月に始まる 2004 年度 SV 春募集への講師派遣の要請があり、ここから SV 会の JICA への協力が始まる。

「パネルトーク」、「よろず相談」･･･2004 年度春は、関東地方 15 会場で開かれた SV 募集説明会に会員 24 名が協力した。SV 会の提案で募集説明会は秋からパネリストと司会者による「パネルトーク」の形になった。



SV 募集説明会のパネルトーク（2012 年春募集）

その後、「よろず相談員」のアイデアが出て、SV 会員は JICA と現地の活動や生活の相談に乗った。「よろず相談員」は SV 会の自主的な協力であったが、翌 2005 年度春から募集説明会の中に正式に採用された。以後毎年春秋 2 回、首都圏近郊の 10 数会場に、延 40 名程の会員をパネリスト・よろず相談員として派遣した。来場者に「自分でもできそうだ」と自信を持たせて、来場者の背中を押した。多くの SV 応募に繋がった。

「なんでも相談会」･･･　JICA 横浜の賛同を得て、2009 年度春から SV 募集期間中に常設コーナーを設け、SV 会独自の「なんでも相談会」を実施した。翌年度から JICA 広尾でも実施して、常設コーナーには延 50 名程の会員が相談員として詰め、SV をめざす市民の相談に乗った。1 時間以上熱心に相談し、満足して帰られる市民も多かった。

行政の民間委託の流れの中で、JICA の SV 募集説明会業務の一部も 2015 年頃から民間委託され、創立期から続く SV 会の組織的支援活動は 10 年余で終焉した。しかし、多くの会員が結集したこの支援活動の経験は“会の大きな財産”となって、今日の SV 会の礎を造った。

■SV 活動の広報･･･SV 会の提案から始まる■

シニアボランティアの活動を市民にアピールすることは、JICA の主要業務のひとつである。その中で SV 会が組織を挙げて、

「なんでも相談会」チラシ 2010 春

第2部　SV 会の活動（JICA 支援）

JICA と協力して実施してきた 3 つの活動「SV 帰国報告会」、「SV 経験者に聞く」、「SV 活動写真展」を紹介する。

「SV 帰国報告会」･･･ SV 会は 2006 年 6 月、シニアボランティアの途上国での活動の様子を広く一般市民に報告する「SV 帰国報告会」の共催について JICA に提案。2006 年 8 月に JICA 地球ひろばで第 1 回帰国報告会が実現した。直近の帰国者 10 名の SV が活動を報告し、多くの市民が押し寄せ熱気に沸いた。この年は「団塊の世代」が定年に差し掛かる頃で、メディアの注目を浴びた。その後、毎年春秋の年 2 回の開催が定着した。

2012 年 9 月、JICA 広尾の閉鎖に伴い、2012 年度下期は JICA 横浜、2013 年度上期からは JICA 市ヶ谷（地球ひろば）となり 2014 年度まで続いた。この頃 SV 帰国報告会に茶話会を導入し発表者と親睦を深めた。

その後一時休止となったが、会員を増やすためにも必要との判断から、2016 年度下期から JICA 東京で再開した。2019 年度は JICA ボランティア制度改革の初年度で、下期は「JICA 青年／シニア海外協力隊」として初の合同報告会を開催した。

「SV 経験者に聞く」･･･SV 会の提案により、地球ひろばの企画展示を盛り上げる目的で始まった。2008 年 2 月の第 1 回は「インフラ開発」の展示テーマでボリビア、セントルシアについて会員が講演した。その後「アフリカ」、「地球環境」、「世界の食糧事情」など展示テーマに合わせた講演会を、そのテーマにふさわしい会員が協力した。2010 年から地球ひろばで「月間国別展示」が始まり、その国を任国とする会員たちがリレー式に講演した。

その後、2012 年度は「SV 応募促進」に目的を変更し、会員が現地の活動や生活などについて報告することにしたが、来場者は少なく、その後「SV 経験者に聞く」は、2012 年度末の講演をもって 31 回で終了し、2014 年 5 月から始まる「あーすぷらざ」へ引き継がれた。

「SV 活動の写真展、冊子化」･･･SV 活動を広く一般市民に知らせると共に、帰国後の社会還元活動についても知ってもらおうとの趣旨の「SV 活動写真展」を 2011 年 12 月 JICA 横浜で、2012 年 1 月 JICA 広尾で、2013 年 4 月 JICA 市ヶ谷で開催した。会員が提供したそれぞれの写真には、任国への思いが込められている。

また SV 会では、会員の途上国での活動の様子をまとめた冊子「シニアの挑戦！国際協力の現場を語る」第 1 集を 2010 年 11 月に、その後、第 2 集、第 3 集を出版した。2018 年 12 月出版の第 4 集は、JICA 東京を通じて世界各国の JICA 海外事務所、および国内事務所に送付され、“SV 活動の広報”の一翼を担った。

■出前講座への協力･･･研修員プロジェクト興る■

SV 会創立期から、JICA から SV 会へ出前講座の講師依頼が来ていた。SV 会では会員から講師募集を行うと共に講師選定も行い、JICA の出前講座事業に協力してきた。しかし、JICA 管理業務の民間委託の流れの中で、2018 年、JICA 東京の出前講座の管理業務も民間委託され、SV 会で実施してきた出前講師募集・選定は、SV 会の手を離れた。

2016 年、JICA 東京で新たな状況が生まれた。JICA 研修員出前授業の通訳業務が SV 会に委託された。また、2017 年から SV 会独自の出前授業に研修員の参加が認められ、JICA 研修員プロジェクトが始動し、現在活発に行われている。SV 会では研修員出前授業の様子をビデオにとり、JICA の研修員施策に活かせるよう協力をしている。

■新たな事業･･･中小企業海外展開支援■

近年、JICA 事業は、単なる途上国援助だけではなく、広範な活動へと変化した。中小企業の海外展開支援はその一環であろう。SV 会でも 2018 年 7 月、関心のある SV を中心に「中小企業海外展開支援プロジェクト」を立ち上げた。任国事情に詳しい SV の活躍が期待される。

SV 経験者に聞く（JICA 広尾 2012 年 7 月）

SV 活動写真展（JICA 広尾 2012 年 1 月）

SV 帰国報告会・茶話会（JICA 市ヶ谷 2014 年 7 月）

グローバルフェスタ・協力隊まつり

東京地域

首都圏で行われる２つの国際協力のイベント（グローバルフェスタと協力隊まつり）に 2006 年から参加。市民への“国際協力の啓発活動”を行ってきた。若い世代や子供向け企画に力を注ぐ

グローバルフェスタ 2017 の SV 会ブース

国際協力の啓発活動、首都圏で2つのイベント

■グローバルフェスタ･･･2006 年第 16 回から参加■

グローバルフェスタは一般市民に国際協力をより身近に感じてもらうことを目的に、外務省、JICA、JANIC（国際協力 NGO センター）の共催で、1990 年から毎年 10 月初めに日比谷公園で開催されてきた。当会は 2006 年の第 16 回から参加している。年々参加団体が増え、2015 年からはお台場センタープロムナードに開催場所を移し開催されている。2017 年には各国大使館、国際機関、政府機関、協賛企業、NGO/NPO など約 260 団体が出展し、来場者は 2 日間で約 12 万人であった。

JICA ボランティア（海外協力隊）の OB 会約 30 団体で会場の 1 区画を貰い、JICA ボランティアの啓発と広報活動を担っている。当会では会員の活動を写真パネルで掲示し、来場者に現地での活動や生活文化を紹介し、また秋の SV 募集期間中なので個別応募相談コーナーを設け、会員が自分の体験を基に受験準備や現地活動についてアドバイスを行った。

2017 年からは SV の活動紹介と応募相談に加え、国際協力に家族で親しんでもらう目的で子供向け企画「世界を知ろう」と題して、国旗の国当てクイズ、世界おもしろクイズ、世界のあいさつシートなど実施し、参加してくれた子供たちには記念として、世界のコインや人形などの景品を差し上げた。

グローバルフェスタ 2017 で国当てゲームを楽しむ親子

■協力隊まつり･･･2007 年第 1 回から参加■

JICA ボランティア経験者のネットワーク強化と JICA ボランティア事業の啓発と広報を目的に、2007 年 4 月第 1 回協力隊まつりが JICA 地球ひろば（広尾）で開催され、当会も OB 会の一員として出展した。しかし 2012 年 7 月で JICA 広尾が国庫返納のため閉鎖され、適当な会場が見つからなかったため第 6 回までで中断された。

2015 年の青年海外協力隊 50 周年を機に、OB 会有志の間で、協力隊まつりを再開しようという機運が盛り上がり、JICA 地球ひろば（市ヶ谷）で、OB 会有志 10 数名の実行委員会が中心となり協力隊まつりを再開した。当会も実行委員として開催準備や当日の運営に関わっている。2015 年の開催は 2 日間で 1200 人の来場者があり、次年度も開催することになった。2017 年からは出展団体のブースを玄関前、1 階、2 階に集め一体感を出し、6 階をセミナー会場にした。毎年開催することにより 2 日間の来場者が 2000 人以上に増え、JICA 地球ひろばの子供向けワークショップ、協力隊事務局の個別応募相談、J’s カフェのエスニックランチとの連携もうまく機能するようになった。

来場者は子供からシニアまで幅広い年代にわたり、JICA 経験者だけでなく国際協力活動に関心のある中高生、大学生が多く来場している。

協力隊まつり 2019 で SV 応募相談を担当する会員

よこはま国際フェスタ・フォーラム

神奈川地域

ファラオ像：エジプト大使館の協力

2008 年から前身である「横浜国際フェスタ」に参加。SV 会の特徴を活かしたキャッチフレーズ「えっ！そんな国あるの？」で、子供たちに「驚きと感動」を伝えた。
近年、フェスタでは写真展やワークショップを、フォーラムでは会員によるパネルトークを、実施している。

よこはま国際フェスタ 2012 年 10 月

「えっ！そんな国あるの？」、驚きと感動を伝える

■2008 年から出展参加、企画委員会で検討■

2008 年 10 月、2009 年 9 月、パシフィコ横浜で開催された「横浜国際フェスタ」に SV 会は出展参加した。

外国籍住民の多い神奈川県。国際交流と多文化共生をめざして多くの民族団体、NGO、市民ボランティアが参画。この催しは SV 会の社会貢献活動ともマッチしているので、早速、企画委員会を設けて出展内容を組み立てた。SV 会の特徴と言えば、会員が JICA ボランティアとして一般の人になじみの薄い開発途上国へ赴任したことだ。そこで、キャッチフレーズは「えっ！そんな国あるの？」。赴任国を紹介する「驚きと感動の写真」300 枚が会員から集まった。

■2010 年 10 月、新装「よこはま国際フェスタ」■

2010 年 10 月、フェスタは会場を「象の鼻パーク」に移し名称を「よこはま国際フェスタ」と変えて実施された。2011 年 2 月、JICA 横浜で「よこはま国際フォーラム」がフェスタから独立、新たにスタートした。その後、「よこはま国際フェスタ・フォーラム」は、フェスタ 10 月、フォーラム 2 月のパターンが定着、今日に至っている。

「象の鼻パーク」･･･ブース出展の内容は、拡大プリントした写真パネルの掲示、パソコンの画面で見せるスライド写真、大型世界地図の掲示、ブース前では「クイズに答えて世界のコインをゲット！」コーナーを作り、民族衣装や帽子を着用した会員が呼びかける、賑やかなブース出展の基本形ができた。コーナーは子供連れを中心に毎回大人気となっている。会員によるギャラリートーク、任国の友人、留学生の出演やワークショップなどで、楽しい内容が益々進化した。

「グランモール公園」･･･2016 年からはフェスタ会場をみなとみらい「グランモール公園・美術の広場」に移し、新たな雰囲気のもとで毎年活況を呈している。会場は大型商業施設「MARK IS みなとみらい」に隣接し、みなとみらい駅前の好立地ということもあり、ショッピングに訪れたファミリーなどが気軽に参加でき、毎年、賑わいを見せている。

■JICA 横浜で「よこはま国際フォーラム」■

2011 年から毎年 2 月に JICA 横浜で行われる「よこはま国際フォーラム」では国際協力・多文化共生について約 50 講座が 2 日間にわたって開催され、講演会、報告会、ワークショップなど豊富な内容となっている。

SV 会では毎年 4～7 名の JICA ボランティア経験者によるパネルトークを開催し、国際貢献に関心を持つ参加者とともに活発な質疑応答が繰り広げられている。

「よこはま国際フェスタ・フォーラム」は国際協力・多文化共生に関心を持つ人々のイベントとして定着し、今後益々の発展が期待される。

よこはま国際フェスタ 2017 年 10 月（SV 会ブース）

よこはま国際フォーラム 2017 年 2 月（パネルトーク）

杉並・新宿プロジェクト

SV 会は創成期に、杉並区教育委員会、新宿区教育委員会から小中学校の出前授業を受託し、この出前授業は、現在、我が会の基幹プロジェクトとなる。会員と留学生とのペア授業や、会員たちの工夫を凝らした出前授業は児童生徒に人気だ。

「国際理解教育」
杉並区立杉並第八小学校 2018 年 9 月

SV会の出前授業を牽引する杉並・新宿プロジェクト

SV 会は、杉並区は 2006 年度から、新宿区は 2008 年度から、小中学校の出前授業を協働事業・委託事業として受託してきたが、その両者は契約方法において若干の差はあるものの、授業内容においては共通部分が多い。

■協働事業から委託事業へ。現在へと続く■

①杉並区の場合･･･国際理解を深め、豊かな人間づくり

2005 年秋、東京都杉並区は区の事業として協働事業の募集を、区民を対象として呼びかけた。SV 会は杉並区民である藤谷会員を発起人として応募し、2006 年度杉並区との協働事業として参画することになった。提案事業として、区内の各小中学校の児童生徒を対象とした『小・中学校の「総合的な学習の時間」への授業協力～国際理解を深め、豊かな人間づくりをめざす教育の推進～』を掲げた。

杉並区教育委員会と連携しながら、学校の希望に沿った授業を工夫して臨んだ。会員が派遣された任国の紹介、ボランティア活動の紹介、会員それぞれの生き方を基にしたキャリア教育、日本以外の国の実情と比較しながらの環境問題等、学校の教員ではなかなか取り組めない分野を、視覚的にも訴えながら実践した。

2 年間の協働事業期間を経て、2008 年度に杉並区委託事業『「総合的な学習の時間」における授業実施委託』として新たな歩みを始めることになった。単年度契約ではあるが、現在まで毎年度継続されている。学校によっては、「国際理解授業を SV 会にお世話になって進めるとよい」との評もあり、その立ち位置が確立されつつある。

②新宿区の場合･･･外国籍児童生徒を踏まえた提案

2007 年秋に、杉並区と同様に新宿区が協働事業を募集した。杉並区での経験を基に『学校教育における「総合的な学習の時間」への授業協力及び外国籍児童・父母への教育的支援と「居場所探し」』という提案事業を提出した。新宿区には外国にルーツをもつ児童生徒が多く住んでいる現実、保護者の仕事等から一時期であれ、日本で生活し学習している児童生徒が多いことを踏まえた提案であった。2008 年度から 2 年間、新宿区の協働事業として採択され、授業だけに限らず外国籍児童生徒への放課後支援、保護者支援などにも取り組んだ。

協働事業実施後、2010 年度から新宿区委託事業として『「総合的な学習の時間」への授業提案及び外国籍児童等への支援事業委託』という件名をもって採択された。契約は単価契約で扱われ現在も継続されている。教員の異動があっても、その異動先の学校から依頼されたり、キャリア教育では「SV 会の人材を活用するとよりよい学習効果がある」と引き継がれたりしている学校もある。

「国際理解教育」　杉並区立杉並第九小学校 2017 年 6 月　　新宿区立牛込仲之小学校 2018 年 12 月

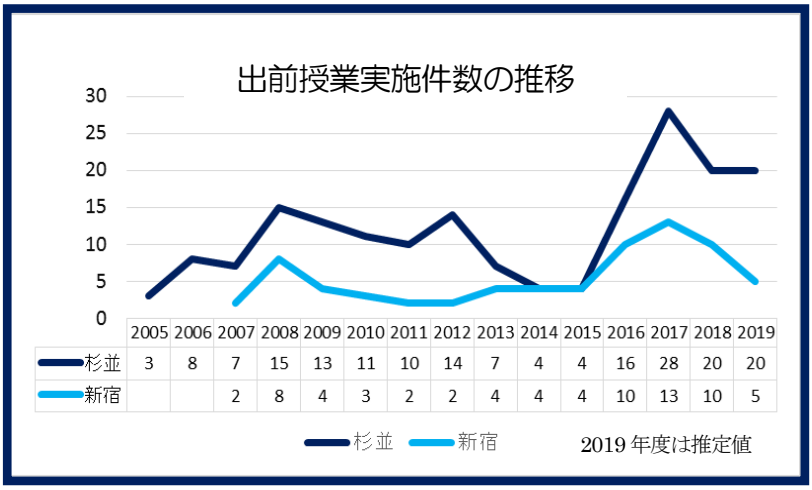
第2章　SV 会の活動（出前授業）

■児童生徒に分かりやすい授業をめざす■

学校の先生方に SV 会がどのような授業を提供できるのか、『授業提案書』（初版 2008 年 8 月、最新版 2019 年 4 月）を作成して各学校に配布するようにした。SV 会としては PR 活動につながり、また学校現場では授業をイメージする一助になると好評である。

①　国際理解教育･･･“ペア授業”が人気

会員は派遣された任国の紹介をする際、実物を示したり、映像を使ったりして分かりやすい授業を心がけた。「事前に調べても分からなかったことを知ることができた」「実際の生活の様子がよく分かった」など好評であった。また、留学生や在日の方と会員がペアを組んで授業に取り組んだところ、その国の言葉を実際に聞き交流する機会を得たことや、目の前にその国の方がいるという現実から、児童生徒のみならず教師の方々からも大いに喜ばれている。



	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
杉並	3	8	7	15	13	11	10	14	7	4	4	16	28	20	20
新宿			2	8	4	3	2	2	4	4	4	10	13	10	5

2020 年にオリンピック、パラリンピックが東京を中心として開催されることが決定して以降、教育現場でも今まで以上に日本以外の国や地域の様子や文化の違い、スポーツについて学ぼうとする姿勢が強くなった。それに伴い、ペア授業を希望する学校が多くなった。ペアを探す会員も多くみられるようになった。ここ 1～2 年は中学校からの依頼も増加傾向にある。中学生には、あえて留学生等に英語でのレクチャーの部分を多くしてもらい、英語教育の実践を試みていることもある。

しかしその一方、オリンピック終了後、国際理解授業依頼がどうなるか。学校の授業指導時数とのかかわりもあり気になるところである。

②　キャリア教育･･･経験を熱っぽく語る

小学校 6 年生や中学生では自分の生き方や職業選択についての学習がある。その時に SV 会の様々な経歴を持った人たちから、小・中学生のころの夢と現実の違いや、どうして海外でのボランティアを考えるようになったのか等を聞きたいという要望が出された。まさにわが会のメンバーの出番である。複数の会員から話を聞き、いろいろな生き方があることを子供たちは知る。少人数グループでじっくり話し合ったり、パネルトークの形式で複数の講師から話を聞いたりすることもある。予定した通りにいかないことも多く、事前の打ち合わせを綿密にして取り組んでいる。

講師たちは「夢は必ずかなう」「英語をしっかり勉強しておこう」など、自分の経験を熱っぽく語り、児童生徒に対し励ましの言葉を送っている。

③　課題別の授業等･･･世界の事業を加味して

「水」「ゴミ」「環境」「食糧」「国際協力」「平和」等々、小・中学校の指導計画を基にした依頼が来ることがある。世界の実情を加味した話を児童生徒に聞かせてほしいとの願いからである。要請にこたえられる会員は限られるが、SV 会は学校の要請に真摯に応えようと努力している。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

【注記】グラフ「出前授業実施件数の推移」は、出前授業の依頼件数の推移を表している。１回の依頼で複数授業をまとめて依頼する場合でも、依頼件数は１件としている。杉並 2005 年度、新宿 2007 年度は、契約前の SV 会による自主事業である。東京オリパラ開催を控え、2016 年度から急増している。

「国際理解教育」新宿区立天神小学校 2017 年 9 月　「キャリア教育」杉並区立杉並第三小学校 2017 年 12 月　授業提案書（最新版）2019 年 4 月

鎌倉市立御成中学校からの要請で、英語による「JICA 研修員プロジェクト」が始まる。このプロジェクトは JICA の協力を得て、SV 会がコーディネートする出前授業である。鎌倉から横浜、川崎、横須賀へと拡がり、出前授業の新しい潮流となった。

2019 年 3 月：御成中出前授業（3 年生）

出前授業の新しい潮流、JICA研修員による英語教育

2016 年 1 月鎌倉市立御成中学校から「英語教育の一環として外国人と出前授業をやってほしい」との依頼があり、知り合いの在日外国人にお願いし、御成中出前授業が始まった。翌年度は多くの外国人の参加が必要となり、JICA 東京に相談。SV 会主催の出前授業に JICA 研修員の参加を認めて貰い、2017 年 2 月に“研修員参加の出前授業”が実現した。同校では毎年恒例の授業となった。JICA も「研修員の社会参加」の一環として積極的だ。

■鎌倉市立御成中の事例･･･体育館は異文化空間■

2017 年 2 月に行われた初めての研修員参加の出前授業を見てみよう。研修員は大学院で学ぶ留学生、自国のエリートたちだ。3 年生 120 名の生徒が体育館に集合。研修員 1 名と生徒 10 名が一組となり、12 組が車座になった。民族衣装を纏った研修員が自国の文化などを英語で紹介し生徒たちは英語で対話を楽しんだ。また、「百人一首」では、研修員は歌詠みにも挑戦、微笑ましい笑いの渦があちこちで起こった。12 組が一斉に対話する体育館は、世界 10 か国の異文化空間だ。出前授業終了後の 6 月、JICA 東京で関係者が一堂に会して、御成中出前授業の報告会を開催した。当日の出前授業のビデオが上映され、研修員に SV 会から写真集、生徒から感想文がプレゼントされた。感想文には自分の夢や研修員の国への憧れが英語で綴られていた。

■2019 年度、助成金を受け、神奈川全体に拡大■

2018 年度は横浜市立牛久保小へ広がった。2019 年度には MRA ハウスの助成金を受け、川崎、横須賀へ拡大、計画も含め出前授業は 4 市の小中高 5 校で延 6 回となった。「JICA 研修員プロジェクト」と名称を変え、SV 会の出前授業の新しい潮流となった。9 月川崎市立岡上小学校で、小学校英語教育を先取りする形で行われ、児童たちは研修員と英語で交流を楽しんだ。12 月私立聖光学院で、生徒たちは研修員と途上国の課題について英語で議論を行った。

『子供はその国の未来を映す鏡である』。日本の子供たちと接した研修員たちには、日本の未来、母国の未来がどのように映ったであろうか。研修員の帰国後の国造りで、この経験が活かされることを期待したい。

本プロジェクトでは、各メンバーは其々特技（通訳、調整、映像･･･）を活かし、PM は毎年みんなの持ち回りで実施している（PM：広内⇒舟田⇒木場⇒野口⇒永見）。

	実施日	学校	研修員	他
1	2016年03月23日	鎌倉市立御成中学校（2年生）	0	4
2	2017年02月24日	鎌倉市立御成中学校（3年生）	12	
3	2018年02月23日	鎌倉市立御成中学校（3年生）	14	
4	2018年03月20日	鎌倉市立御成中学校（2年生）	4	
5	2018年09月10日	横浜市立牛久保小学校（6年生）	6	
6	2019年03月01日	鎌倉市立御成中学校（3年生）	10	2
7	2019年03月20日	鎌倉市立御成中学校（2年生）	3	
8	2019年09月19日	川崎市立岡上小学校(6年生)	4	
9	2019年12月15日	横浜・私立聖光学院（高校生）	4	
10	2020年02月26日	横浜市立東山田中学校（3年生）	4	予定
11	2020年03月03日	鎌倉市立御成中学校（3年生）	9	予定
12	2020年03月17日	横須賀市立池上中学校（2年生）	9	予定
13	2020年03月23日	鎌倉市立御成中学校（2年生）	8	予定

2019 年 9 月：岡上小学校出前授業（6 年生）

東京オリパラ・プロジェクト

2016 年度から東京オリンピック・パラリンピック出前授業の教育支援プログラムが始まり、SV 会はこのプログラムにオリパラ出前授業の講座登録を行った。2016 年 10 月、板橋区立成増小学校で第 1 回のオリパラ出前授業を行い、2019 年 12 月まで、都内の小中学校で 20 回のオリパラ出前授業を実施している。

マラウイ留学生とのペア授業
（2018 年 2 月、板橋区立志村第四小学校）

異文化に、子供たちは、驚き、感動、そして笑顔に

■都教育委員会の教育支援プログラムに参加■

2020 年の東京オリンピック・パラリンピック（以下東京オリパラ）開催を機に、東京都教育委員会では小中高の児童・生徒への教育活動の展開として「ボランティアマインド・障害者理解・スポーツ志向・日本人の自覚と誇り・豊かな国際感覚」の育成を謳い、体験活動を取り入れることの重要性を考えて、東京オリパラ教育推進支援事業に着手した。その一環として都内の公立小中高を対象に 2016 年 4 月より東京オリパラ出前授業の教育支援プログラムが稼働し始めた。5 月末に JICA 東京よりお声がけを頂き、SV 会にもエントリーの打診があり、参加を決めた。

■２つの国際理解講座を登録、SV 会の講座が好評■

SV 会としては 2 つの出前授業のスタイル（①当会会員による単独講座、②会員と在日留学生等とのペア講座）で登録することにした。競合する登録団体は、当初 38 団体（日本ユニセフ、日本赤十字社、NPO や企業等）であったが、期を重ねるごとに増え、69 団体となった。

そうした中、オリパラ広報冊子に掲載された SV 会の登録講座を見て、SV 会に依頼する学校が増え、2019 年 12 月末までに 20 件（単独 5 件、ペア 15 件）の依頼があり、好評である。また他に、JICA 東京から SV 会へオリパラ講座の依頼が 8 件あった。

■会で情報共有。講師も切磋琢磨■

講師の機会を得た当会員やペア相手（在日留学生等）は、事前の準備を行い、授業を受ける児童生徒や学校側に満足して頂けるようにと精一杯の努力をし、学校とも調整した。また、SV 会内での情報共有を通してお互いの更なるレベルアップを計るよう心掛けた。その取り組み方についても、出前講座委員会において検討を続けて、SV 会員の出前講師候補としてのプロフィール等の整備を行い、効率よく対応できるよう今後に備えた。

■民族衣装をまとい、その国の文化等を紹介■

実際に東京オリパラ事務局を通した学校からの依頼は様々な国に及んでいる。なかでも人気のあるのはペア講座である。対象は小学 1，2 年生から 5、6 年生、中学生の子供たち。担当する講師ペアは、対象の学年に合うよう内容（国の紹介、国旗、食べ物、挨拶など）を検討し、熱の入った講座作りに工夫を凝らしている。在日留学生が民族衣装を着て、その国の踊りや遊びの紹介、楽器演奏などは、子供たちにとって初めて知ることが多く、驚き、感動の連続である。そして児童・生徒たちには笑顔が溢れる。

㊧マラウイ留学生を取り囲むに児童たち（2017 年 12 月）、㊨JICA 東京から依頼されたガーナ研修員の通訳（2018 年 12 月）

2020 年の東京オリンピック・パラリンピックでは、子供たちが受けた授業の国々の選手たちに熱い声援を送ってくれることを期待したい。

環境・エネルギー学校派遣事業

かながわ環境教室（理科教育）

SV 会の発足間もない 2007 年～2008 年、稲葉、上田会員が精力的に、神奈川県の環境農政局が主宰する理科・環境教育の学校派遣事業に挑戦し、出前授業を開拓してきた。この授業は環境に対する理解を深め、多くの会員が参加した事業である。その後 2018 年から、齋尾会員も加わり、SV 会の中に広がりを見せている。

稲葉大策
2015 年 2 月 座間養護学校相模向陽館分教室（高等部 1 年）

環境・エネルギー学校派遣事業は、神奈川県環境農政局が主宰し、地球温暖化を始めとする環境問題に関する体験授業に、知識・体験を持つ企業や NPO 等の専門家を神奈川県内の小・中・高校、特別支援学校に派遣し、環境に対する理解を深めることを目的とする。講師を希望する人は、講座・講師登録し、学校側が登録内容から環境農政局に講師の派遣を依頼するシステムである。

■稲葉会員が牽引。多くの会員が実験助手で参加■

2007 年から数名の会員が登録したが、最初の事例は、2008 年 2 月の上田会員による私立捜真小学校 6 年への「地球温暖化、塩害と食糧危機」についての授業である。上田会員はその後も、「干上がったオアシス」、「大豆もやし」をテーマに授業を提供した。ほぼ同時期から稲葉会員が「再生可能燃料としての砂糖黍を研究実食する」をテーマに、例年養護学校などで授業を実施した。授業実績を下表にまとめた。

今までの授業では、内容で、砂糖きびをナイフで削って、食味、材料の稲刈り、担当のクラス数が多いなどで、多くの会員が参加した。

2016 年頃から、稲葉会員が PM となり、会員に講師登録を呼びかけた。2018 年度に初めて、齋尾会員が「お米と田んぼが人々の生活に果たす役割」の授業を実施した。稲刈りや授業に SV 会から延べ 3 名の支援者が協力した。また上田会員が「命の水 環境の水 干上がったオアシス 死海」の授業を 5 クラスの中学校で実施し、上田会員の全体講義後、6 名の会員が専門を活かした授業を行った。

■社会的意義･･･理科離れの若者に楽しさを■

授業全般に対する学校の反応は、環境農政局の 2018 年度の調査によると、講師の対応や授業の内容について「非常に 良い」「有意義である」が 80-90%であった。SV 会員の実施授業では、稲葉会員の養護学校の授業は、沖縄に修学旅行する生徒たちの参考になると喜ばれ、また、上田会員の授業は、死海の水が重く塩辛いのに、生徒たちが目を輝かせ、また、齋尾会員の授業では、色が鮮やかに変わる化学実験に生徒たちのワクワクする気持ちが伝えられた。

いずれにしても理科離れと言われる現在の若者に、楽しさを通じて環境の大事さを学ばせる意義は高い。2019 年度は、今のところ上田会員の授業が予定されている。

楽しさを通じて、環境への理解を深める理科教育

年度	授業数	講師と回数
2007	1	上田
2008	1	稲葉
2009	4	稲葉(2)、上田(2)
2010	2	上田(2)
2011	0	(なし)
2012	1	稲葉
2013	2	稲葉(2)
2014	5	稲葉(5)
2015	1	上田
2016	1	稲葉
2017	3	稲葉(2)、上田
2018	3	齋尾(2)、上田
2019	1	上田
計	25	

(左)齋尾恭子 2018「お米と田んぼ」海老名市立杉本小 5 年　(右)上田恵一 2018「命の水」小田原市立千代中 1 年

KISTEC　学校派遣事業

SV 会の発足間もない 2007 年～2008 年、上田、稲葉会員が精力的に、神奈川県の外郭団体が主宰する理科・ものづくり教育の学校派遣事業に挑戦し、出前授業を開拓してきた。この授業は実験や作業が伴うため、多くの会員が協力した。
その後 2016～2017 年から、齋尾、山内、仲村会員も加わり、SV 会に大きな広がりを見せている。

上田恵一　2012 年 10 月　葉山町立長柄小学校 5 年

地方独立行政法人 神奈川県立産業技術総合研究所(KISTEC)による学校派遣事業は、優れた技術・経験・知識を有する研究者・技術者等を神奈川県内の小・中学校・特別養護・支援学校に派遣し、未来の科学技術における人材育成をめざす。生徒の科学技術やものづくりに対する興味・関心を喚起するのが目的である。

■上田会員が牽引。近年、新たな参加者が急増■

2007 年から、上田会員、稲葉会員ら講座登録を行い、2008 年から授業を実施した。2015 年まで上田、稲葉両会員の授業実施には、会員が助手として支援する形が続いた。2014 年に団体登録がなされた。その後登録者が増え、2016 年に山内、齋尾会員が新たに授業に参加。2017 年には仲村会員が加わり KISTEC の SV 会での知名度が増した。

理科や“ものづくり”の好きな子供を育てる

2018 年度の会員の授業タイトルを簡単に記す。上田会員は「大豆モヤシを育て、地球の食と環境を知ろう」。齋尾会員は「毎日食べるお米をもっと知ろう」。山内会員は「陶芸を通じて個々の表現力を伸ばそう」。仲村会員は「ワンチップコンピューターに挑戦しよう」。これ以外に、稲葉会員が「砂糖原料の砂糖きびを味わい精製工程を学ぶ」（2017）、齋尾会員が「命をつなぐ豆の種の不思議」（2016）等がある。各会員とも現役時代の科学的、造形的知識を活かし、独自の授業を展開して好評であった。特に「陶芸」は特別支援学校等に大人気である。2019 年には、上田、稲葉、山内の計 5 講座が実施された。PM は上田会員から鈴木新会員に替わった。

■社会的意義･･･科学やものづくりの夢や希望を■

本事業の講座を見ると、水、雲、光、空気、シャボン玉、ミニカー、ロケット、宇宙、そして陶芸まで、子供たちがワクワクする内容に満ちている。子供たちは自分で触り、作り、考え知り、楽しむことにより、将来の科学やものづくりの夢や希望を膨らますことが出来る独自な有意義な事業である。

2019 年秋、KISTEC は経済産業省の第 10 回キャリア教育アワード（コーデイネーター部門）に応募し、「なるほど！体験出前教室」の実績が高く評価され、奨励賞を受賞した。長年、本事業に参加してきた SV 会の喜びでもある。

年度	授業数	講師と回数
2007	0	(なし)
2008	2	稲葉、他
2009	2	上田(2)
2010	1	上田
2011	0	(なし)
2012	1	上田
2013	2	上田、稲葉
2014	1	上田
2015	1	上田
2016	4	上田、稲葉、齋尾、山内
2017	6	上田(2)、山内(2)齋尾、仲村
2018	7	山内(3)、上田(2)齋尾、仲村
2019	5	山内(2)、上田(2)稲葉
計	32	

山内茂夫　2018 横浜市立相武山小学校 1～6 年

仲村隼一郎 2018 厚木市立依知南小学校 6 年

「体験発表会」は SV 会創立まもなく、JICA 横浜の後援の下、創設された。市民に開かれた講座として、14 年余の歴史を刻む。この市民講座において、シニアの任国の「国際協力の現場」が、自分の言葉で語られ、リアルに再現される。

第 100 回記念パネルディスカッション（2013 年）

「体験発表会」は SV 会主催（JICA 横浜後援）の下、一般市民にも開かれた市民講座「シニアの挑戦、国際協力の現場を語る」として、JICA 横浜を会場に毎月第 3 水曜日行われ、毎回 30 名程の市民・会員が参加している。

■JICA 横浜の後援の下、14 年余続く■

この発表会は SV 会発足の翌年から行われ、これが出前授業など SV 会の活動の基礎となっている。発表者にとっては、帰国後の自身の活動のまとめであり、聞き手にとっても新しい国を知り、自身の体験を思い出すなど、両者にとって意義ある楽しい活動として続けられている。

自分の言葉でリアルに再現、「国際協力の現場」

2005 年 7 月当時、水曜会のメンバーが体験発表会を定期的なものにしたいと、JICA 横浜に会議室の提供をお願いしたところ、一般市民の参加を条件に許可され、発表会の後援者となってもらった。こうして、野口会員を責任者として同年 7 月 20 日の第 3 水曜日に第 1 回体験発表会が開催された。

チラシの例

その後一般市民にも広く宣伝するため、広報チラシが作られたのは第 34 回の発表会からであり、A4 版の用紙に 5 回分の体験発表会の概要が写真と共に掲載されている。広報チラシは公民館、公共施設、大学にも配布する。広報活動の結果で、外部からの参加も少なくない。

■14 年の歴史に多彩な活動を刻む■

体験発表会は、2005 年 7 月（第 1 回）から始まり、2009 年 10 月 50 回を迎え、冊子「シニアの挑戦」の編集が始まった。2013 年 12 月に節目の 100 回では、第 100 回記念パネルディスカッションが行われ、一般市民の参加も多く 54 名に上った。2016 年 5 月(129 回)には日本大学の先生・学生（12 名）が聴講に駆けつけた。そして 2019 年 12 月に 171 回を迎えた。このように JICA 横浜の後援で、今日まで 14 年余に亘り、体験発表会が休むことなく開催できたことを感謝し、SV 会の伝統行事として更なる発展を期待したい。

■込められたシニアの新世界への挑戦の思い■

シニアボランティア活動は、自分自身の経験を活かし知恵と情熱をもって、「発展途上国の人を育て、国造りを支援する」活動であり、自己実現としての活動でもある。

この体験の語りには、発表者其々のシニアボランティアとしての熱い思いが込められている。新たな世界へ踏み出すことはそれなりの決意がいることであるが、一歩踏み出すとそこには思った以上の広大な世界が広がっている。発表者は、この新世界を自分の意思と知恵と情熱で切り開いた体験を、自分の言葉で語る。「国際協力の現場」がリアルに伝わり、多くの参加者を期待したい。

日本大学の先生・学生と会員たち（2016 年）

あーすぷらざ連続パネルトークは、毎回 3～5 人のパネリストによる「パネルトーク」という形を取り、シニアと若手の共演で、論点に縛られず、自由に話し合うことをめざした。2014 年 5 月に始まり、意欲的なプロジェクトであったが、2018 年 9 月（第 18 回）をもって休止となった。

「神奈川県立あーすぷらざ」との協働事業「シリーズ国際協力の現場」（第7回2015年6月）

「国際協力の現場」、シニアと若手の共演・二重奏

発端は 2013 年 8 月、臼井、広内の両会員が、SV 会の広報誌や冊子を持って、講座開拓を目的に「あーすぷらざ」を表敬訪問したことであった。3 か月後に同館から「SV 体験発表などの国際理解・国際協力の講座をシリーズとして開催したい」との連絡があった。SV 会では運営委員を募り、翌 2014 年 1 月に 8 名の会員で「あーすぷらざプロジェクト」を発足させ、企画を練った。

■SV 会の市民講座の期待を担って出発■

第 1 回（5 月 13 日）は丁度「よこはま国際フォーラム 2014」のために準備していたパネルディスカッション“国際協力の現場”が天候不順で中止となったので、この企画をそのまま持ち込んだ。第 2 回以降は公募等でパネリストを募集した。

あーすぷらざプロジェクトは、主催“SV 会”、共催“あーすぷらざ”、後援“JICA 横浜”と名を連ねてスタート。チラシを作成し会員有志総出で配付、集客に努めた。臼井会員の尽力で地域ケーブルテレビと地元新聞の参加を得た。文字通り「地域社会と世界を結ぶ“若き”シニアたち」の願いを実現する大型プロジェクトとなった。

■シニアと若手（JV と学生）の共演、コラボに注力■

その後 4 年半にわたり、若手世代とのコラボに力を入れながら続けた。第 3 回（2014 年 9 月）～第 17 回（2017 年 11 月）の間、毎回青年海外協力隊 OV をパネリストとして迎えた。さらに、第 6 回（2015 年 5 月）から第 15 回までは、海外でボランティア活動をしてきた学生（明治学院大、横浜国大）もパネリストに加えて、フレッシュな市民講座となった。臼井道雄 PM（当時）の発想力と行動力の成果である。第 15 回から PM は北脇和夫会員にバトンタッチされた。

この催しは「あーすぷらざ」の設立目的に合致するということで、当初、会場使用料が免除されたが、その後、公平性の面から、使用料を支払うことになった。チラシを作成して配布したが、毎回集客には苦労した。しかしその一方で「常連」となってくれた地域の方も現れた。

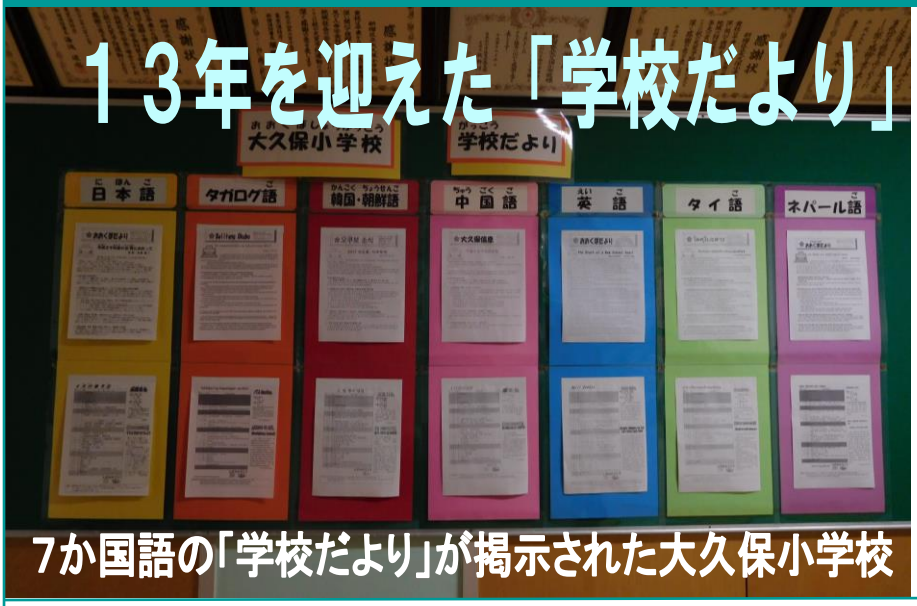
■市民講座を牽引、役割を果たし、一時休止へ■

このパネルトークは SV 会の主催であり、企画・交渉・集客・運営などすべてを自前で行うため、かなりのパワーを要する。また、高齢化や仕事を持つ会員が増えたため、運営委員やパネリストになる会員が少なくなったことである。

このパネルトークは、久々の大型市民講座で、SV 会の活動を牽引する意欲的なプロジェクトであったが、上述の事情で、類似の「よこはま国際フォーラム」に後事を託し、第 18 回をもって一時休止することになった。市民講座主催時の課題を背負いながらも、関係者の支援の下、4 年半に亘り続けることができたことを感謝したい。

第 1 回（2014 年 5 月）テレビカメラも入って

第 15 回 2016 年 9 月：臼井会員(前列左)



7か国語の「学校だより」が掲示された大久保小学校

１３年を迎えた「学校だより」翻訳活動

ある小学校の日本語「学校だより」は外国籍保護者には言語の壁であまり読まれていなかった。そこでSV会は「学校だより」の翻訳に取り組んだ。会員有志のささやかな願いで始まった翻訳活動は、学校・保護者の期待をバックに13年目の今日、地域社会の期待を担う大きな活動となった。

2006年頃、外国籍保護者への対応に苦慮している新宿区の大久保小学校のケースに遭遇した。当時の大久保小学校の児童数約200名の内、外国にルーツを持つ児童が約120名おり、毎月学校側から出す日本語の「学校だより」が外国籍児童の保護者に理解されないままになっており、学業や学校行事に支障を来し、現場の先生が困っているとの話を聞いた。これは切実な問題である。

■SV会会員が無報酬で翻訳活動を始める■

2007年3月、この状況を知った当時の藤谷芳孝副理事長を中心に有志たちが大久保小学校の「春休み心得」の翻訳（5か国）を行い寄贈した。素早い対応に学校から大いに感謝された。

また当時、学校では、中国語と韓国語については、「学校だより」を或るNGO団体に翻訳してもらっていたが、その他の言語までは行き届いておらず、英語とスペイン語なら当会に翻訳できる角井信行理事がおり、取り敢えず2007年度は英語とスペイン語を無料奉仕で引き受けることにした。日本語原稿にしてA4サイズ延125枚の翻訳を実施した。

これと並行して2007年7月頃、新宿区教育委員会から、こうしたSV会の活動が評価され、「翻訳を協働事業としてやってみないか」との誘いがあり、同年秋、教育委員会とSV会の2008年度協働事業が決まった。翻訳言語は英語・スペイン語・タイ語の3か国語で、翻訳料も出ることになったので、同年12月、翻訳プロジェクトを組織し、翻訳能力のある外国人留学生を翻訳者として募り、角井理事を責任者として本格的に取り組むことになった。こうして2008年4月、大久保小学校・幼稚園に対する翻訳活動がスタートした。

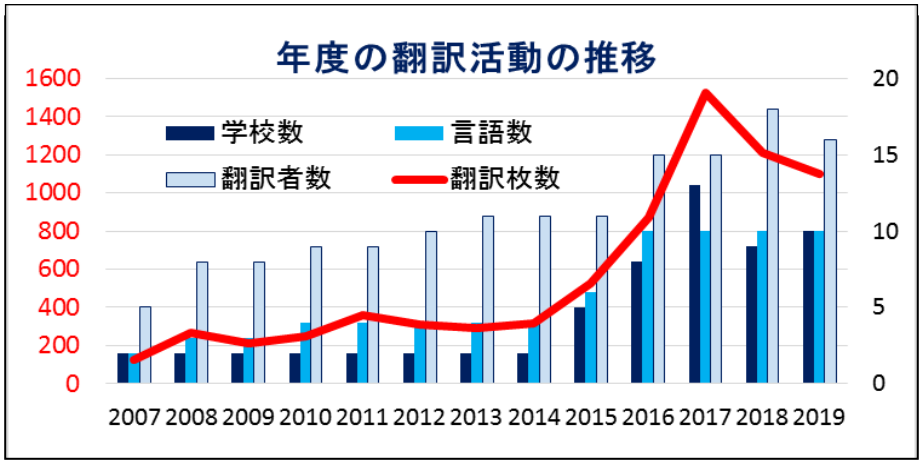
■2015年から地域の期待を担う活動へと拡大■

以下、翻訳活動のその後の進展を見てみよう。

【翻訳実施校　2校⇒13校】・・・当初の翻訳実施校は大久保小学校・幼稚園のみであったが、その効用が他校にも知られるようになり、2015年度より5校（幼稚園も含む）に拡大し、2016年度に8校に、2017年度にはいっきに13校となる。

ささやかな活動が地域社会に期待される大きな活動へと発展

【翻訳言語　2言語⇒10言語】・・・翻訳言語は、当初の英語とスペイン語から、翌年度タイ語、2010年度にタガログ語が加わって4言語になる。2015年度にはそれまで緊急応援で実施してきた中国語・韓国語が正式に加わり、6言語に。2016年度更にネパール語・ミャンマー語・ベトナム語・仏語が加わって現在の10ヵ国語となった。



第2章　SV会の活動（翻訳）

翻訳枚数の多い翻訳者たち

趙甲実（中国語）　Richard Austen（英語）　李銀淑（韓国語）

【翻訳者　5名⇒16名】・・・2007年度の自主事業では、SV会員と協力留学生の計5名が担当した。2008年度協働事業の開始にあたり翻訳担当として留学生8名が本事業に参加。2018年度には在日外国人も加わり留学生と合わせて18名となり、2019年12月現在16名である。

【翻訳枚数　125枚⇒1500枚超】・・・翻訳枚数も2007年の125枚から2016年度には870枚に急増。2017度は1500枚を超え、2019年度は1100枚（推定）の見込み。

■翻訳の拡大の背景とその対策：新たな体制で■

2015年度以降、新宿区内の小学校・幼稚園に翻訳依頼が急激に拡大していった背景には、教育委員会が7年に亘るSV会の本活動を高く評価して、同様な問題を抱える区内の小学校・幼稚園に、SV会を紹介したことである。また、人事異動で教職員の間で大久保小学校・幼稚園の例が口コミで広まったことも一因であるようだ。

こうした翻訳の拡大で、PM一人体制では翻訳事業の員会を発足させ、今後増加する翻訳にどう対応すべきか、検討を開始した。「外部団体へ移管したら」との意見も出たが、同年4月会員より協力者を得て複数人で翻訳事業を支える新体制で臨むことになった。2019年4月からPM含め5名体制で、翻訳事業を無償で実施している。

年度	行政との契約形態	学校数	対象学校（幼稚園含む）	言語数	翻訳言語	翻訳枚数	翻訳者	実施者
2007	自主事業	2	大久保小・大久保幼	2	英・西	125	5	有志
2008	協働事業	2	大久保小・大久保幼	3	英・西・泰・（中・韓）	265	8	1
2009	（同上）	2	（同上）	3	（同上）	214	8	1
2010	委託事業	2	大久保小・大久保幼	4	英・西・泰・比・（中・韓）	249	9	1
2011	（同上）	2	（同上）	4	（同上）	361	9	1
2012	（同上）	2	（同上）	4	（同上）	311	10	1
2013	（同上）	2	（同上）	4	（同上）	291	11	1
2014	（同上）	2	（同上）	4	（同上）	317	11	1
2015	（同上）	5	大久保小・大久保幼・戸山小・落合第三幼・早稲田幼・	6	英・西・泰・比・中・韓	529	11	1
2016	（同上）	8	大久保小・大久保幼・戸山小・落合第三幼・早稲田幼・東戸山小・牛込仲込小・花園幼	10	英・西・泰・比・中・韓ネパール・ミャンマー・ベトナム・仏	870	15	1
2017	（同上）	13	大久保小・大久保幼・戸山小・落合第三幼・早稲田幼・東戸山小・牛込仲込小・花園小・花園幼・早稲田小・戸塚第三小・津久戸幼・四谷第六幼	10	同上	1526	15	1
2018	（同上）	9	大久保小・大久保幼・戸山小・早稲田幼・東戸山小・落合第二小・早稲田小・戸塚第三小・新宿中	10	同上	1210	18	3
2019（12月）	（同上）	10	大久保小・大久保幼・戸山小・東戸山小・戸塚第三小・早稲田小・早稲田幼・淀橋第四幼・花園幼・落合第二小	10	同上	1100（推定）	16	5

■NPO・行政・文科省一体の包括的な政策を期待■

急増する「学校だより」翻訳問題は、新宿区以外でも同様な問題を抱えている学校が多々ある。外国籍保護者の問題は子弟の日本語学習の問題の影に隠れがちである。ある意味では、SV会の翻訳事業は“教師たちの駆け込み寺”となっている。NPOだけでは限界があり、NPO・行政・文部科学省が一体となった政策が必要である。

こうしたことから、2018年6月、「学校だより」翻訳問題の現状を知ってもらうため、SV会の翻訳プロジェクト関係者4名が文部科学省を訪問し、「翻訳問題は、在日外国籍保護者だけの問題ではなく、学校運営に支障をきたす現場の教師たちの問題でもあり、包括的な政策を必要とする」と訴え、政策提言を行った。

■シニアの生き甲斐、活動できることに感謝■

翻訳の拡大と関係者の高齢化に伴い、困難な状況が現れているが、地域社会から期待される活動へと発展したこの活動を、困難を乗り越えて継続していくことが、SV会に課せられた使命であろう。社会との接触をこのような形で継続できるのはシニアの生き甲斐でもある。

2019年4月から入管法が改正され、今後、在日外国人の増加は必至である。SV会の翻訳活動は、大久保小学校の切実な願いから始まった“小さな灯火”ではあるが、灯火を絶やさず継承し、この灯火が多文化共生社会の実現に向けた施策へと発展することを期待したい。

年度	SV会の翻訳活動のあゆみ
2006	外国籍保護者の「学校たより」問題を知る 3月「春休みの心得」翻訳版を贈呈
2007	4月 会員が無報酬での翻訳を開始 7月 教育委員会から協働事業への参加の誘い 10月 行政（教育委員会）、SV会との協働事業を決定 12月 SV会内に翻訳プロジェクトが発足（翻訳者公募）
2008	4月 翻訳の協働事業がスタート （大久保小学校・幼稚園で、3か国語）
2009	協働事業2年目、第1回アンケート（SV会実施）
2010	4月 委託事業へ移行、行政と委託契約・・・4か国語
	（2010～2014年度、安定的に推移）
2014	3月 第2回アンケート（SV会実施）
2015	4月 実施校が他校へ拡大、5学校に 6月 SV会でプロジェクト制を試行、翻訳PM主体に 7月 中国語、韓国語もSV会へ、6言語に拡大
2016	4月 実施校：8学校に拡大、翻訳言語：10言語に拡大 12月 JICA「クロスロード」に翻訳プロジェクトが紹介される
2017	4月 実施校：10学校に拡大 8月 翻訳プロジェクト、「読売教育賞」に応募 12月 冊子第4集に翻訳プロジェクトを特別企画で掲載 1月 翻訳の拡大に伴い、翻訳事業検討委員会を設置
2018	4月 翻訳PM＆協力者による新体制へ移行 6月 翻訳問題等で文部科学省に政策提言 8月 翻訳PM＆協力者への謝金ゼロを継続すること再確認
2019	4月 翻訳PM＆協力者5名体制に拡大

マンツーマンの日本語学習支援の様子

左から、江原敦史校長、小川弘子、森妙子

日本語学習支援

新宿区の外国籍児童生徒に対する日本語学習支援は 2008 年度から始まり、現在も続いているが、最近、日本語学習支援ボランティアが少なくなってきた。
編集委員会では、この活動を発足時から現在まで支えてきた小川弘子会員への取材を行った。

左上：小川会員の活動、　右上：まなびの教室
左下：東戸山小学校全景、右下：東戸山小校長室で
（写真：:2019 年 9 月 11 日、東戸山小学校にて）

■新宿区の日本語学習支援のあゆみ■

新宿区は外国籍児童生徒が多い地域である。2007 年 10 月、SV 会が新宿区教育委員会との協働事業として提案した「外国籍児童生徒の日本語学習支援」が採択され、2008 年 5 月より淀橋第四小学校で日本語学習支援が始まった。SV 会は、会員 6 名で 3 名の児童をマンツーマンで週 1 回ずつ支援する体制でスタートした。6 月から西戸山第二中学校で高校進学を控えた生徒 3 名を会員 3 名で支援、全員が高校に入試合格という成果を上げた。その後、戸塚第二小の児童 2 名も支援した。

■㈱栄光から SV 会へ日本語学習支援の協力依頼■

2016 年 4 月、㈱栄光から、新宿区の外国籍中学生に対する高校進学支援（新宿区教育委員会からの委託事業）への協力依頼が SV 会にあった。放課後、国語、数学、英語などを 1 対 1 で、日本語で指導する。外国籍生徒は 14 名(中国、韓国、タイ、ミャンマー、ネパール)。SV 会では協力会員の募り、5 名が参加。㈱栄光もノウハウがなく、SV 会の日本語学習支援の経験に期待した。この学習支援は 6 月 1 日から新宿コズミックセンターで開始、1 年間で事業が軌道に乗ったので、2017 年 3 月、会としての活動は終了した。

異文化体験者として、外国籍児童生徒を支える

日本語学習支援事業は、2009 年度、新宿区教育委員会から多文化共生プラザに移管され、財団整理統合により 2010 年度から新宿未来創造財団へ再度事業移管された。下表に、日本語学習支援のその後の状況（学校、児童生徒、会員）を示す。

なお、2009 年度、2010 年度、杉並区の中学校から学習支援の依頼が SV 会に舞い込み、会員が対応した。

年度	実施者	学校		児童生徒	会員教師	有資格登録者
2008	新宿区教育委員会	3校	淀橋第4小 西戸山第2中 戸塚第2小	5名 3名 2名	11名	
2009	多文化共生プラザ	4校	戸山小 落合第4小 落合第6小 西早稲田中	8名	10名	12名
	杉並区立中学校	1校	和泉中	3名		
2010	新宿未来創造財団	6校	小学校 中学校	2名 5名	10名	13名
	杉並区立中学校	1校	宮前中	2名		
2012	新宿未来創造財団	7～8校		10名程	7～8名	
2016	新宿未来創造財団	4校	東戸山小 西戸山中 牛込第3中 西早稲田中	1名 1名 2名 1名	5名	
2019	新宿未来創造財団	1校	東戸山小	1名	1名	

（注：2011、2013～2015、2017～2018年度の記録はない）

■「子供たちと触れ合う喜び」･･･小川会員取材■

小川弘子会員は、小学校の教員を務め、定年後、JICA ボランティア（日本語教育）としてブラジルに渡る。SV 会発足時に入会し、新宿日本語学習支援に携わる。2008 年の淀橋第 4 小学校を皮切りに、12 年間、区内の 7 校の児童生徒計 11 名に対して日本語学習支援を行ってきた。学習支援者になるには、新宿区の研修を受け有資格者として登録する。当初 12～13 名の会員が登録した。新宿未来創造財団からの要請により学習支援に携わることになる。携わったのは、初期の頃は平均 10 名ほどいたが、だんだんと減り、2019 年度には小川会員 1 名となった。

「私の教えた子供たちは中国・韓国籍が多かったが、2015 年度はコロンビア籍の子供も教え、2016 年度は中国籍の中学 3 年生を奥谷会員と一緒に受け持ち、無事高校に進学させた。今教えているのはチュニジア籍の児童です。12 年間も学習支援をしてこられたのは、子供たちと触れ合うのが楽しかったからかな」とほほ笑んだ。

中学生学習支援

外国籍中学生にとっては、自分たちと文化・制度の異なる日本の学校での勉強は大変で、さらに高校受験となると大きな試練である。学習支援ボランティアたちは教科だけでなく、多方面から彼らの学習をサポートしている。

学習支援クラスで会員の指導の様子

孫のような生徒が慕ってくれるのは、シニアの生き甲斐

■横浜市鶴見区、中区、南区での学習支援活動■

2011 年 2 月鶴見区役所を訪問し、冊子「帰国シニアの挑戦」を渡した。その時の担当者（元 JOCV）から 2013 年 7 月下旬電話があり、「夏休みの日本語支援」を急ぎ頼まれた。8 月 19 日～24 日まで小中学生を対象として SV 会から堀川正照、鈴木芳雄、加藤エイ子、奥谷規子、田中館忠夫の 5 会員が支援し、非常に高い評価を受けた。

中区・南区では、2014 年 1 月 15 日に横浜市国際交流協会より、「学習希望の中学生が増えているので SV 会も参加してほしい」との協力要請があった。これに応えて、中区へは杉山旭、その後、上田恵一、田中誠一の 3 会員が参加した。南区へは堀川正照、野口烝治、木場貞成、大久保克、舟田正夫、その後、鈴木芳雄、鈴木新、北脇和夫、森岡潔の 9 会員が参加した。南区については 2019 年度からは予算不足のため、「みなみラウンジ」での学習支援は中止となっている。鶴見区よりその後の支援要請はない。

また、2019 年夏、横浜市教育委員会（東部学校教育事務所）から「夏休み学習支援ボランティア」の依頼があり、舟田、野口、関憲三郎の 3 会員が協力した。

■生徒とボランティア、高校進学に向けて二人三脚■

SV 会会員が重点的に協力したみなみラウンジへ来た中学生は中国・フィリピンからの中学生が多かった。彼等は日常会話では意思疎通に問題はないが、高校へ進学のために必要な教科の理解で苦しんでいた。国語、数学、理科など生徒毎に学習希望が異なり、SV 会会員は各々の得意科目で対応していた。中学生の親は遅くまで外で働いており、日本語が分らないため、子供の教育にまで手が回らない。その不足を補うために SV 会の学習支援ボランティアが学習指導を担当した。

みなみラウンジでの共通の行事としては、高校入試での面接の受け方の練習、大学生からのアドバイスを受ける機会、その他、多面的に生徒への指導が行われた。

中学生は概して性格が良く、頭脳明晰であった。会員が日本語の作文を指導したフィリピンから来た生徒は、英語の TOEIC テストで 910 点を取れたことが本人の自信につながり、将来は外国との仕事に就きたいと言っていた。日本の社会に溶け込み、早く希望が実現することを祈っている。

■学習支援が多文化共生社会の実現の一助に■

会員たちは語っている･･･「孫のような年齢差であるが、親のように慕ってくれたのは嬉しかった」。「生徒に頼られるとこちらもやる気がでる。毎週休みなしなので、ボランティアとはいえきつい。予習を必要とする事も少なくない。でも生きがいを感じる」。これは多くのボランティアに共通した気持ちである。学習支援が多文化共生社会の実現に貢献することを願う。

学習支援ボランティアの研修会（2018 年）

学習支援の終了式（2018 年）

ホームステイ・サポートファミリー

任国の知人や外国人をホームステイに招く会員は多いが、SV 会も各団体から依頼があれば、会員を通じて留学生・研修員のホームステイなどの支援活動をしている。過去 5 回依頼があり、会員たちは“草の根外交官”として活躍した。2 つの“おもてなし”の事例を紹介する。

左上：掛川ファミリィ（2004）　右上：武山ファミリィ（2013）
左下：石井ファミリィ（2013）　右下：藤谷ファミリィ（2013）

“草の根外交官”として、多文化共生を支える

SV 会は発足当初、JICA 八王子に宿泊していた研修員のホームステイを受け入れた。その後、海外日系人協会の日系社会次世代育成研修員のホームステイ、また、かながわ国際交流財団の『サポート・ファミリー』としての交流なども引き受けてきた。各会員の家庭での取り組みは様々であるが、思いは皆同じ。<草の根外交>が SV 会の文化であり、<多文化共生>活動を支えている。

■森妙子会員・・・改めて日本社会を見直す機会■

二人ともホストファミリーとしたいこと、行ってみたいところは沢山あった。しかし、ペルーのマリアちゃんは赤レンガ倉庫のスケート場で転倒し腕の骨折。ボリビアの芽衣ちゃんは JICA 横浜の階段で滑って足の骨折。それでも何処かへ行ってみたいという希望で、近場のプラネタリウム・よみうりランドのイルミネーション・江の島水族館へと出かけた。どこの施設も快く車椅子の貸し出しなど、弱者にとても配慮していることがわかり、また温かい言葉もかけてもらった。二人は体が不自由なのに、家事の手伝いもできることを積極的にして、互いにカバーし合って日本の生活を楽しみ、そしてなにより日本社会の温かさを十分に感じたことと思う。私たちも日本社会を見直す機会となった。

森ファミリィ（2014）、怪我した日系研修員

■中川路のぞみ会員・・・改めて日本を学ぶ機会■

我が家が担当になったタイからの留学生は、来日 3 年目の大学の工学部の女子大生（2 年生）。5 か月間の交流。レポートも日本語で書いているせいか、会話だけでなく読み書きも完璧だった。自宅に招き、夫を巻き込み一緒にお好み焼きを楽しんだ。社会人 2 年目の長男とは進路の話をして盛り上がった。暮れに毎年行く酉の市に一緒に出掛けた。提灯、熊手、おみくじ・・・改めて意味を聞かれると難しい。屋台での飲食はタイを思い出すとのこと。『おせちを作る会』に誘われ、興味津々。口にあったのはきんとんと田作りで、なますはダイコンの辛みが合わなかったとのこと。あんなに辛いタイ料理を食べているのに辛さがちがうようだ。半年弱の期間であったが、自分自身にとっても日本の事を学ぶ良い機会となった。

中川路ファミリィ（2015～16）、タイ留学生

研修員・留学生のホームスティ・サポートファミリー

団体	期間	会員	出身国	備考
JICA八王子	① 2004年8月	掛川 周男	パキスタン パキスタン	JICA研修員 【ホームスティ】 1泊2日
		藤谷 芳孝	インドネシア インドネシア	
		角井 信行	インドネシア	
海外日系人協会（JICA横浜）	② 2012年7月	石井 俊明	コロンビア	JICA日系社会次世代育成研修員 【ホームスティ】 2泊3日
		森　妙子	カナダ ドミニカ共和国	
		福島弘一郎	カナダ ベネズエラ	
	③ 2013年1月	武山 久恵	パラグアイ	
		石井 俊明	ボリビア	
		森　妙子	ペルー ブラジル	
		藤谷 芳孝	ブラジル	
	④ 2014年2月	森　妙子	ペルー ボリビア	
かながわ国際交流財団	⑤ 2015年9月～16年2月	中川路のぞみ	タイ	神奈川県在住留学生 【サポートファミリ】

中小企業海外展開支援

越川和彦 JICA 副理事長が、2017 年 1 月、SV 会の「会員のひろば」で「激動する国際社会と組織改革」と題して講演し、その中で、氏が担当した政策「中小企業海外展開支援」について話された。その後、2018 年 7 月、この政策に関心のある会員が集まり、SV 会の「中小企業海外展開支援プロジェクト」を立ち上げた。

SV 会の中小企業海外展開プロジェクトの切っ掛けとなった
越川和彦 JICA 副理事長の講演

SV会の「新たな事業の創造」をめざして

2018 年から、①SV 会の将来事業の創造（会の収入源の確保）と②一部会員のコンサルタント業務への渇望 があるため、JICA の中小企業海外展開支援プロジェクトに SV 会として参加できないかと方策を考えてきた。

■関心ある会員が結集、会の公認の下に参加■

JICA の中小企業海外展開支援プロジェクトは JICA の委託事業である。海外展開を目指す中小企業は、コンサルタント会社と連携して、企画書を作成し、JICA の評価を受ける必要がある。企画書が採択されれば、その後約 1 年間で、調査、計画を実施し、海外展開方策を決定し、JICA へ報告書を提出し、活動費の精算を行い、JICA より中小企業へ委託金が支払われる仕組みである。

2018 年 7 月に本プロジェクトに関心のある会員が 10 人集まり、どのようなかたちで参加するかを話し合い、当会として行動を決め、理事会でも確認を得た。

■中小企業とのマッチングはできたが･･･■

中小企業とコンサルタントをマッチングするのは、国際開発ジャーナル社（IDJ 社）であり、ここへ登録した。

登録後から 2019 年 7 月末までに 58 件の案件照会があり、会員の熟知している業種と赴任国をもとに、8 件の関心表明書を IDJ 社へ提出し 1 件のマッチング（農業関係）を得た。また JICA 主催のマッチング会が JICA 市ヶ谷で行われ、相談ブースを出展し、中小企業 5 社と面談し、1 社とマッチングができた（ビル洗浄洗剤関係）。

2019 年 8 月現在の状況は、農業関係の案件は活動 3 か月後に会社の意向により、JICA への申請タイミングが 1 年延期され、活動中断で再会待ち。ビル洗浄洗剤関係はその後 JICA のプロジェクトとの性格を変えたため中断した。相手国のパートナーとなるべき会社を紹介し、現地出張、現地でのデモンストレーションなどを行ったが、相手先の態度も進展せず、これ以上の展開は望めそうもない。マッチング照会は多数あるが、当会の対応能力を広げないと関心表明が示せない状態でもある。

■課題は経費回収とプロマネ力■

このプロジェクトを始めて、当会として苦しい点は、事前の経費が掛かることである。たとえ企画書が評価・採択されても、実施後の報告書が出た時点で、JICA より中小企業に支払われる委託金の一部が、外部人材費としてコンサルタントへ支払われる仕組みとなっており、費用回収まで、期間がかなりかかるということである。

中小企業の海外展開には問題も多く、簡単には進展できないが、当会にも推進するうえで大きな課題がある。コンサルタント業務を希望する会員の中には、固有技術の支援には関心があっても、プロジェクトマネージメントを行おうとする会員が少ないことである。

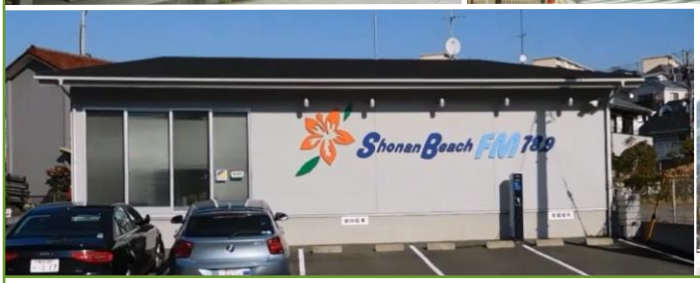
■いばらの道だが、課題を克服し、更なる前進を■

今後の展開として、会の新しい事業開拓のために、次の点を強化し本プロジェクトを更に推進したい。①事前経費の発生が少ない関東地区で活動する中小企業に的を絞る。②マッチング後の企画書作成段階での有償契約を中小企業と結ぶ努力。③会員の更なる奮起を期待。④大手コンサルタント会社への技術供与的派遣の検討。

途上国事情に詳しい会員諸氏の活躍を期待し、SV 会の「新たな事業の創造」を目指したい。

パートナーシップ［外部団体］

SV 会は、創立以来、多くの外部団体と連携し、活動してきた。SV 会 15 年のパートナーシップはどうであったであろうか。創立期の頃は活発であったが、その後やや停滞したが、最近、企業からの連携依頼もあり、15 周年を期に進展が期待される。



鎌倉市生涯学習センター、あーすぷらざ
湘南ビーチ FM、㈱VSOC（紀尾井町鶴屋ビル）

■SV 会の最初の協働事業は 2006 年度から始まった**杉並区教育委員会**との総合学習に関する協働事業である。2008 年度の**新宿区教育委員会**（総合学習、翻訳）へと続き、両者とも委託授業として現在も継続している。

また同時期、子供居場所作りで、**日本財団**（2007 年度）、**文科省**（2008 年度）から補助金・助成金を受けた。2009 年度には**地球環境日本基金**でドリアン植林を行った。その後一時途絶えたが、2017 年度&2919 年度に **MRA ハウス**から助成金（機材購入、出前授業等）を受けた。

■2007 年度から東京都中央区の **NPO ボランティア団体交流サロン**に団体登録して出前講座や子供居場所作りを行ない、また、2012 年度から 2015 年度まで、**協働ステーション中央**を SV 会東京地区の活動の拠点とした。

日本語学習支援については、**新宿未来創造財団**で 2009 年度から現在まで実施し、**横浜市国際交流協会**（中区、南区）では 2014 年度から 18 年度まで実施した。

また、留学生・研修員支援は、2012～13 年度 **海外日系人協会**（日系研修員ホームスティ）を、2016 年度 **かながわ国際交流財団**（在県留学生サポート）を支援した。

■出前講座は SV 会の主要な事業である。**さかえ未来塾**（2006 年度）、**かわさき市民アカデミー**（2007 年度）と連携して大型の市民講座が開催された。2014 年度から**神奈川県立あーすぷらざ**と「シリーズ国際協力の現場」を 18 回共催し、SV 会最大の市民講座となっている。

2008 年度から神奈川県の **2 団体**に理科教育の講師・講座を登録、また、2016 年度から**東京都教育委員会**に東京オリパラ関連の出前講座を登録している。学校から依頼された場合、会員が出前授業に出向く制度である。

会員による講座運営・推進も**小金井市公民館**、**鎌倉市生涯学習センター**、**日本セカンドライフ協会**で行われた。

■企業とは、**㈱VSOC**、**アクティオ㈱**、**南富士㈱**、**㈱栄光**、**逗子・葉山コミュニティ放送㈱**、**㈱メディア総研**と連携してきた。㈱VSOC からは会の登録事務所として施設提供を受けきた。逗子・葉山コミュニティ放送㈱では会員が JICA ボランティア体験談を生発信している。㈱メディア総研とは出前講座について意見交換している。

■近年、SV 会の連携構築はやや停滞しているが、企業からの連携依頼もあり、15 周年を期に進展が期待される。今まで SV 会と連携し共に活動してこられた外部団体に感謝したい。

パートナーシップで活躍の場が拡大、拡がる輪

SV会が創立以来連携した外部団体　（年度、★：現在）	
1	協働事業・委託事業等 杉並区教育委員会（2006～★）、新宿区教育委員会（2008～★）
2	補助金、助成金 日本財団（2007）、文部科学省（2008）、公益信託地球環境日本基金（2009）、MRAハウス（2017，2019～★）
3	行政等との連携 中央区NPOボランティア団体交流サロン（2009～12）、中央区協働ステーション中央（2012～15）
4	日本語学習支援 新宿未来創造財団（2009～★）、横浜市国際交流協会（2014～18）
5	留学生・研修員支援 海外日系人協会（2012～13）、かながわ国際交流財団（2015～18）
6	出前講座（講師・講座登録） 神奈川県環境農政局（2008～★）、神奈川県立産業技術総合研究所（2008～★）、東京都教育委員会（2016～★）
7	出前講座（実施先） さかえ未来塾（2006）、かわさき市民アカデミー（2007）、厚労省高齢期雇用就業支援センター（2007～08）、神奈川県立あーすぷらざ（2014～18（その後休止））
8	出前講座（会員による講座運営・推進） 小金井市公民館（2010～16）、鎌倉市生涯学習センター（2010～12）、日本セカンドライフ協会（2014～★）
9	企業等との連携 ㈱VSOC（2004～18）、アクティオ㈱（2005～08）、南富士㈱（2015～16）、㈱栄光（2016～17）、逗子・葉山コミュニティ放送㈱（2018～★）、㈱メディア総合研究所（2018～★）

パートナーシップ［特別会員（在日外国人）］

SV 会には、会員以外に“特別会員”と呼ばれるパートナーの人たちがいる。彼らは、留学生、翻訳者、JICA 研修員など在日外国人である。杉並・新宿プロジェクト、翻訳プロジェクト、JICA 研修員プロジェクト、東京オリパラ・プロジェクトなど SV 会の活動を支えている。ここでは、3 つのプロジェクトで活躍する“特別会員”を紹介する。

JICA 研修員プロジェクト　御成中学校（2017 年 2 月）

SV会の国際理解教育や翻訳活動を支える

SV 会では国際理解教育などの活動を行う場合、在日外国人の支援を受けて実施している活動が少なくない。日本の大学に学ぶ留学生、JICA の研修員、会員の任国の友人などの外国人である。彼らの多くは SV 会の“特別会員”として、SV 会の活動に参加する。現在、数十か国、数十名が“特別会員”として登録されている。

■子供たちがかわいい･･･杉並・新宿プロジェクト■

留学生が先生で会員がサポート役となって行われる出前授業（通称「ペア授業」）は、2007 年 1 月杉並区立桃井第一小学校で、6 ペア 12 名で行われたのが最初である。ペアの相手は留学生が主であるが、赴任国や日本で知り合った会員の友人（在日外国人）もいる。会員はそれぞれの方法でペアの相手方を見つける。これがペア授業への第一歩だ。ペア授業は児童生徒が異文化を実体験でき、学校関係者にも好評で各学校に広まり、SV 会の国際理解教育の定番となって今日まで続いている。子供たちには外国人が珍しく「触れ合いたい」思いがあり、留学生にも「子供たちはかわいい、一緒に学べて楽しい」と教える喜びがある。

■「学校だより」翻訳に使命感･･･翻訳プロジェクト■

「学校たより」翻訳は 2008 年度新宿区協働事業として始まった。実施に先立ち 2007 年 12 月に留学生から翻訳協力者を募るため、留学生会館等に探し求め、翻訳希望者を集めた。最近は勤労者・主婦等の在日外国人が大部分となった。現在 10 か国 16 名の在日外国人が翻訳者として登録している。ある翻訳者は「「学校だより」翻訳は日本語の勉強にもなる。翻訳は生活の一部となった」。また別の翻訳者は「日本の学校教育を覗き見られる」と。彼らの使命感は高く、SV 会になくてはならぬ存在である。

■母国に思いを馳せて･･･JICA 研修員プロジェクト■

2016 年 3 月、JICA から研修員の通訳業務が SV 会に委託された。また、2017 年 2 月に SV 会の出前授業に研修員が参加することが認められた。研修員とは途上国から JICA を通じて日本の大学院等に留学し勉学を修め、帰国後は母国の国造りに参画する人たちで、JICA ではこの留学生を“研修員”と呼んでいる。2017 年、鎌倉市立御成中で研修員参加の出前授業が始まった。交流はすべて英語だ。他市の小中高校にも拡大し、研修員と英語での交流を希望する学校が増えている。ある研修員は「日本の学校教育システムを見るチャンスだ。母国に帰ったらこの経験を活かしたい」と、母国に思いを馳せながら意欲的である。

ベトナム（ハー）　ラオス（ダーリン）　キルギス（アセーリ）　ベナン（ニコル）　ネパール（ビレンドラ）　タイ（ジェーン）

組織運営

SV 会は誕生以来、JICA の組織に合わせるような形で組織つくりが行われ、現在の東京地域、神奈川地域の 2 地域体制となった。
また、近年、PM 制度を導入し、SV 会の事業運営は、理事会主体の活動からプロジェクト主体の活動へと転換した。

定例会（水曜会、木曜会）の様子

SV 会は 2004 年 1 月、任意団体として創立（会員 143 名）、2005 年 11 月 NPO 法人となり、東京、神奈川を中心に活動している。上位組織として、総会、理事会、他に年 1 回の意見交換会がある。日常活動の組織として、定例会（水曜会、木曜会）、委員会、プロジェクト制度、が設けられている。これらの活動記録の保管場所として『出前講座資料館』、『公式資料保存庫』が整備された。

■組織の成立過程、組織の変遷■

最初に SV 会の組織としての成立過程を見ていこう。

SV 会は創立と同時に、㈱VSO に事務所（本部）を置き、ここを拠点に、JICA を表敬訪問しながら、会の組織つくりに奔走した。

委員会、PM制度の導入で、組織の活性化

2004 年 3 月、会員が地域で活動できるよう JICA の機構（JICA 筑波、JICA 八王子（当時）、JICA 横浜）に合わせて、3 つの地域分科会（茨城、多摩山梨、神奈川）が発足した。神奈川地域分科会は発足当初から JICA 横浜を活動拠点とし現在まで続いているが、茨城、多摩山梨の両地域分科会は、その後、両地域の会員数が多くないことから、自然消滅の状態となった。

2006 年 4 月、SV 会設立前から活動拠点を提供して頂いていた㈱VSOC（当時は㈱VSO）が広尾に移転したのをきっかけに、JICA の協力で JICA 広尾が SV 会の拠点となった。2012 年 9 月 JICA 広尾の閉鎖に伴い、活動拠点は東京都中央区ボランティア施設（協働ステーション中央）へと移り、その後 2015 年 12 月に JICA 東京へと移った。このような変遷を経て、現在の東京地域（JICA 東京）と神奈川地域（JICA 横浜）の 2 地域体制となる。

SV 会事務所は 2019 年 3 月、東京都紀尾井町（㈱VSOC）から東京都平河町（ファーストオフィス）に移転した。15 年の長きに亘る㈱VSOC のご厚意に感謝したい。

■委員会・・・異色の出前講座委員会の活動■

2010 年 11 月の臨時総会で、「教育分野での活動の充実を目差して」と題し SV 会初のパネル討議が行われた。ここで提起された多くの課題を検討するため、翌 2011 年 1 月、「教育活動充実部会」が発足した。主に学社連携をめざす出前授業の向上が中心テーマであったが、この種の委員会（部会含む）は SV 会初めてであり、以後の SV 会活動全般に新風を吹き込んだ。2013 年 6 月で終了したが、この活動は、後に述べる「出前講座委員会」に引き継がれた。

2012 年 6 月には、創成期の頃のエネルギッシュな活動を再生し新たな事業を発掘しようと「新規プロジェクト推進委員会」を立ち上げた。ミャンマー支援活動についての検討では、現地 NGO との交流を持ち、会員を在ミャンマー日本国大使館付属幼稚園に先生として派遣支援した。しかし、他の案件については困難が付きまとった。

「教育活動充実部会」設置のきっかけとなったパネル討議（2010 年 11 月）

第3章　SV 会の運営（組織運営）

2014 年 5 月、出前講座の発掘や運営について検討しようと「出前講座委員会」が発足した。第Ⅰ期（14～15 年度）、第Ⅱ期（16～17 年度）、第Ⅲ期（18 年～現在）と続いている。第Ⅰ期は出前講座に対する会員の意識調査、出前講座資料の収集保管閲覧のための『資料館』開設、第Ⅱ期は出前講座の規約作り、第Ⅲ期は多くの会員参加による出前講座の事例研究、など多彩な活動となった。

その後、雨戸のタケノコのように多くの委員会ができ、「社会貢献編」冊子編集委員会、アンケート検討委員会、15 周年記念誌編集委員会、HP 更新委員会などがある。

■PM 制度･･･「理事と PM は車の両輪」■

2015 年 5 月、須山理事長（当時）の下、PM 制度が検討された。当時の会報 145 号によると、「SV 会の活動（事業）も活発化して、理事会だけではその任を全うすることができなくなった。事業分野は、内容的に多岐に亘り、財政的にも安定し、毎年継続して実施できるようになったが、一方、一部の人に負担が集中する、ノウハウの継承が出来ない、会全体の統制・連携がない、といった問題点が顕在化してきた。そこで、もう少し組織的な運営をするために、プロジェクトマネージャー（PM）制度を設け、活動（事業）は PM に権限と責任を委譲し、理事会は会全体の運営および対外的責任を負うという役割分担にする」と書かれている。「理事と PM は車の両輪」だ。こうして、PM 制度の試行的運用が始まったのである。

またその頃、出前講座委員会でも、個々の出前講座の運営管理や講師募集をその責任者（PM）に任せるという事案を検討しており、2016 年 3 月、理事会に PM 名簿を申請し了承された。1 年の試行期間を経た 2016 年 5 月の総会後、PM 制度が本格的に運用を始め、その後、他分野にも広がり、現在の PM 制度になった。認定プロジェクトは表に示すように 20 程が登録されている。

SV 会には創立期以来、提案者が自らプロジェクトを立ち上げ、その活動の責任者になって推進するという、いわゆる“言いだしっぺ”文化の伝統があり、この文化が今日の SV 会を支えてきたともいえる。

■定例会･･･日常活動の意見交換の場、共有の場■

定例会は、2004 年 1 月、会の設立当初、第二・第四木曜日に開くことを決め、VSOC（当時 VSO）の一隅を借りて「木曜会」と名付けて始まった。その後、開催場所は、JICA 広尾⇒協働ステーション中央⇒JICA 東京と変遷した。2004 年 3 月に設置された神奈川地域分科会は、第一・第三水曜日に、これを「水曜会」と名付け、一貫して JICA 横浜で開催してきた。定例会開催は、初期の頃からそれぞれ月 2 回実施されてきたが、運営の簡素化のため、2018 年 6 月からそれぞれ月一回に変更された。

定例会はプロジェクトなどの日常活動を自由に話し合い、活動状況を共有する場である。ここで出た意見や課題は必要に応じて理事会で審議され、また、理事会での検討内容は定例会に伝えられ、会員全体の合意形成を図っている。定例会は実質的な意見などの発議・集約の場である（前頁上の写真を参照）。打合せ結果は、『保存庫』『資料館』に保管され、会員なら誰でも何時でもネット上で閲覧できる。SV 会は会員に対してオープンな組織を目指している。

委員会設置の歴史

委員会		期間	責任者
教育活動充実部会	第Ⅰ期	2011.01～2012.09	西田圭介・浅川克彦
	第Ⅱ期	2012.10～2013.09	須山勝彦
「社会貢献編」冊子編集委員会		2011.12～2013.05	加藤　隆
新規プロジェクト推進委員会		2012.06～2013.03	永見正敏
出前講座委員会	第Ⅰ期	2014.05～2015.08	広内俊夫
	第Ⅱ期	2016.01～2018.03	角井信行
	第Ⅲ期	2018.04～現在	桑田和幸
ロゴ・ロゴマーク審査委員会		2016.02～2016.05	山内茂夫
FF（Festa/Forum）委員会		2016.08～現在	森岡潔、井坂敏之
翻訳事業検討委員会		2018.01～2018.09	角井信行
アンケート検討委員会		2019.02～2019.12	松田信治
15周年記念誌編集委員会		2019.02～現在	広内俊夫
HP更新委員会		2019.06～2019.09	松田信治

PM制度の認定を受けたプロジェクト（2016年以降）

プロジェクト		期間	初期（中期）	現在のPM
杉並区教育委員会出前授業		2006.04～現在	塩田悦三郎	井上節子
新宿区教育委員会出前授業		2008.04～現在	井上節子	井上節子
KISTEC出前授業		2008.02～現在	上田恵一	鈴木　新
神奈川県環境農政局出前授業		2008.12～現在	稲葉大策	稲葉大策
JICA研修員出前授業		2016.03～現在	舟田正夫	永見正敏
東京オリパラ出前授業		2016.10～現在	桑田和幸	松田信治
グローバルフェスタ・協力隊祭り		2006.09～現在	須山勝彦	須山勝彦
よこはま国際フェス・タフォーラム		2008.08～現在	大橋輝美	井坂敏之
あーすぷらざ市民講座		2014.05～2018.09	臼井道雄	（北脇和夫）
日本セカンドライフ	第Ⅱ期	2014.11～現在	桑田和幸	桑田和幸
「学校だより」翻訳		2007.04～現在	角井信行	角井信行
「シニアの挑戦」冊子編纂		2009.10～現在	広内俊夫	広内俊夫
公式資料保存庫・HP		2013.12～現在	浅川克彦	森岡　潔
出前講座資料館		2014.02～現在	広内俊夫	広内俊夫
SV帰国報告会	第Ⅱ期	2016.10～現在	松田信治	橋本敬次
SV帰国時オリエンテーション		2007.10～現在	木場・桑田	鈴木秀秋
体験発表会		2007.07～現在	野口悉治	井坂敏之
会員のひろば	第Ⅱ期	2015.06～現在	永渕寛幸	鈴木秀秋
外国籍児童生徒学習支援（新宿）		2008.08～現在	奥谷規子	須山勝彦
外国籍児童生徒学習支援（横浜）		2013.08～2019.03	堀川正照	（舟田正夫）
中小企業海外展開支援		2018.07～現在	鈴木　新	鈴木　新

「教育活動充実部会」の様子（2011 年 9 月）プレゼンテーションの仕方

広報活動

SV 会では内外に各種の広報活動を行っている。会報の発行、ホームページ、Facebook の開設の他、冊子「シニアの挑戦」、広報誌の発行を行い、社会へアピールしてきた。また、会員が地域放送番組に出演し体験談を発信している。他に、会員向け専用情報として、資料館、保存庫がある。

左：最新（第Ⅲ期）のホームページ、右：Facebook

■会報･･･毎月 1 回発行、15 年間継続■

創立まもない 3 月に「SV 経験を活かす会 NEWS 創刊号」が「NEWS」の名で発行された。これは紙媒体であり 4 号で終わった。一方、現在のメール添付形式の「会報」は「同報メール」という名前で、同年 10 月に第 1 号が発行されている。創立会員の中に E メールの登録・普及に熱心な会員がいたお蔭である。なお、「同報メール」は、38 号（2007 年 7 月）から「会報」と名前を変え、現在に至る。「会報」は現在まで 190 号が発行され、全会員および一部の JICA 関係部署に配信されている。

時代の変化とともに、多彩なメディアで社会へ情報発信

会報の編集は当初から理事が担当した。2005 年の NPO 設立総会時から「編集：鈴木庄一」と編集者名を入れるようになった。以後編集者は広報担当理事が持ち回り、2009～舟田正夫、2011～加藤隆、2013～齋尾恭子、2015～山内茂夫、2017～北脇和夫、と次々に替わったが、現在に至るまで基本的に月 1 回発行が続いており、そのすべてが保存庫にアーカイブされている、驚嘆すべきことかも知れない。

会報の内容を見てみよう。編集者の性格が反映しているようだ。ジャーナリスト出身者が編集を務めた初期の頃は、新聞のようなニュース性の記事が多かったが、その後、新入会員の紹介や出前授業などイベント記事が占めるようになり、デザインや IT 系の出身者が編集を務める近年は、写真も多くカラフルな紙面構成となった。

左：同報メール 1 号、　右：会報 186 号

■ホームページ（HP）･･･IT 技術の進歩と共に■

HP の歴史は 3 期に分けられる。第Ⅰ期（2006 年 2 月～西田圭介）、第Ⅱ期（2011 年 9 月～浅川克彦）、第Ⅲ期 2019 年 9 月～森岡潔）。運営管理者はいずれも IT 技術で途上国を支援した IT 技術に詳しい会員たちだ。

2006 年 2 月、西田会員を中心とした精力的な構築作業により、HP アドレスが「同報 18 号」の表紙を飾った。

HP（ウェブ）の技術の進歩・流行の移り変わりは激しく、どうしても更新が必要になる。会報 88 号（2011 年 8 月）には、浅川理事（当時）名で「HP の見直し作業を始めます。会のブランディングとしてインターネット上の住所といえる URL とメールアドレスを下記のように変更します」とあり、2011 年 9 月よりアドレス（http://jicasvob.com/、info@jicasvob.com）が使われるようになった。

そして 2019 年 9 月より現在の HP となった。森岡理事のリーダーシップのもと専門業者に依頼し、イメージを前面に打出した現代風のデザインとなった。セキュリティ強化の暗号化接続のためアドレスは https://jicasvob.com/ となり、スマートフォン

第Ⅱ期のホームページ（2011～2019）

からの接続で自動的に画面の形が変わる。また、入会申込や出前講座依頼がウェブ上からできるようになった。

■Facebook・・・・・会員への普及は？■

「Facebook は、広告・告知の手段として重要になって来た」との北脇会員の提案により、2015 年 10 月に理事会で認められ、開設した。以後、SV 帰国報告会、あーすぷらざ、フォーラム・フェスタ等の告知、開催報告を掲載しているが、なかなか集客には繋がっていない。それどころか、Facebook 自体が下火になって来ているとの世評もある。また、定例会での審議の際、「乗っ取られるのでは」等の危惧を表す会員が多く、投稿を書き込めないなど、機能を制限していることも一因かも知れない。

■冊子「シニアの挑戦」・・・世界へ発信■

体験発表会が第 50 回を迎えた 2009 年 10 月、会員が発表した講演内容を冊子にまとめ、“SV 会全体の共有財産”にしたらとの声があがった。パラグアイ移民史を編纂した経験のある広内俊夫会員が中心になり、企画・編集を担当、冊子「シニアの挑戦！国際協力の現場を語る」第Ⅰ集が 2010 年 11 月に刊行された。冊子第Ⅰ集には、刊行の目的・意義がこう書かれている。『その目的・意義は、①会員の活動の記録、②会員相互の情報共有、③社会への情報発信、などです・・・略・・・この冊子化活動が、SV 会の新たな文化創造を担い、SV 会の社会的価値を高め、併せて社会貢献の一助にでもなればと願っております』。

第Ⅰ集（2010 年 11 月）　第Ⅱ集（2011 年 11 月）　第Ⅲ集（2014 年 3 月）　第Ⅳ集（2017 年 12 月）

引き続き、第Ⅱ集が 2011 年 11 月に、第Ⅲ集が 2014 年 3 月に、第Ⅳ集は 2017 年 12 月に刊行された。特に、第Ⅳ集は、木野本 JICA 東京所長、朝熊 JICA 横浜所長から祝辞を頂き、JICA の海外事務所、国内事務所（計 50 数箇所）に送付された。

全Ⅰ～Ⅳ集を通じて 145 名の会員から 195 編の体験談が寄せられた。会員の途上国での活動が分かり易く書かれており、シニアの「生き甲斐の記録」である。SV 会や JICA の貴重な財産となった。

広報誌（2013 年 5 月）

■広報誌・・・SV 会の活動を社会へアピール■

SV 会の活動を社会にアピールしようと広報誌の計画が 2011 年 12 月に持ち上がった。2012 年 4 月、編集委員会を組織し、2013 年 5 月、広報誌「帰国シニアの挑戦～地域社会と世界を結ぶ～」を刊行した。

また 2018 年 2 月の定例会で、10 月のプロジェクト会議で、会員から「2019 年は創立 15 周年、記念誌（広報誌）を出版しよう」との声があがり、翌 2019 年 2 月に編集委員会が発足した。11 名の委員が、会員から原稿を集め、12 月の刊行に向けて編集を行った。

■地域放送番組「シニアの挑戦」・・・湘南ビーチＦＭ■

2018 年、JICA 横浜が担当していた湘南ビーチ FM の番組を SV 会が引き継ぎ、担当することになった。放送日は偶数月の第 1 水曜日。テーマは「シニアの挑戦」。森川パーソナリティの質問に応えるライブトークショーである。第 1 回は同年 4 月に行われた。2019 年 12 月現在 11 名の会員が出演、途上国での体験を語った。

その体験談は軽快な音楽に乗せて湘南地域に響き渡る。なお、一部のライブトークショーについては美しいビデオ映像と一体化され、資料館に保存されている。

■会員向け専用情報・・・資料館、保存庫■

資料館と保存庫はホームページ上の会員専用ページに設置されており、会員であれば、何時でも何処でも閲覧できるオープンなシステムとして提供されている。

出前講座資料館・・・出前講座を中心とした情報である。2014 年 10 月から設計開始し 12 月に完成。翌 2015 年 2 月に開館となった。登録資料は講座履歴やプレゼン資料。その後改修が行われ、AI 技術を活用した映像ビデオなど多くの情報が登録された。SV 会の「知の殿堂」である。

公式資料保存庫・・・SV 会の公式資料である会報、定例会議事録、号外、総会資料、理事会資料、申請資料、会員名簿などを保管。2014 年 12 月に開館した。

湘南ビーチ FM（永見正敏）

出前講座委員会

出前講座は SV 会の主要事業である。出前講座委員会は 2014 年 5 月に発足し、会活動全体を牽引し、文化創造的な役割を担ってきた。この委員会の前身である教育活動充実部会も入れると、活動実績は 2019 年 9 月で会議開催 100 回を迎えた。出前講座と出前講座委員会、その周辺に光をあて、SV 会の 15 年史を見ていこう。

出前講座委員会（2014 年 11 月 13 日）中央区

■SV 会の出前講座 15 年の潮流■

SV 会の初の本格的な市民講座は 2004 年 8 月、杉並区方南和泉地区で行われた「中高年の海外ボランティア活動は・・・」であった。JICA 幹部も見学に訪れ、この講座の成功は会員たちに自信を与え、後の杉並区教育委員会との協働事業への参加の契機となった。出前講座には小中高の児童生徒を対象とした「出前授業」と大人（大学生も含む）を対象とした「市民講座」に大別される。

出前授業・・・2006 年 4 月から杉並区教育委員会、2008 年 4 月から新宿区教育委員会と協働事業、委託事業が始まる。これは井上会員らにより SV 会を牽引する大きな潮流となり、現在まで続く。また、2008 年頃から上田、稲葉両会員が神奈川県の理科教育に参加し、近年協力者も増え隆盛を迎えた。

会活動を牽引した出前講座委員会、広範な文化創造を目指して

2016 年度から鎌倉市立御成中学校で JICA 研修員の国際理解教育を兼ねた英語出前授業が実施され、その後、横浜・川崎・横須賀へと、小学校・高校へと発展し、SV 会出前授業の新たな潮流となった。また、同じ頃、東京オリパラ出前授業が始まり、SV 会は 2 講座を登録した。学校から依頼が来たら、会員を公募し派遣している。

市民講座・・・2006 年 1 月～3 月、㈱アクティオと共催して板橋区ふれあい館で「人生を語る」6 講座を開催した。その後、同年 7 月～12 月さかえ未来塾「定年後の社会貢献を海外で」16 講座、2007 年 10 月～2008 年 2 月かわさき市民アカデミー「開発援助」12 講座、2008 年 9 月新宿コズミックセンター「途上国の実情」4 講座など大型企画を開催した。しかし、努力の割には、いずれも集客が難しかった。

その後、2007 年度～2012 年度、地球ひろばで「SV 経験者に聞く」を JICA 共催で企画、2011 年度～現在、よこはま国際フェスタ・フォーラム、2014 年～2018 年度、あーすぷらざで「シニアの挑戦」シリーズを展開した。

また、会員個人が公民館や施設の推進員等となり、SV 会会員を講師として派遣し実施した講座もある。小金井

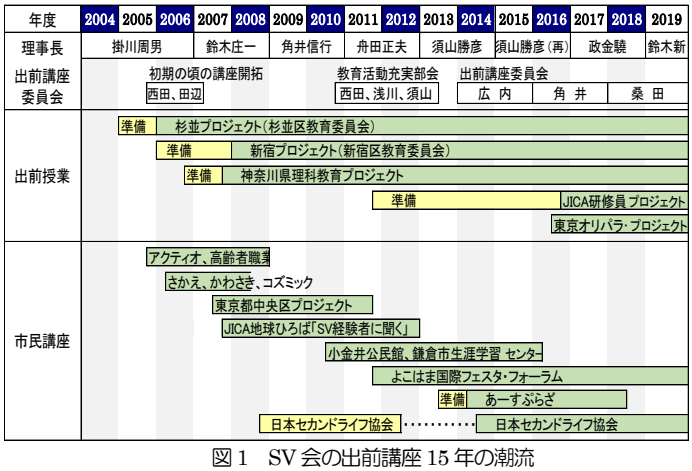


図 1　SV 会の出前講座 15 年の潮流

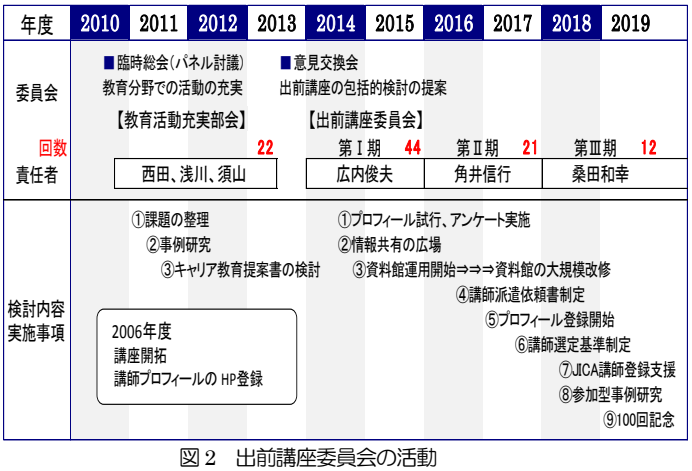


図 2　出前講座委員会の活動

公民館（桂、井上）、鎌倉市生涯学習センター（安藤、広内）、日本セカンドライフ協会（桑田）などである。

出前講座の実績・・・以上は SV 会が会として組織的に実施した出前講座であるが、図 1 には記載していないが、これ以外に JICA などの機関から依頼されて、その都度、会員を公募して派遣している出前講座が多数ある。創立以来の 15 年間の実績を出前講座資料館のデータを基に図 3 に示す。

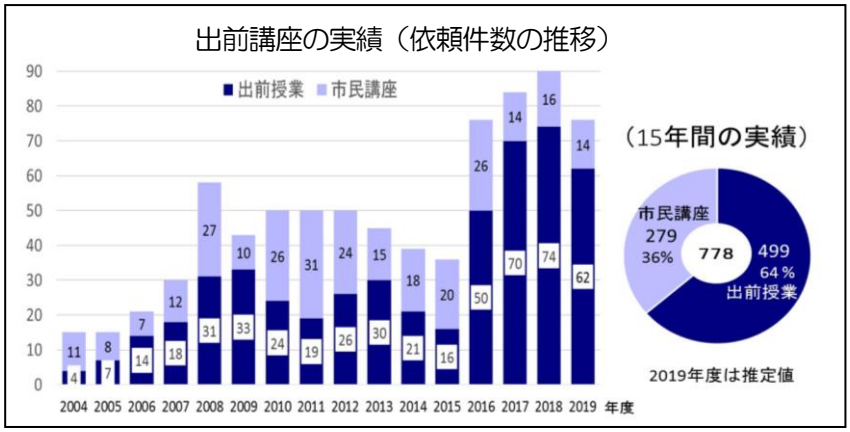


図 3　出前講座の実績（依頼件数の推移、15 年間の実績）

■出前講座委員会の活動■

制度化・基盤整備・・・2010 年 11 月の臨時総会でパネル討論「教育分野での活動の充実を目指して」が行われた。これを契機に翌 2011 年 1 月、「教育活動充実部会」が開催され、出前授業についても多くの議論がなされた。その後、2013 年 11 月の意見交換会で“出前講座について包括的に検討しよう”との提案があり、翌 2014 年 5 月に「出前講座委員会」が発足した。毎月一度、出前講座に関心の高い有志が集まり意見交換を行い、合意事項については制度化や基盤整備を実施している。

３期に亘る文化創造活動・・・出前講座委員会は、第Ⅰ期（2014～15 年度:広内）、第Ⅱ期（2016～17 年度:角井）、第Ⅲ期（2018 年度～現在：桑田）の 3 期に分けられる。多くの中で其々代表的な検討・実施事項について見てみよう。第Ⅰ期は出前講座資料館の開設である。今までの出前講座の実施履歴や会員のプレゼン資料などを整備し資料館に登録。これらは会の共有財産とし、SV 会の「知の殿堂」となった。第Ⅱ期は出前講座の制度化である。講師選定の透明性確保のためのルール作りなど各種の制度を確立した。第Ⅲ期は出前講座の事例研究である。会員の講師技量向上を目指し、多くの会員が参加し意見交換を行い、会員同士が切磋琢磨できる場を提供している。

このように、出前講座委員会は、単に出前講座事業だけでなく、SV 会活動全体を支える広範な文化創造活動を果たしてきたと言える。

■出前講座委員会の「これからを考える」■

「100 回記念大会」・・・第Ⅲ期が始まって丁度 1 年経った 2019 年 4 月、委員会としての新年度活動方針を思い巡らしながら出前講座資料館に目を走らせていると、委員会の開催（教育活動充実部会 22 回、出前講座委員会（3 期合計 73 回））の合計がこの 9 月に 100 回目となることが判明した。関係者と相談して「100 回記念大会」を催すことを提案し、2019 年 9 月 12 日に JICA 東京で会員 21 名参加の下、「100 回記念大会」を開催することができた。

“わたしの思い”・・・記念大会は、会員の海外体験や出前講師の履歴、これからの出前講座への“わたしの思い”を事前にまとめ、それを基に自由に語り合う場とした。司会者の絶妙な進行・采配で、まとめて頂いた 36 人全員の“わたしの思い”を簡潔に披露することができ、お互いを理解しあえる最高の時間を共有することができた。ここで得られた情報はまさに SV 会における出前講座の今後の方向性を示す至宝とも言えるものである。“わたしの思い”の中には、出前講座の形式や質（ペア授業、市民講座、プレゼン力等）に関わるものから、更に社会への投げかけ（外国人の受け入れ拡大、日本語支援、社会への発信等）を問うもの等深みのあるものが潜んでいる。

“多くの会員に出前講座を”・・・この委員会は“より多くの会員に、聞き手への満足度を高めながら、より多くの出前講座の機会をもって貰うこと”を主旨としており、一人一人の思いを大切にしながら取り組んでいきたい。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

出前講座委員会は、「次代を担う子供たちに『驚きと感動』の出前授業を」「シニアに『人生 100 年時代』の市民講座を」目指して、広範な文化創造活動を続けています。

「100 回記念大会」（2019 年 9 月 12 日）。スクリーン中央に「祝」マーク

その夜明けから創立の時代を語る

座談会の主旨説明をする広内会員

編集委員会では、創立期のシニアの熱い思いを記録に残し、後世に伝えようと、座談会を企画した。5月22日、会の基盤を作った創立期の11名の会員に集まって頂き、当時の状況やご自身の活動などを話して頂いた。

（発表者は敬称略）

自分の持てる技術を活かし、会の運営に参加

須山会員のさりげない司会で、創立期を振り返る座談会は始まった。最初に15周年記念誌編集委員会の広内会員から座談会の趣旨説明がなされた･･･記念誌に創立期の時代を語り合う座談会が企画され、熱い思いで活躍された皆様に、創立期当時を振り返って頂ければと。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

藤谷　SV会は創立から15年も続いているが、何故続くことが出来たのか。まずは創立直後、関東甲信越公民館大会でSV会のPRが決定。当時の掛川会長は、「考えるので任せて・・」と。当日、自作の携帯屋台にPRポスターとパンフレットを載せ、全員で動き回り、短時間でパンフの配布を終了した。また、2004年8月、杉並区で「中高年の海外でのボランティア活動」をテーマに会員のパネルトークが立案実施。鈴木（庄一）副会長が、「発言者が内容を書けば台本を・・」と、現職時の特技を活かして聴衆全員から意見を取り、活発な討論が交わされた。当日臨席のJICA東京筧次長が以後の説明会にパネルトークを採用。2005年総会後にインドネシアの現地SVとの衛星テレビ会議を実施。鈴木副会長が台本を作り、充実した会議となった。このような自分の出来ることをするという事例が会を支え、発展させたと考える。

小川　先ほどの杉並区のパネルトークに参加、また、神奈川県立元石川高校で、「シニアボランテイアから見た世界」と称する講演会で、他の3人と共に話をした。藤谷会員のご尽力により杉並区についで新宿区の協働事業が始まり、そこでは塩田会員のめざましい活躍があった。SV会のNEWS作成を提案し、カラー入りで完成した（お手伝いした。懐かしいとの声）。現在はSV会定例会にはなかなか出られないが、新宿での日本語教育は今でも継続しており、これまでに、7校、11人の小中学生を支援してきた。

角井　掛川氏からの会設立の呼び掛けに応じて、VSO宮益坂上の事務所を借りて設立準備の会合が始まった。このキッカケはJICAにおられたVSO吉満会長のお声がかりがあった。2004年1月JICA広尾で創立総会。任意団体として船出した。その後もVSO事務所の一隅を毎週木曜日に使わせてもらった。VSOが組織変更でVSOCに替わり、事務所が移転しても、2019年3月SV会の事務所を独自に登録するまでお世話になった。会の当初は、相互に全く経歴の異なるシニア集団であって、何をやってよいかは全く暗中模索であった。言い出しっぺの責任で実行することにしたが、熱い思い出が残る。

工藤　SV会入会前に、掛川氏はアフリカに鉱山の仕事で行かれ、私は、アフリカの農場で現地農作業の年間企

日時	2019年5月22日　13時～14:30分
会場	JICA東京　306号室
出席者	小川弘子、須山勝彦、角井信行、藤谷芳孝、工藤　巖、杉山　旭、山田史子、野口烝治、大橋輝美、井上節子、西田圭介
主催	編集委員会　（出席編集委員8名）

第4章　会員の活躍（座談会Ⅰ）

画を作った。現地での面識はなかったが、2004 年帰国後にその業績を掛川氏が評価してくれて入会。創立期には、他の地域活動のために SV 会の運営には余り関与せずにきてしまったのは残念。

杉山　楽しみながら神奈川地域分科会を中心に活動。

JICA 横浜では早くから、事務所や会議室を借用できたことにメリットがあった。横浜の活動と東京の活動の連携はとれていた。横浜国際フェスタなど外部活動で、外国コインを子供に配ることを提案。お金を洗い、袋に詰めた。（ここで、須山会員より「杉山会員は 2005 年 7 月発足の体験発表会の言い出しっぺで、発表者の第 1 号です」との紹介があった）。

山田　任意団体から NPO への移行には多くの会員が役所に通いつめてそれを可能としたことに感銘を受けた。

藤谷会員の働きで杉並区協働事業が発足。これにも会員有志が協力、内容を固めた。そのような中、天皇誕生日に緒方貞子氏、SV 会から掛川氏、JICA の方 1 名の計 3 名が招待され、SV 会の認知度が高く、誇りを持った。（ここで、藤谷会員から「山田会員は 2000 年ブラジルの日本語図書館に司書教諭として行かれ、約 5 万冊に及ぶ書籍を整理された」ことが紹介）。

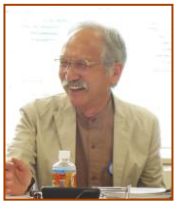
野口　2004 年に JICA 帰国報告会で、SV 会を紹介され、直ちに入会。JICA 横浜での帰国報告会では、その頃には今ほど普及していなかったパワーポイントによる発表を行い、好評を博した。また、体験発表会には友人が出席してくれた喜びがあり、その直後の横浜国際フェスタでのステージ報告などがキッカケで体験発表会の運営を引き受け、毎月第 3 水曜日の慣例化に努めた。（西田会員よりその功績大の声）。杉並区、新宿区協働事業他 SV 会の出前講座にも極力参加することに努め、現在も協力している。

大橋　「横浜国際フェスタ」の立ち上げ期に活動。会員全員から現地での活動写真を募集し、大勢の提供資料から 350 コマもある画像資料を作成し、横浜国際フェスタで紹介。当時は発表熱が高く、調整できないほどの希望が出た。赴任時の知人が家族連れで来日し見学したことなどがキッカケで、その後、海外移住資料館の説明員になる。現在も実施している。

井上　最後の教員としての勤務先が杉並区であったので杉並区協働事業に深く関わることになった。当時「総合的な学習の時間」という枠があった点も受入れを可能にした。その後学校現場からの要請もあり、ネイテイブを含む「ペア授業」が始まり、好評。当時の学校は外部に授業を依頼することは余りなく、杉並区や新宿区での勤務経験や人間関係などが協働事業を進める上で役立った部分もあった。

西田　パソコンの特技を活かし、鈴木（芳雄）会員を中心に、最初は名簿を整備。次にホームページの作成を提案するが、内部にかなりの抵抗があり、苦労しながらも、最終的には掛川理事長の判断で実施した。それは今でも SV 会のホームページの下敷きとなっている。ホームページでの仕組み、掲示板の処置なども実施した。その他、水曜会に餃子屋での懇親会の面倒を見続ける（笑い声）。

須山　仲間との連携による活動の充実を目指して入会した。再度の JICA-SV として派遣され、創立期には余り関与できなかったが、帰国時に定例会に出席し関係を深めた。任国より「現地便り」を送る。杉並・新宿区協働事業では記録係を長く努めた。



・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

自由討議　会の組織文化について意見が活発に交わされた･･･①単なる意見具申ではなく、言い出しっぺが自ら進んですることが大事、②自分が出来なくとも言い出せるような雰囲気も大切、③余り強制しない自由な雰囲気で、先人と後人が一緒にやっていける会でありたい、等。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

最後に齋尾会員が、編集委員会を代表して挨拶に立ち、こう締め括った･･･創立時には、殊に色々なタイプの方が、各々自分の持っている技術を活かして、会を運営されたことに、改めて感銘した。皆様のご出席に深謝したい。

座談会出席者と編集委員

座談会の主旨説明をする広内会員

ＳＶ会の現在、明日を語る

編集委員会では、座談会Ⅰに続き、明日のSV会に思いを馳せ、将来の SV 会の在り方について語って頂こうと、座談会Ⅱを企画した。8月28日、比較的新しい会員9名の方に集まって頂き、ご自身の“熱い思い”などを話して頂いた。

（発表者は敬称略）

夢は広がる。「世界の未来を創るSV会でありたい」

「SV 会に入ったきっかけ」、「印象に残っている活動」の第 1 ラウンド（割愛）に続き、第 2 ラウンドは、「SV 会に期待すること」、「明日に向けての提言」、そして、「新会員が活動に入り込みやすくするために」。宮井会員のきびきびした司会で 1 人 5 分がほぼ守られて一周した。

伊藤　最初に参加したのは「蕎麦打ち」。「どんな人がいるか覗いてみよう」⇒「いいかもな」⇒「定例会」という流れは入り込みやすかった。今後、様々な国から日本に来ている人たちの助けになることをしたい。海外にいる時、声を掛けてくれる人がいてうれしかったから。新会員を取り込むためのアイデア：SV の帰国オリエンテーション終了後に、JICA のプログラムに入れてもらって「お帰りなさい会」をやる。帰ってきたばかりの興奮の中ではいろいろなことをとても語りたい。でも誰も彼にも話すと自慢してると思われてしまうから言えない。SV 会の人たちが聞いてくれて、「どうでしたか？お疲れ様でした。」とか言ってくれたらすごくいいと思う。

井坂　少子高齢化のなかで、何もすることがない老人を引き込む活動がしたい。海外に出て日本と日本人の素晴らしさに気づいた我々は、これを子供達に伝え、誇りと自信が持てるようにしたい。少数の人に過重負担がかからないように、新しい人に少しずつ入っていてもらえるように。中小企業海外展開支援について、やりたい人・やれる人（能力を発揮できる人）がいるんじゃないか。

鈴木　いつも悩んでいることに、定例会で一言も発言しない人がいることがある。皆が語れるような議題を必ず入れていく必要があるだろう。中小企業海外展開支援については別稿に書くが、一方で「みんなと月 1 回会って飲めればいい」という人たちもいて、新たな事業とどう組み合わせるかは難しい。何か引き出せるものはあるのでは。新入会員が出てこなくなることについては、アンケート結果を参考にしながら考えていきたい。

松田　この会は、After(帰国後)が中心だが、もっと Before や Middle があってもいい。派遣前表敬訪問のときにコネを作って、派遣中の悩み相談にも応えられるようにしたい。Before では、以前は「何でも相談会」で知り合って、応募書類の書き方を見てあげたこともあったが、今後は HP にそういうことを組み込みたい。SV 会は SV 経験者の「社会還元」ができる場として、いろいろな活動の場を用意していきたい。とくに外国から日本に来た人たちのための活動を

日時	2019 年 8 月 28 日　13:30～15:30
会場	JICA 横浜　セミナールーム 4
出席者	伊藤惠利子、井坂敏之、鈴木新、松田信治、森岡潔、森妙子、森野謙、加藤隆、宮井美津子 オブザーバー；野口忝治
主催	編集委員会（北脇和夫、齋尾恭子、広内俊夫）

広げたい。アンケートで多かったのは「日本語・放課後学習支援」だ。新しい会員に活動に入ってもらうには、マンツーマンが必要、役割を担ってもらう（「これやってください」ではなく、「一緒にやりましょう」と）。定例会の後の懇親会も重要だ。

森岡　「きょういく」（今日行くところがある）と「きょうよう」（今日用がある）。これがあるために元気で暮らせる。2 年前に経理の仕事を森野さんから引き継いだが、経理を 60 代になってできるとは思ってもみなかった。面白いし勉強になる。新しい世界が開ける。今は HP のリニューアルに取り組んでいるが、広報はすごく大事だと思う。また、このお蔭でいろいろな知識を勉強せざるを得なくなった。ケネディ大統領の有名な就任演説、「国家が諸君のために何かをしてくれるのを期待するのではなく、諸君が国家のために何ができるのか問いたまえ」は、組織とメンバーの間の永遠の真理ではないか。SV 会でもそうだと思う。誰かが楽しいこと、やりがいを用意してくれるのではなく、自分が SV 会のためにできることをやる。私が他人に教えられるのは、蕎麦打ちと PC 操作法なので、教室を開いた。できることなので継続してやりたい。新会員が活動に入りやすくするには、背中を押してあげることだと思う。一歩を踏み出すには勇気がいる。踏み出せば何とかなる。

森　「経験を活かす会」の名の通り経験を活かして、出前授業でこれからの日本を背負ってくれる人たちに夢を与えたい。広報は大事だと思い、私も「退職校長会」というところで、SV 会の話をしてきた。この前の帰国報告会に来た親子連れに聞いてみたら「JICA の HP を見た」と言っていたが、今後は「SV 会の HP を見た」にしたい。学校訪問をして気づいたが、映像での PR は効果的だ。新入会員のときは、餃子屋さんについて行くまでにも勇気が要った。新しい人が入会したら誰かが必ず声をかけて、次回も来たくなる雰囲気作りをしたい。

森野　会社の OB 会は会社の序列が残るのに対し、SV 会はそういうことが一切ない。年齢・職種・経験・出身・派遣国も違う専門的な知識・技能を持った人たちが集まる素晴らしいグループであることを再認識すべきだし、外にもアピールすべきだ。これだけユニークな経験の持ち主が 100 人以上集まっているというのはシンクタンクとしても価値がある。このメリットを自覚してもらうためには職種別等の会員リストが必要。我々は途上国でお世話になったのだから、こんどは日本を訪問した外国人のお世話がしたい。新入会員のとき活動に入るには勇気が要る。そこまでの繋ぎのサポート、メンターのようなものが必要。できれば同じ派遣国がいい。せっかく何かしようと入会したのに何もしないうちにやめる人がいるのは残念だ。

加藤　皆さんと共鳴することが多く、興奮気味だ。SV 会は構成する人たちが素晴らしい。これを PR すべきだ。マスコミに訴えるとか、地方公共団体の広報誌に売り込むとか。自慢になるかも知れないが、出身会社の OBOG 会で訴えて、私が ICT ボランティア会というのを作ったら入会希望者が殺到した。そういうコネクションは有効だ。大学・高専への出前講座を広げては。入ったばかりの人にはやらせたくないというムードがあるように感じたが、新入会員には、メンター／チューターを付けて一歩踏み出してもらうべきだ。

宮井　SV 会に期待すること：①活動する団体であること、②生涯学習、③「きょうよう」と「きょういく」、④哲学。生涯現役でいたい。そこで「JICA ボランティアの定年を延長してほしい」と河野外務大臣のレセプションのとき直訴した。外国で税金で活動してきたのだから、社会還元したい。世界の未来を創る SV 会でありたい。アンケートでは「活動している」という意見が多かったが、会員間の繋がりが弱くなっていると感じる。そのためにもホームページが一助になる。人生 100 年活動する SV 会になればと思う。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

最後に、野口会員から「若い会員の情熱を知った」、北脇会員から「SV 会に輝きがあったことを思い知らせてくれた」、斎尾会員から「明日の SV 会の在り方について意見が一杯出た」との感想が述べられ、座談会は終了した。

「中高年の海外ボランティア活動は・・・」2004 年 8 月　右から 2 人目：鈴木庄一会員

鈴木　庄一
モロッコ、ビデオ番組制作
2001 年～2003 年

SV 会は誕生したが、任意団体のままでは、会の社会的認知は得られないとの判断から、NPO 化に踏み切る。その後、杉並区協働事業の参加も進み、活動の方向性について正しいとの自信を得た。こうして誕生から 3 年で、今日の SV 会の発展の基礎ができたと思う。

（2006~2007 年度　理事長）

逝る熱気・・・創立期に燃えたシニア魂

SV 会の誕生から 3 年間を振り返ってみます。その中に、現在の活動に繋がる礎を伺い知ることができるからです。

■JICA の傘の下、活動の場の創造■

2004 年の当初、JICA 活動に寄り添い、係り合える分野への模索を続けている間に、「ボランティア家族連絡会」、「SV 募集説明会」などに参加するチャンスを得ました。一方、組織作りの一環として、会員との意思疎通を図るためのツールとして月 1 回の「会報の発行」をレギュラー化しました。また神奈川分科会による公立中学校への出前授業初チャレンジなどがありました。

この年の特筆すべきイベントは、杉並区で行なわれた本格市民講座です。「中高年の海外ボランティア活動は・・・」をタイトルとする自前の講座は、杉並区の地域活動に関わっていた藤谷元副会長の尽力もあり、所期以上の成果を挙げることができました。JICA 幹部も見学に訪れたこのイベントの成功は、会員たちに自分たちの活動の方向性や道筋について正しいとの自信を与えました。

■NGO から NPO、そして杉並協働事業■

2005 年は、活動、組織の両面で顕著な足跡を残しました。任意の団体 NGO から特定非営利活動法人(NPO)への変身です。当初会員の中には、「週一回のお茶飲会でいいのでは・・・」との意見もありましたが、組織が NGO では、社会の認知は得られなとの判断から、法人ステイタスである NPO 化へ大きく舵を切る事になりました。折りしも、杉並区協働事業への参画に関する提案が採用されたことと相まって、活動に自信を持って取り組めるようになりました。

このほか、JICA 東京とインドネシアを結んで現地の SV とのテレビ会議が実現、また神奈川分科会で体験発表会が始まったのもこの年からでした。

■チャレンジに燃えた多くの仲間がいました■

体制整備が進む 2006 年度は、学校教育支援の杉並協働事業がスタート、新宿協働事業参画へのステップとして、大久保小学校外国人子女に対する教育支援に対する取り組みも始まり、活動範囲が一気に拡大したわけです。

地域社会との連携も深まり、板橋区ふれあい館との共同企画、JICA と提携した帰国報告会、さかえ未来塾での発表会など現在の市民講座の礎となるべき活動が、積極的に展開され、またグローバルフェスタへの初参加も実現するなど多彩な活動に彩られた月日でした。

創立期の 3 年は走りすぎと思えるほど充実した期間でした。そこには逝るシニアたちの熱き思いがありました。腹蔵なく意見を出し合い、協力惜しまず、汗かくことを厭わない仲間たちがいました。

2017 年度総会で発言する鈴木庄一会員

SV 会で初めての市民講座（当時の仲間たち）

途上国支援

松田　信治
キルギス、視覚障害者指導
2011 年～2013 年

視覚障害者指導でキルギスへ。そこで全盲歌手のグルムさんに出会う。彼女の澄んだ歌声に魅せられ、帰国後、彼女を呼んで日本でキルギス視覚障害者のためのチャリティコンサートを開く。
こうした活動を通じ、会員が活動しやすい仕組みの必要性を感じ、会員の活動のための助成金の創設を提案したい。

グルムさん高齢者施設でコンサート、挨拶する松田会員（2016 年 1 月）

ライフワークは「日本とキルギスとの懸け橋」

■任国キルギスから帰国後、SV 会の活動に参加■

私は 2010 年の JICA の秋募集で、「視覚障害者指導」を見つけ、応募したのがキルギスという日本では馴染みのない国でした。しかし自分の得意分野である「走る」ことを武器にして、キルギスの視覚障害者の仲間とキルギスの美しい原野を走り、充実した 2 年間でした。

キルギスから帰国して JICA の「帰国オリエンテーション」で SV 会を知り、連絡すると、定例会の参加の案内が来ました。参加すると、私より 10 歳も 20 歳も年上の先輩会員の熱意を見るにつけ 「JICA で言われた社会還元は SV 会で行おう！」と SV 会に即入会。その後、出前授業に積極的に手を挙げるようになりました。

■SV 会活動･･･新しい仲間と知り合える喜び■

私は入会後 2 年経過したところで「理事」になることを勧められ、「SV 会に恩返し」をしようと引き受けました。そしていくつかの PM を引き受け、活動する中で、徐々に会の活動が見えてきました。その中で私が注力したのが一時、中断していた「帰国報告会」の再開でした。

そのきっかけは、会員数の減少と新会員があまり入ってこなくなったことです。この帰国報告会の再開後に会員になってくれる方が増えてきたことと、毎回、発表される方々の話を聞いて、刺激を受けて、ワクワクし、高揚した気持ちになったことです。

■帰国後も続けるキルギス支援■

キルギス赴任中にたまたま出会った全盲歌手グルムさんの天性の澄んだ美声に惹かれた私は、赴任中に、日本の曲を数曲、彼女に渡し、首都ビシュケクで歌う機会を増やしてきました。そして帰国時に「日本で日本の方々に日本の曲を歌いたい」というグルムさんの願いを聞き、帰国後毎年、日本各地で彼女のコンサートを開催してきました。そんな中、日テレの「2016 年春のど自慢 THE ワールド」で彼女が優勝を果たすなど、彼女を支援することが「日本とキルギスの架け橋」になることを実感し、両国の架け橋をライフワークとして実践しています。

■今私が SV 会に望むこと･･･助成金の創設■

会員の方で、「自分の赴任国で引き続いて活動を継続したい、新しいことをやってみたい」という方がいたら、是非、会はその会員を応援してあげて欲しいです。そのため、私は、会員の活動のための助成金を創設することを提案したいと思います。会員から助成案件を公募し、審査のうえ、その活動内容が良ければ、資金的にも会から支援してあげることです。

皆でその活動を見守ってあげられるような、そんな SV 会でありたいと願って、私は活動しております。

国内で障害者マラソン支援活動

グルムさんのチャリティコンサート（2015 年 12 月）

加藤隆（左から３人目）　トンガで首相へ表敬訪問（2012 年６月）

加藤　隆
タイ、電気通信
2004 年～2006 年

2010 年 ICT 会所属 SV の支援要請をトリガーにして始まったトンガ防災システムは、幾多の困難を乗り越え、2020 年の完成を目指す。ICT 会が支援したこの 10 年の活動は、まさに「千里の道も一歩から」である。

千里の道も一歩から･･･トンガ 防災ICTシステム構築の道のり

私は SV 会で、理事を 1 期（2011～2013 年度）勤め、主に会報、広報誌（2013 年版）を主に担当しました。その後、SV 会に籍を置きながら、ICT 海外ボランティア会（略 ICT 会）の運営に本格的に関わってきました。今回、ICT 会で私が関わってきたことを述べたいと思います。

■ICT 会所属のトンガ SV から支援要請■

ICT 会は、2008 年に SV を経験した NTT の OB・現役（主に JOCV 経験者）や NTT 以外の OB を軸として設立しました。私もその一人です。設立の主旨は「現役時代に蓄積した技術と経験を基に、それらを欲しがっている開発途上国へ伝授しよう」です。そのための活動として、講演会開催、会報発行の他に、「海外で活動中 SV 支援」があります。

2010 年、トンガに政府アドバイザーとして派遣中の ICT 会所属の SV から「ICT を活用した防災・減災のためのシステムを構築したいので、支援をお願いしたい」との要請がありました。トンガは人口 11 万人、170 の群島からなり、わが皇室と交流のある親日的な王国です。

■パイロットスキームプロジェクトに応募■

ICT 会は早速本件に取組むこととし、アジア大洋州電気通信共同体（本部・バンコク）の日本政府特別拠出金によるパイロットスキームプロジェクトに応募し採用されました。出来るだけ汎日本的になるよう JTEC と BHN とタイアップしました。

SV 帰国後、タイの大学で講演活動（講演後の集合写真）

■パイトットシステムから無償資金協力へ発展■

そして 2012 年にトンガとの共同研究が始まりました。これはパイロットシステムの検討でトンガ側の人材育成も考慮しました。これには私も参加しました。翌年はこのシステムの構築で JTEC が中心となり進められました。

このシステムの構想がトンガ側からも高く評価され、今般トンガ政府より日本政府に対し、本システムの無償資金協力要請がなされ、離島を含むトンガ全土をカバーする運びとなり現在進行中です。主要機器は日本製でエンジニアリングもわが国が実施し、2020 年 8 月には引き渡しの予定です。

これには多くの方々、関連機関のご理解とご尽力が結集したもので、まさに「千里の道も一歩から」と感慨深いものがあります。そしてこのシステムがトンガのみならず、大洋州諸国全域に普及することを願っております。

■冊子を編纂、タイの大学・日系企業で講演■

他の活動として、かつての任国タイを中心に、冊子「タイの電気通信へ日本グループの貢献」等の編纂、タイの工科大学や日系企業で ICT 技術動向等の講演、派遣 SV や JOCV の激励会を行っています。

SV 帰国後、冊子を編纂（2 冊）

難民支援

森野　謙
シリア、渉外促進
2006 年～2008 年

シリア内戦により発生したシリア難民を憂い、2012 年シリア支援団体「サダーカ」に参加。“Stop Killing in Syria” を訴え、そして、2018 年には隣国ヨルダンのシリア難民キャンプを訪れ、日本からの支援物資の提供など支援活動を展開した。活動は続く。

SEMA 医療センターで、治療中の男の子へ日本の絵本（アラビア語翻訳付き）を贈呈する森野会員（2018 年 8 月）

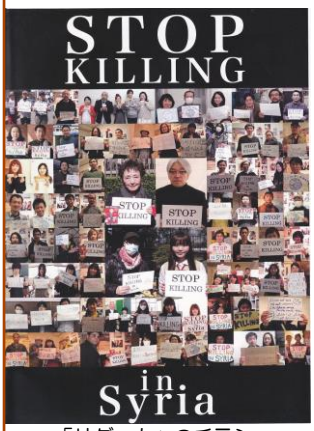
“Stop Killing in Syria” を訴え、シリア難民支援活動

「砂漠に囲まれ、物資が乏しく、一党独裁の危険な国、戒律が厳格で保守的なイスラム国家、地味で面白みのない国」との印象を抱いて、2006 年秋に JICA ボランティアとしてシリアの首都ダマスカスに降り立ちました。

それから 2 年後、「シリアは、ホスピタリティーに溢れ、明るく心から平和を愛する敬虔なムスリムの人々が多く、食料は豊富で、治安は良く、パルミラ遺跡をはじめ、国内至る所に古代ロマン溢れる遺跡があり、とても魅力的な国」との印象を持って帰国の途に着きました。

■「アラブの春」が波及、シリア内戦に発展■

帰国してわずか 2 年半後の 2011 年春に、北アフリカに端を発した「アラブの春」の民主化運動が長期独裁政権の続くシリアにも波及。政府による強硬策で武装闘争に変質し、内戦に突入して既に 9 年。この間に、2,250 万人のシリア人は、否が応でも政権側か反体制側かに分断されてしまい、既に 40 万人以上が死亡し、国民の半数以上が戦禍により家を追われ周辺国等へ難民（530 万人）として、また国内避難民（620 万人）として厳しい生活を強いられています。



「サダーカ」のチラシ

■シリア支援団体「サダーカ」に参加■

平和な生活を営んでいた多くのシリア人が、家族と離ればなれになり悲惨な難民生活を強いられている状況に直面し、彼らのために何かできないかとの気持ちから、2012 年春にシリア隊員 OB が設立したシリア支援団体「サダーカ」に参画し活動しています。アラビア語で友情を意味する「サダーカ」は、隣国ヨルダンに逃れ脆弱な生活をしているシリア難民へ衣料配布や生活資金提供などの支援を行うと共に、彼らの声を発信し、紛争終結のための行動を促す活動を行ってきました。2016 年の伊勢志摩サミットの際には、他 NGO と連携し、議長国である日本政府に「リーダーシップを発揮しシリア和平実現の道筋を付けることを求める」提言をしました。またアースデイやグローバルフェスタ等の国内イベントにブース出展し、紛争前のシリアの自然の美しさや平和な生活の写真を展示したり、市民講座でシリア難民の厳しい生活を紹介することで、多くの日本人にシリアに関心を持ってもらう活動を行っています。

■シリア難民支援で隣国ヨルダンに赴く■

2018 年 8 月にはヨルダンに赴き、サダーカがこれまで行ってきた東アンマン地区のシリア難民の家庭やシリアとの国境周辺の非公式難民キャンプを訪問して、日本から持ち込んだ子供服や現地で調達したコメや砂糖等の食料品を提供。また身体的・精神的障害を負った難民女性や子供のケアをする団体（SEMA）の医療センターを訪問し、運営資金の一部を支援する活動を行いました。

隣国ヨルダンに点在するシリア難民キャンプ（2018 年 8 月）

日本語を教えた児童とご両親、秀嶋会員（左側から３人目）2016年12月）

秀嶋　安城
中国、日本語教育
2004年～2012年

中国から帰国した秀嶋会員は、さいたま市教育委員会から小中学校の外国人児童生徒の日本語指導員を拝命した。日本語教育を行う中で、「いじめ問題」に遭遇し、児童に寄り添いながら「いじめ問題」の解決に取り組んだ。卒業式で児童の成長した姿を見た会員は日本語教育の素晴らしさを知った。

在日外国人児童に寄り添って、成長見守る

■中国で日本語教育。帰国後日本語指導員を拝命■

私は2012年1月中国より8年ぶりに帰国し、4月さいたま市教育委員会から小中学校の外国人児童生徒の日本語指導員を拝命し、小学校3校で日本語教育を担当しております。この中で児童教育の奥の深さを知りました。

中国では、日本の大学を志す若者に日本語を指導し、この時期は留学熱旺盛な時代で、全員が落ちこぼれることなく日本の大学へ進学していきました。

帰国後の小学校児童の日本語教育は初めてのケースであり、試行錯誤しながら指導に当たりました。外国人児童の場合は親の都合で来日し、いきなり異文化の環境に投げ込まれ、言葉の壁で友達もなく寂しさで校則を乱してしまう。クラスメイトは排他的になり、「いじめの問題」が発生するのです。

■いじめ問題に遭遇、タブーに挑戦■

ある日の7月、中国人児童5年生が「日本語教室」を終了する日、「今悩みはないか？」と尋ねてみた。あにはからんや「いじめの問題」を話しだした。「先生のいない所でやられる。休憩時間とか帰り際に叩かれる」。担任の先生も校長・教頭も不在で、やむなく教務主任に伝言した。これを聞いた教務主任は怒り「あなたはなんのつもりで、そこまでやるんですか。ただ日本語だけ教えていたらいいんだよ」と、なんと無礼千万な言い方です。

この教務主任にはあきれてしまった。関係者の間では「いじめの問題」はタブーになっているらしく、どうやら内々で処理する体質があったようです。教務主任に告げたのが失敗で情報を遮断されてしまったのです。

■校長に直談判、児童の晴れ姿に涙■

10月下旬、中国人児童の父親から再度、4か月経って「息子へのいじめが続いている」と連絡がありました。あれだけ連絡したものが全く伝わっていなかったのです。

私は校長に直談判しました。全貌を調べて状況を知った校長と教頭先生は、私と父親に謝罪しました。悪化する前に解決した例です。

後日、父親から「息子がいじめっ子たちと仲直りしたそうです」と電話を頂きました。卒業式の時、教頭先生がわざわざ私を招待してくださったのは、この児童の晴れ姿を見せたかったからでしょう。壇上で堂々と自分の抱負を語り、発音も日本の児童と全く変わらず、内容も素晴らしかった。なんだか感動で涙が流れた。

このように「日本語の指導」は達成感を味わうことができるすばらしい仕事なんだ、と思いました。

私たちのSV会も各方面から教育事業の呼びかけがあり、多くの会員が参加して社会貢献できることは、筆舌に尽くしがたい喜びです。

小学校の「日本語教室」　2017年1月

小学校の「日本語教室」　2012年7月

須山　勝彦
マレーシア、電子工学
2004 年～2006 年

JICA ボランティアでマレーシアから帰国後、武蔵野市国際交流協会と出合った。私は、世界の人々との触れ合いをめざして活動を続ける中で、「できることを出来る範囲で、そして、永く続ける」、これがボランティア活動の基本であると、MIA の活動を通じて学んだ。

むさしの国際交流まつりで多文化ステージの運営をやった仲間達
T シャツの DIB は Difference is beautiful というチーム名

MIAで学んだこと･･･できることをできる範囲で、そして長く続ける

■MIA（武蔵野市国際交流協会）との出会い■

2006 年 4 月マレーシアでの JICA シニアボランティアの活動を終え帰国した。マレーシア語をもう少し勉強したいと思いインターネットを検索していたら、インドネシア語会話交流教室の案内があり早速申し込んだ(マレーシア語とインドネシア語はほとんど同じ)。これが MIA との出会いです。MIA では武蔵野市民の他に、私を含む近隣の地域に住む多くのボランティアが活動に参加しています。1989 年の設立以来活動を続けている会員が何人も居り、無理せず楽しく活動しているように見え、ボランティアの先輩として手本にしたい方ばかりです。活動が小グループに分かれているので、誰でも自由に意見を言えるのが魅力です。

■「世界を知ろう～世界の人とふれあおう～」■

MIA では当初外国人への生活情報の提供など支援活動をやっていたが、日本での生活に慣れた外国人から自分たちも何かしたいという声が上がり、それなら母国の話をしてもらおうと、「世界を知ろう」という外国人をスピーカーとしたイベントが始まった。私が参加したときには、国の情報はテレビやインターネットで分かるので、その人個人を知りたいという議論があり、私が「世界の人とふれあおう」に変えたらと提案したら、それを副題として付けることになった。リーダーの三浦さんは新参者の私が何か言うと「あなた、おやりなさいよ」とすぐ背中を押してくれ、「また、細く長くやりましょう」といつも仲間を気遣っていた。

ミャンマーの留学生の講演会。旅行会社を創業し日本との架け橋に

イベントの準備や司会を担当して気がついたことは外国人のスピーカーが「大勢の日本人が私の話を聞いてくれる」ととても喜んでくれることです。相手の国に関心を持ち、話を聞くだけでも十分ボランティア活動になると感じた。また、継続的に交流を続けることも心がけている。私が最初に司会をしたベトナムのトゥアンさん夫妻から、昨年の年賀状でベトナム料理店を開店したという連絡があり、イベントグループの皆さんを誘って食べに行った。

■留学生ファミリープログラム■

海外で活動していた時、現地の生活や文化を知りたいと思ったが現地の人と交流する機会はあまり無かった。日本にいる留学生も日本人と交流する機会は意外と少ない。MIA では交流を希望する留学生と日本人家庭約 50 組のマッチングを半年毎にやっている。私自身もホストファミリーとして留学生をどこかへ連れて行ったり家へ呼んだりと月 1 回くらいのペースで交流を続けている。東京を案内すると私自身も知らない意外な発見がある。

七福神めぐり。左からカンボジア２名、私、中国、マレーシア

古参会員が「SV会の明日」を考える

齋藤邦夫会員（中央）「札幌 SV くらぶ」を設立

まとめ：齋尾恭子

座談会Ⅰを開催するために、①創立時の会員（現会員数 18 名）、②創立後まもなく入会した会員（現会員数 20 名）にアンケート調査を行った。その中で記述式アンケート「第 5 問：SV 会の明日の姿に向けての意見」に対して、多くの会員から回答があった。「古参会員たちの証言」として“４つに集約”して紹介する。

会活動の活発化を期待、その一方で親睦会的役割も

2019 年 5 月 22 日の「座談会 創立期」では、当時の暗中模索の中から個々の会員の熱意により、現在の事業体制が少しずつ形作られたことが浮き彫りにされた。その場で「明日への意見」も短時間議論されたが、紙面の都合で、「本冊子第 4 章座談会Ⅰ」には殆ど記載できなかった。アンケート回答者の意見を何らかの形で公表するため、上記の方々の意見を 4 つに集約して簡単に紹介する。

■SV 会活動について■

❶JICA との関連は、JICA への支援の原点を忘れない一方、JICA の枠にとらわれず、SV 会の意義を再認識し、制度の改変もあるので、青年協力隊や一般人を含むようにする。❷国内の外国人増加の現状に対応して、外国人支援事業の更なる推進、また、それらの在日外国人への日本語支援、学習支援などの必要性。❸SV 会の活動や会員の海外活動をもっとメデイアなどに発信し、活動を外部にアピールする必要性。❹藤谷会員の活動などへ少数の方から好意的支持。また、新事業を進める、中小企業の海外展開事業を推進、海外活動の経験者としての自覚を持ち社会貢献など。

■親睦会的役割として■

上記に対し、会員個人が出来ることを出来る範囲で実施し、会の活動を充実させるという主旨の意見があった。懇親の場としての会（居場所、交流の場）、ゆったりと帰国後の生活をお互いに楽しむ、SV 会のコンパクト化（対応案件の縮小、会社化防止）、高齢化対策など。

■組織文化、組織運営など■

❶誰でも提案できる雰囲気が大切と言う意見も多く、ある程度の報酬を配慮することも必要、若い人が企画推進できる環境づくり、新人に活動の機会を与える、日頃会務をしていないことで活動を抑えない、女性会員を増やすなど。そして、会員個々に対するもっときめ細かい配慮が会員数を増やすために必要と言う意見もあった。❷帰国報告会などでの机の配置が教室型よりラウンドテーブル型の方が今日的。もっとフランクに意見交換ができる配慮が欲しい（以前の水曜会のように）。

■出前講座について■

出前講座に関しては、パネルトークや社会人向け出前講座を増やす。外国人との授業を含め出前講座の更なる充実、生涯学習をテーマにして欲しい、公開講演会や外部講師の招聘（有料でも）、パソコン教室他知識勉強会の充実。語学力を活かした出前講座の更なる充実など。

・・・・・・・・

編集者として余り余計な意見をさしはさまずにまとめた。

上記の古参会員の方々は、会務の第一線での仕事は減っても、個々に 10 年を超える社会還元活動を続けている方が多い。ここでそのような 2 人の方の写真を載せた。

上田恵一会員（右）は三渓園のボランテイアガイドを 10 年以上継続。カンボジア人（左）を案内して古民家の前で。鯉のぼりの季節

河野外務大臣主催レセプション

宮井理事のテーブル

まとめ：宮井美津子

SV 会は 2018 年 7 月 3 日開催の河野外務大臣主催レセプション（JICA ボランティア懇談会）への参加要請を受け、会を代表して 5 名の役員が出席した。
これは SV 会の活動が評価されたことの表れであった。
参加者 5 名の感想をまとめ、ここに紹介する。

宮井美津子理事、伊藤恵利子会員（共に前列）

外務大臣主催レセプションに参加、SV会の活動が評価される

■SV 会に参加要請、会を代表して役員 5 名が出席■

2018 年 7 月 3 日 18 時～20 時に外務省飯倉公館（東京都港区）で河野太郎外務大臣主催の JICA ボランティアとの懇談会が初めて開催されました。2 年間の活動を終えて最近帰国したボランティアや派遣予定のボランティアなど 141 人で、JICA ボランテイア事業に参加した民間企業・団体関係者などや、JICA ボランティア事業を応援する国会議員、現職参加の帰国ボランテイアの所属先代表者も参加されていました。

SV 会にも参加要請があり、会を代表して、政金理事長、鈴木副理事長、後藤理事、宮井理事、井上監事の 5 名が出席しました。

■河野大臣の挨拶、北岡理事長のボランティア紹介■

河野外務大臣は冒頭の挨拶で「途上国を訪問する度に、その国の首相や大臣などから JICA ボランティアに対する高い評価と感謝が伝えられ、日本の顔として活動し日本とそれぞれの国との信頼関係の強化に大きな役割を果たしている。日本外交への大きな貢献である」とボランテイアたちの活動を讃えられました。

北岡伸一 JICA 理事長は「JICA ボランティアは途上国の最前線で、日本を代表する存在となっている」、さらに、「震災復興や地域おこしなど日本各地で経験を活かして活動している」と、JICA ボランティアを紹介されました。

■5 つのテーブルに分かれて懇談会■

懇談会はそれぞれのテーブル毎に交流をしました。政金理事長のテーブルはアフリカのボランティアに参加した人たちの集まりで、中に、自治体連携で横浜市水道局の人達が参加していたとのこと。偶然にも理事長の任国マラウイのブランタイア市の水道の漏水対策に行った横浜市水道局の人たちと交流が図れたとのことでした。

宮井理事のテーブルではブラジル日系社会の帰国隊員、大洋州の帰国隊員、これから出発する 2 名の協力隊員と横浜国立大学関係者が参加されていました。このグループでは SV で赴任時、お世話になった調整員との再会やこれから赴任する JOCV との交流ができました。

どのテーブルも活気にあふれる雰囲気でした。

■SV 会の活動が評価されたことを実感■

レセプションに参加して、河野大臣の挨拶や北岡理事長のボランティア紹介を聞き、また交流を通じて、我々の「シニアボランティア経験を生かす会」は JICA ボランティア事業の一翼を担っていることを実感しました。

鈴木副理事長、後藤俊吉理事のテーブル

井上節子監事のテーブル

政金理事長のテーブル

会員の意識調査

2014 年に出前講座に関して行ったアンケートに続き、2019 年 4 月に会活動の活発化を目指して、会員の意識調査（アンケート）を行った。アンケートの“実施・分析・提言”を担当する「アンケート検討委員会」を発足させ、種々工夫を凝らした結果、多くの会員がアンケートへ参加し、貴重な意見を得ることができた。

アンケート検討委員会の提言内容を審議する意見交換会（2019 年 11 月 27 日）の様子（主旨説明：松田、写真撮影：北脇）

アンケート回収率　88%達成！　活かそうアンケート結果

■アンケート実施のきっかけ■

2018 年 11 月 28 日に開催された「意見交換会」では、「定例会への参加が 30 名ほどと少なく、PM（プロジェクトマネージー）のなり手もなかなか決まらない」と、創立 15 周年を迎える SV 会の現状・問題が提起された。

その中で「その原因を探る上でも全会員にアンケートを実施してはどうか」との意見が出て、号外で委員を公募し、2 月 7 日に「アンケート検討委員会」が発足した。委員 5 名による計 6 回の検討委員会で、アンケート項目（図表－1）を検討し、アンケート文案を作成した。会員へのメールによるアンケート調査が 2019 年 4 月 18 日実施された。

当初アンケート回収率は、30%行けば良い方だろうとの大方の予想であったが、未回答者には電話での説得を期待して、アンケート回収率の目標は 70%に設定した。再度の催促、電話による聞き取りなどを経て、会員数 115 名（当時）のうち、101 名の会員より回答があり、最終回収率が 88%と言う驚異の値になった。

アンケート委員会では早速、集まった回答の集計・分析を行い、結果を図表にまとめた。

■アンケート項目（7 項目）■

1. 記入者の情報
2. SV活動に参加／不参加
3. 講師として参加・スタッフとして参加を希望
4. 入会動機、満足感
5. SV会の会報・ホームページへのアクセス
6. もしこういう活動があれば参加したい（自由記載）
7. 会をさらに発展させるためのアイデア（自由記載）

図表―1　アンケート項目

■アンケートの分析結果■

1．会員の生年構成（記入者の情報）

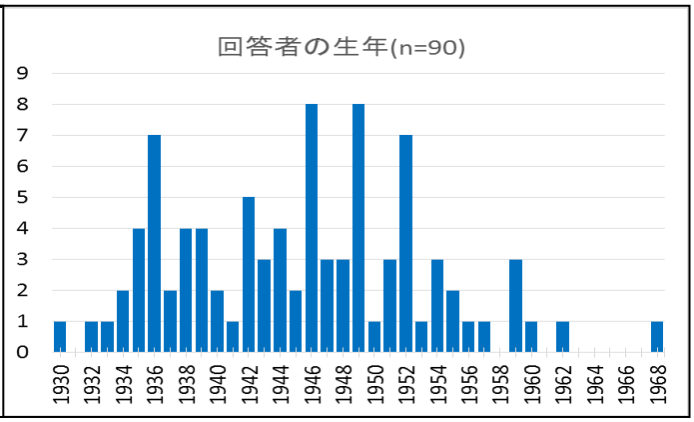
就業年齢の高齢化が一般的となって来ている世相があり、会員年齢も 70 歳超が多くなってきている（図表－2）。若年層の意見を会の活動に反映させることが重要であり、帰国 SV への入会勧誘を更に推進する必要がある。

2．SV 活動に参加／不参加

定例会への参加人数から活動が不活発と思っていたが、6 割以上の会員が「活動に参加している」という意識を持っていた。参加していない会員の理由には、まだ仕事をしている会員が 2 割ほどおり、参加可能な土日に会のイベントをすることも会員の参加率を上げることが出来る方策と考えた。また、遠隔地に住んでいる会員や地域の活動を行っていて、会の運営に参加できない会員もいた。

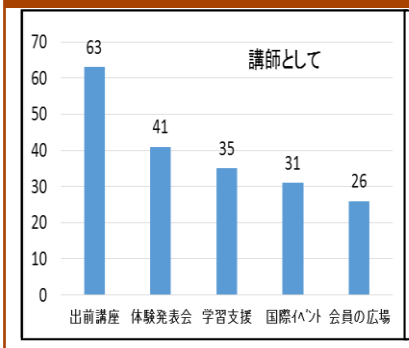
3．講師として参加・スタッフとして参加を希望

現在、講師やスタッフとして参加している会員の他、これから参加を希望する会員は次頁の図表の通りである。

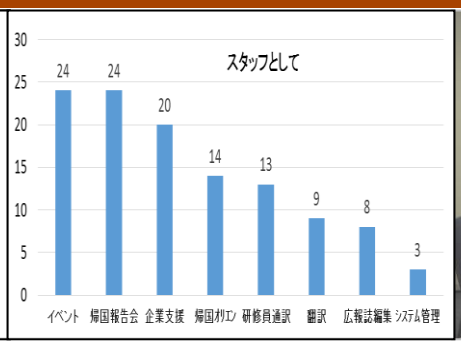


図表―2　会員の生年構成（生年を回答した会員 90 名）

第 4 章　会員の活躍（会員の意識調査）



図表―3　講師として参加希望



図表―4　スタッフとして参加希望

アンケート検討委員会
（左から：北脇、井上、松田、政金、角井の各会員）

これから活動してみたい会員には、PM にその会員の情報を渡して、個別に協力を要請する。（図表－3&4）

４．入会の動機、満足感

入会の動機の殆どは、帰国後の社会貢献である。入会して良かった理由では、それなりの出番があり、定例会等での交流がある、が挙げられていた。（図表－5&6）

５．SV 会の会報・ホームページへのアクセス

会報に関しては 9 割近くの会員が、記事を読んでおり、会報を期待している。HP に関しては、たまに見ている会員が半分近く。HP は外部の一般市民が当会の活動を知る手段となるので、それにふさわしい HP となることを期待したい。（図表－7&8）

６．こういう活動があれば参加したい／７．会を更に発展させるためのアイデア（自由記載）

（1）現状も実施しているが、更に推進すべきもの･･･①放課後／日本語学習支援の推進（9 名）、②会員の趣味、得意分野を講演する勉強会の開催（6 名）、③イベントをもっと多く行う、会員の親睦を図る（5 名）、④勉強会、内部講師による講演（4 名）、⑤出前講座の推進（4 名）、⑥海外活動（4 名）、⑦中小企業の海外支援（3 名）

（2）新たに活動として推進すべきもの･･･①新規事業の取り組み（5 名）、②SV 会活動をもっと積極的に社会に広報を実施（4 名）、③他団体との連携を図る（3 名）、④外部講師による講演の開催(2 名)

（3）その他の意見･･･①会活動に若手を入れること。新会員が会の活動に参加するよう、既存会員がフォローをする。②働いていて定例会に出てこられない会員のために、週末にイベント開催、会員のひろば開催を行うのはどうか、など多数の意見があった。

■アンケート検討委員会としての提言■

アンケート検討委員会は、自由記載の内容を検討し、以下のような施策を提言としてまとめ、この提言は意見交換会で審議された（前頁の写真参照）。今後、定例会での検討や PM 等により具体化される計画である。

（1）放課後学習支援･･･かつて行われていた横浜「みなみラウンジ」の有志メンバーが、その後、支援教室を立ち上げ運営しているので、これとの協働などを働きかけ、担当 PM を選定し検討する。

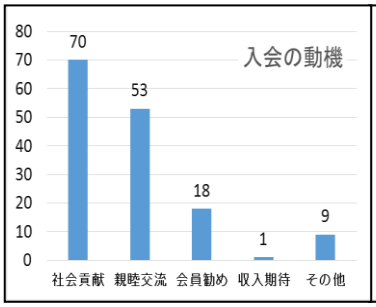
（2）土曜会　（仮称）」の新設･･･これまで行ってきた水曜会の後の「体験発表会」、木曜会の後の「会員のひろば」は従来通り行う一方、平日に参加できない会員を中心とした 1～2 ヵ月に一度程度の「発表会」を開催する。このために新たな PM を募集する。

（3）外部講師による講演･･･費用との兼ね合いもあるので、JICA 等の講演会のお知らせを会員に周知し、参加してもらう方策も検討していく。

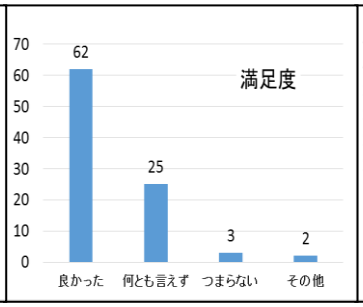
（4）パソコン、メールなどの研修会･･･会員からの要望に基づき、定例会の前後に簡単な研修会を開く。

（5）イベント･･･会員間の交流に役立つので、見学会などを増やす。その為に、現状の PM 一名を複数名とし、常時、会員よりの要望を吸い上げる努力をする。

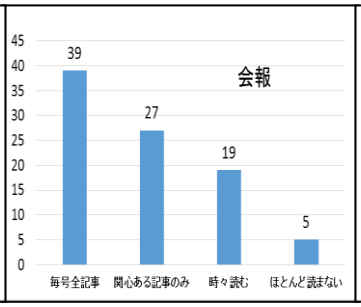
（6）新会員へのサポート･･･新会員に会の活動にスムーズに参加してもらう目的で、既存会員が TUTORING とも言えるサポートを提供する支援プログラムを作る。



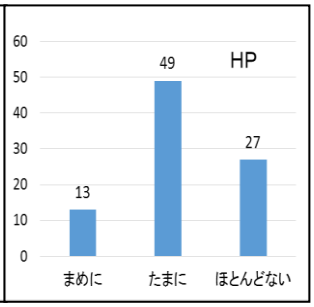
図表―5　入会の動機



図表―6　満足感



図表―7　会報へのアクセス



図表―8 ホームページへのアクセス

児童生徒の感想文

児童生徒・学校から、出前授業などで沢山の感想文を頂いた。ここで紹介するのはそのうちのごく一部であり、編集委員会の呼びかけに応じて事務局に届いた感想文である。SV 会では、会員・特別会員みんなで喜びを共有するため、会議などで感想文の贈呈式を行っている。

（感想文は、個人名・学校名を伏せ、ほぼ原文のまま）

絵手紙　墨田区立小学 3、4 年 ⇒ マギー青木 2017

授業後に学校から送られてくる「感想文」には、「え！こんなことを考えていたんだ」とか、「こんなに褒めてもらったのは初めて！」とか、心に沁みるものが多い。小学生の中には実にカラフルな個性的な絵手紙を書く児童もいる。学校側も”心のこもった”感想文集、振り返り、礼状を送ってくれる。この相互交流は実に嬉しい。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

心に響く児童生徒たちの言葉、会員の励み

■この 3 年間は、私にとって大切な宝■

先生には、いろんな話をして、悩みを相談したこともあります。部活や家族のことなどで、つらかった時期があり、先生は、はげましてくれたり、アドバイスをしてくれたり、本当にありがとうございました！この 3 年間のいろんなことは、私にとって大切な宝、良いけいけんとなりました。また、こんな私を 3 年間支えて、たすけて、すくってくれた先生、本当におつかれさまでした。ありがとうを言いたいけれど、言いきれません。また会いましょう！元気でいてください！おかげさまで私は成長しました！

（横浜・学習支援外国籍生徒 3 年生 ⇒ 鈴木新 ）

■ぼくも JICA に入って国のために■

きょうは斎藤さんの人生を語ってくださってありがとうございます。JICA に入ってからの経験とてもためになりました。国や人種に関わらず国のため、一生懸命に活動している斉藤さんには心を動かされました。ありがとうございました。今は募金やエコキャップを集めたりするのに積極的に活動しています。ぼくも JICA に入って国のために活動したいです。

（横浜市立中学校 1 年生 ⇒ 斎藤邦夫 2010）

■「豆は自然を守る」ことを知りました■

今回は豆について色々と教えてもらい、実際に体験することが出来ました。豆にはたくさんの種類があり重さが違う！豆の水の吸い方もそれぞれ違いました。

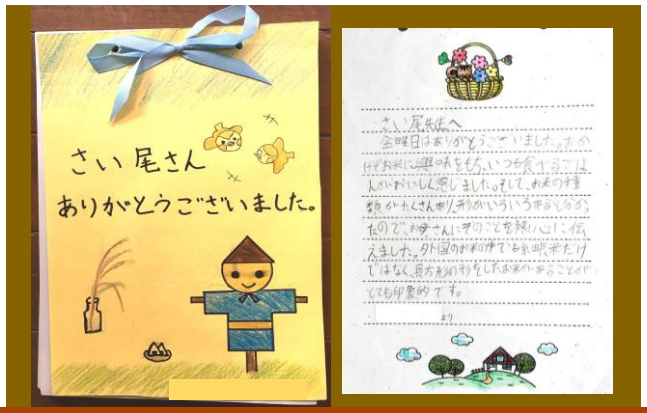
水に浸けると大きさが変ることを知り、おもしろいなと思いました。豆は人間が食べるだけではなく、自然を守ることを知りました。これからはもっと豆を大切にしたいです。（鎌倉・私立小学校 6 年生 ⇒ 齋尾恭子 2016）

■ぜひとも私たちの先生として来てほしい■

①ペルーの方の話を聞き、モノを生産し加工して売る、という国家発展のプロセスを「士農工商」に例えた話には深い感動を覚えた。これまで講演して頂いた若い方々とは異なり、仕事で長い時間を積み、退職後にその経験を活かす SV の方々の話は、これまでとは一味違った面白みがあると感じた。

②工藤様はペルーのお話を熱く語ってくださった北海道出身のおじいさんであった。とにかく、なんでもかんでもアツい。ぜひとも私達のセンセイとしてきてほしい。

（港区・私立高校 1、2 年生 ⇒ 工藤巌 2016）



第 4 章　会員の活躍（児童生徒の感想文）

■ぜひ私は海外に行ってみたい■

今回、ありがとうございました。まさかパラグアイ人も日本人も、モンゴルの血が流れてたとは思わなかったので、とてもおどろきました。国力をつけるためには「海外留学が必要だ」という考えにとても共感でき、今の日本は海外留学する人が減少しているときいたことがあったのですが、ぜひ私は海外に行ってみたいと思いました。

今回、自分の知らなかったことをよく知れてよかったです。（杉並区立中学校 3 年生 ⇒ 関憲三郎　2019）

■15 歳のお祝い、衝撃的■

普段あまり触れない国で、名前初めて聞いた場所だったので話を聞いていて驚くことがたくさんありました。日本でいう成人式のようなお祝いが 15 歳ということがとても衝撃でした。丁度私たちの歳なので印象に残りました。実際に見聞きした曲、工芸品もとても印象に残っています。私も大人になったら、現地のお祭りに行ってみたいです。そしてあいさつの「オラ」「アディオス」使っていこうと思います。

（杉並区立中学校 1 年生 ⇒ 川田拓司　2019）

■スペイン語をさらーっと･･･。かっこよかった■

今回はボリビア多民族国がどのような国なのか、どのような歴史があったのか、みっちり教えて下さりありがとうございました！最初に出た 7 つの野菜の共通点をみんなで考えてみたり、途中で、でてきた 3 つのソックリな動物がなんの動物なのかをクイズのようにだしてくれたりと、楽しかったです！スペイン語をさらっとしゃべる所が、かっこよかったです！

（江戸川区立中学校 1 年生 ⇒ 角井信行　2019）

■障害者の出来ることに、見る目が変わった■

ぼくは障害者ができないことより　できることの方が多いことを知りました。ぼくは目が見えない人を見ると「大丈夫かな」と思っていて、できないところを見てしまいました。でも話を聞いてできる方を見てみると見る目が変わりました。これから　できる人が何かをできない人を支え合って、おぎなっていこうと思いました。

（調布市立中学校 2 年生 ⇒ 松田信治）

■研修員は自分の国に誇りを持ち、かっこいい■

①今回の国際交流を通して外国の文化や言語について触れることができて外国への関心が一層深まった。このような交流が増えれば国と国との文化の違いによる紛争も減るのではないのかなと思った。僕の将来の夢は英語の仕事につくことなので、将来自分たちの文化を他国の人々に自分の口でプレゼンテーションをしたい。このような交流は良い経験になった。

②それぞれの研修員が自分の国に誇りをもっていて、かっこいいと思った。

（鎌倉市立中学校 3 年生 ⇒ 振り返り（先生）⇒SV 会 2019）

JICA 研修員への Thanks Letter 贈呈式

Nawshin（モーレシャス）2017 年 12 月

■楽しく話せて、ちょっぴり自信になった■

Dear Amirah･･･Thank you very much for this time. I gave a guide to the gymnasium. I was not good at English and I was worried that I could speak firmly. But you talked kindly. I enjoyed talking. I got a little confidence for myself and thought that I would try harder English. Your story was very easy to understand and fun. The dance was very nice. I also want to see you if I meet you!

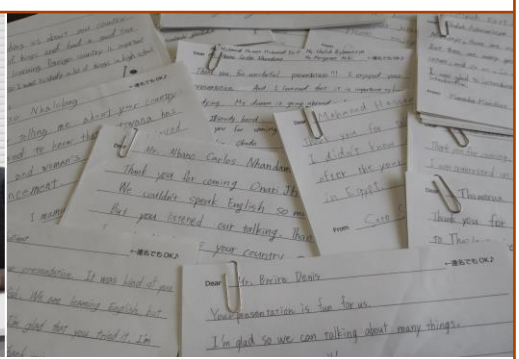
（鎌倉市立中学校 3 年生 ⇒ Amirah　2019）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

鎌倉市立中学校では毎年、JICA 研修員の英語による出前授業が行われ、全生徒（3 年生：120 人程）の英文の Thanks Letter が会に送られてくる。この Letter には、児童生徒の真摯な思いが書かれている。会では報告会を開催し、研修員を呼んで贈呈式を実施している。

絵手紙の贈呈式（マギー青木）2017 年 4 月

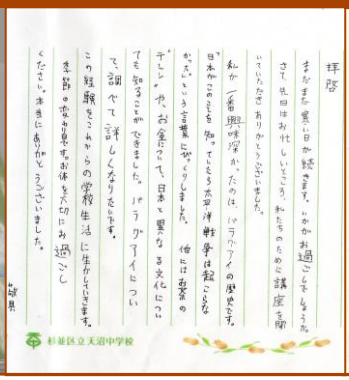
Thanks Letter 贈呈式（JICA 研修員）2017 年 6 月



中学 3 年生の書いた英文の Thanks Letter

第 4 章　会員の活躍（児童生徒の感想文）

東京都立特別支援学校（須山勝彦）


杉並区立中学校（関憲三郎）

杉並区立小学校（山内茂夫、松田信治）

■「学校で学べることの幸せ」■

Hanan さん　このあいだは、高井戸第二小学校でシリアの話をしていただき、ありがとうございます。今、私たちが学校で学ぶことができるのも幸せだと気づきました。だから、もっと感謝して学びたいです。シリアももっと楽しく明るい国になってほしいです。ありがとう。

（杉並区立小学校 6 年生 ⇒ Hanan　2019）

■「どんな人が来るのかな」と、とてもワクワク■

アイヌーラさんへ　（略）・・国際コンベンションをやる前に「どんな人が来るのかな」と、とてもワクワクしていました。アイヌーラさんの名前を日本語にすると「月の光」になると聞いて、素敵な名前だな、と思いました。・・（略）・・また今度どこかで会えたらうれしいです。大人になったら、キルギスに行ってみたいと思いました。

（杉並区立小学校 6 年生 ⇒ アイヌーラ 2018）

墨田区立小学校　感想文贈呈式
Thiomby Tine（セネガル）2017 年 8 月

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

父母・先生方からも礼状を頂きました。

■秀嶋先生、娘が大変お世話になりました■

秀嶋先生へ　昨年度 1 年間、娘が大変お世話になりました。先生のお蔭で日本語能力が進歩し、父である主人も喜んでおります。先日主人が参りまして、ぜひ先生によろしく伝えてくれ、とのことでございました。

夫婦共々、先生にはますますご清栄のこと、お祈り申し上げております。　2015 年 5 月 14 日　父母

（さいたま市日本語教育･父母 ⇒ 秀嶋安城 2015）

■子供たちは世界で活躍するシニアに刺激■

・・・（略）・・・先日は本校の六年生のためにご多用の中ご都合をつけてくださり、誠にありがとうございました。子どもたちは、ボランアィアに対する新しい視点を得て、仕事とは別の社会的な役割、世界中の人々の幸福に貢献していく大切さを感じることができました。ご高齢にもかかわらず世界で活躍される皆様のたくましい姿に、多くの刺激を得たようです。

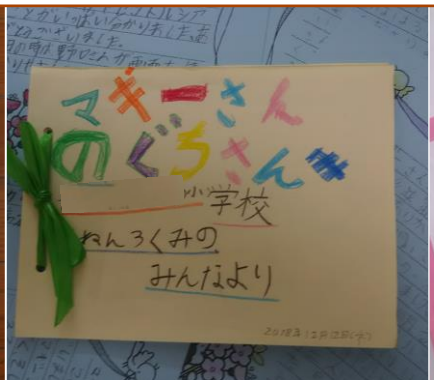
たいへん遅くなりましたが、子どもたちからの感謝の気持ちを込めて、お礼の手紙をお送りいたします。拙い文章ではございますが、ご一読いただければ幸いです。・・（略）・・平成 29 年 12 月

（杉並区立小学校・第六学年担任 ⇒ SV 会 2017）

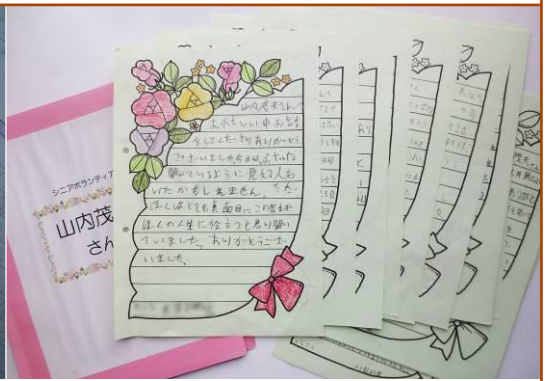
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

小中学校で出前授業を実施すると、後日、感想文が届きます。児童生徒が書いてくれ、何十枚にもなります。大変うれしいことです。何よりの報酬です。また、父母・先生方からも礼状が届き、SV 会の励みにもなります。

Hanan さんへの手紙（2019 年 6 月）



マギーさん・野口さんへの手紙


山内茂夫さんへの手紙（2017 年 12 月）

途上国への思い

SV 会には、JICA ボランティアを終了し、帰国後も、任国や途上国に思いを馳せ、個人的に繋がりを持ち、また支援している会員が大勢いる。こうした会員の思いやボランティア活動について、事務局に寄せられた“心温まる短文”を紹介する。

ネパール訪問（2017 年 3 月）の報告書から　井上節子

■松田信治　キルギス　2011 年 1 月～2013 年 1 月■

キルギスでの 2 年間で得たものは、多くの友人と、キルギスの雄大な自然、そこに暮らす人々の温かさであった。帰国後も毎年、現地に行き障害者支援を継続している。2019 年 9 月 26 日、ビシュケク市で 800 人程の観衆を集めて全盲歌手グルムさんのコンサートがあった。今回はキルギス政府から招待を受けての訪問であった。彼女の歌を聴きながら、今までの支援活動が認められたのだと、胸に迫るものがあった。「日本とキルギスの架け橋」が自分に課せられた使命であるとの思いを一層強くした。

2019 年　全盲歌手グルムさんの熱唱

2016 年　パラグアイ移住 80 周年記念祭

■広内俊夫　パラグアイ　2004 年 7 月～2007 年 8 月■

『今年こそ いつも夢見る南米の 愛しき国にいざ行かん さあ行こうパラグアイ』。これは会報（2013 年元旦）に載せた新年の抱負である。パラグアイに思いを馳せてきたその願いが,2016 年の移住 80 周年記念祭で遂に実現。10 年振りに妻と再訪した。かつての旧友と再会し、文献調査等をお手伝いし、現地の学校に出前授業に出かけた。また合間を縫って、アスンシオン旧市街や変貌を遂げる新市街を歩き回った。3 ヶ月のささやかな支援・交流の旅ではあったが、私の心の中に大きな記憶として刻まれた。

■永見正敏　ドミニカ共和国　2003 年 4 月～2006 年 4 月■

カリブ海の観光王国ドミニカ共和国へ日本人観光客促進に携わった。同国観光省をベースに日本のマスコミ・旅行業の現地取材促進、ドミ共の旅行業・ホテルへの日本人受け入れ策セミナーなどを行った。最もインパクトが強い活動舞台はニューヨーク、東京での商談会・旅行博であった。帰国後もドミ共観光省日本事務所で 3 年半日本人観光客の送り出し活動を行い。現在も同国大使館と連携し活動を続けている。ターコイズブルーの海,ココヤシに白砂に思いを馳せながら同国の観光発展を祈念している。

2008 年世界旅行博(東京) ドミ共日本事務所

2016 年 RUA でテレビ局の取材を受ける

■齋尾恭子　カンボジア　2001 年 10 月～2004 年 4 月■

カンボジアの王立農業大学（RUA）での 2 年半は、設備のない中で熱い向学心を持つ教官や学生、社会人学生に心を奪われました。そのため、帰国後も集中講義などで RUA に行き交流を深めました。派遣中「草の根基金」で設置した穀物科学研究室が荒廃・廃墟化するのを憂い、また、品質の安定した米の市場流通や輸出促進を願って、2015 年に教官数名に日本の米研究、産業視察研修を実施し、農業産業部の教官と協力してカンボジア米の品質と安全性の研究を進め、ささやかな成果を上げています。

第4章　会員の活躍（途上国への思い）

■小山季広　トルコ　2015年6月～2017年6月■

トルコと日本の友好に尽力された三笠宮殿下を顕彰して、海外の日本庭園として最大規模の日本庭園が25年前に開設された。トルコの乾燥気候の下、湿潤温暖の日本の風土の下で確立された日本庭園を持続させるためには、現場のトルコ人と一緒に現地風土に順応した管理を行うことが必要となる。残された課題に取り組むため、昨年は2ヶ月間ほど、今年も9月末から11月の予定で現地に行き、彼らと一緒に汗を流す予定である。

2018年　日本庭園隣接後背地の植樹

南米日系人と収穫を楽しむ（海老名市）

■橋本敬次　ドミニカ共和国　2007年6月～2009年10月■

JICA在任中参加したプロジェクトの中でドミニカ共和国「環境保全型農業開発計画」は最後の長期派遣となった思い出深い国である。このプロジェクトでは、バナナ・キャッサバ・さつまいも・東洋野菜などの生産性向上を手掛けた。中でも同国の農民や技術者と取り組んだキャッサバは、日本へ帰国後も栽培に挑戦した思い出深い作物である。わが国で栽培を手掛けて6年目のこの作物は、途上国から日本に来ている人々にとっては懐かしい作物であり、多くの人々が収穫を楽しみに畑にやって来る。

■森　妙子　ボリビア　2008年6月～2010年6月■

ボリビアの日系社会で日本語を教え、帰国後ボリビアに思いを馳せながら、外国人、留学生に日本語を教えてきた。現在、縁あって技能実習生を養成するカンボジア現地学校で教えている。彼らはここで3～4か月学んで日本へ。日本語は勿論、時間を守ること、ルールを守ること、5Sなど、日本の社会で当たり前になっていることを徹底して指導して送り出さねばならない。深夜プノンペン空港で実習生を送り出す度に、日本で温かく受け入れられることをいつも願っている。

2019年　実習生に贈る言葉を述べる

2018アンコールカップクライミング競技会

■伊藤明子　カンボジア　2006年3月～2008年3月■

2006年、赴任地シェムリアプを訪れたクライマーの夫は「山ないの？」と不満気だったが、やがて郊外に岩場や登攀仲間を見つけ、カンボジアの子供たちへの講習を始めた。2010年には寄付を募って人工壁を市内に建設した。2014年にこの仲間は日本のNPO法人となったが、2015年に夫は死去し、事務局を私が引き継いだ。私たちNPO法人は次の2つの目標を掲げている。1.クライミングを通じてカンボジア青少年の健全な成長をはかる。2.Angkor Climbers Net Cambodiaの活動を支援する。

■鈴木　新　ベトナム　2008年1月～2010年1月■

ベトナムでの2年間は、私の人生の中でも重要な歴史であった。科学技術省の傘下のベトナム生産性本部（VPC）へ赴任し、工場管理、改善活動で多くの企業を支援した。この間に得た多くの人脈は貴重で、今でも大切な絆になっている。製薬会社では新しい生産ラインを構築し、20%以上の生産性を高めることができた。帰国後もこの工場の改善活動は続き、工場長の要請と自らの愛着で何度もベトナムを訪問した。訪問する度に生産活動の改善支援を行っており、今は次回の訪問計画を検討中である。

2010年　社長（右）と植樹祭へ参加

2008年　自宅で日本語指導
（帰国後、教え子(右端)と日本で出前授業）

■五味　茂　ホンジュラス　2006年10月～2008年10月■

退職前に日本語教師の資格を取得し、日系SVを目指していたが、車椅子製作で定年退職後にホンジュラスSVで赴任した。JV日本語教師から夜間部の補助教員と漢字指導を依頼され、任期終了後も通信日本語指導も行い、生徒の来日研修でお世話した。再度、介護士の資格を取り施設で働き、日系介護SVを志したが、69歳でボリビアの医療機器SVで赴任して介護関係の事も学んだ。今年度から介護実習生の国内外でお世話をする事になり、日本語と介護の資格を活かして初心の志で人生を歩んでいる。

第4章　会員の活躍（途上国への思い）

■政金　驍　マラウイ　2010年3月～2012年3月■

マラウイ帰国後、技能ボランティア海外派遣協会に登録をして赴任をしたフィリピンルソン島は 74 年前の戦争の傷跡が随所に残る所でした。日本兵 50 万人の犠牲の 2 倍を上回る 100 万人を超える犠牲者を出した所です。アメリカ軍の上陸を迎え撃ったリンガエン湾から山下奉之大将降伏の地（キアンガン）。各地に残る慰霊祭に私たちボランティアも参加しました。リンガエン湾→サンファビアン→バギオ→キアンガンそして第 6 代フィリピン大統領キリノと続く平和への得難い体験をしました。

2018 年　バギオ慰霊祭

2018 年　ガーナ人留学生と共に出前授業

■北脇和夫　ガーナ　2011年9月～2013年12月■

「もう援助は必要ありません。日本企業の皆さん、ぜひ投資して下さい」－最近書店で見かけて買った本『アフリカを見る アフリカから見る』(白戸圭一著、ちくま新書)の表紙の言葉。これは、私がガーナ赴任中に同僚から聞かされた言葉と全く同じである。先日ガーナ人留学生と共に出前授業をした（写真)。彼女の専攻はビジネスマネージメント。もちろん、国で必要とされるから学んでいる。ガーナに限らずアフリカのいくつもの国が新しいステージに入りつつあるのを感じる。

■井沢幸次　ネパール　2011年3月～2013年3月■

ネパールでは技術専門学校で IT 講師をしていたことから、帰国後も IT 活用でネパールの発展に貢献できないかと考えてきた。そこで同時期に活動した JOCV/SV 仲間と相談し、農業用 IoT システムの試作に取り組むことにした。これは、ネパールの農家の圃場や農作業情報を Web で共有化することで、農業関連 JOCV/SV が帰国後も継続して支援できるようにするものである。情報は市場関係者も共有できるので販売促進にもつながる。すべて手作りのため進捗は遅いが来年には現地テストをしたい。

2018 年　センサーユニットの外観

2018 年 ヨルダンのシリア難民キャンプで

■森野　謙　シリア　2006年10月～2008年10月■

SV 活動を終えてわずか 2 年半後の 2011 年春にシリア紛争が勃発。内戦状態になって 10 年になろうとしています。ホスピタリティに溢れ明るく平和な生活を送っていたシリア人の半数が、戦禍で家を追われ厳しい難民生活を強いられています。彼らのために何かできないかと、2012 年よりシリア支援団体「サダーカ」の活動に参画し、隣国ヨルダンに逃れたシリア難民への衣料配布や生活資金提供などの支援を行うと共に、彼らの声を発信し、紛争終結のための行動を促す活動を行っています。

■野口烝治　セントルシア　2003年4月～2005年3月■

ご存知セントルシア出身のマッギーさんとペアで、セントルシアの出前授業が続けられるのは幸せです。JICA ボランティアの同僚 A さんが、現地でマッギーさんと結婚され、子供さんが学齢に達した 2013 年頃、一家で A さんの実家のある東京都豊島区に引っ越してこられ、以来マッギーさんの協力でペア授業を行っています。この度、彼女自身の努力で、2020 年の東京オリパラで豊島区が「セントルシア派遣団の公式ホストタウン」に認定されました。我々は彼女を通してセントルシアを応援します。

2018 年　杉並第九小学校のペア出前授業

2019 年　中東オマーンで Kaizen 指導

■桑田和幸　シリア　2009年1月～2011年1月■

2019 年 8 月末に 1 週間程、中東オマーンのサラーラにて、地元の依頼を受けて、日本式 Kaizen について指導を行う機会を得た。講習を受けたのは企業や大学の関係者であったが、真剣なまなざしに圧倒された。中東やアフリカでは従来のインフラ優先の途上国支援から真の人材育成の大切さに気付き、官民を挙げて Kaizen マインドの普及を計っているように見えた。SV 経験者にとり、こうした国境を超える Kaizen 活動は比較的容易に取り組めるので、今後の広範囲な活動に拡がることを期待する。

三渓園散策（2017 年 12 月）

親睦会・会員交流

SV 会では、ボランティア活動の合間を縫って、会員の交流を図り、親睦を深めようと、様々な行事が行われている。シニア世代の会員は「人生 100 年時代」を先取りするかのように、自己実現や社会貢献を通して、人生の生き甲斐や価値を見出している。

人生100年時代。“第二の青春”賛歌

■人生 100 年時代■

2017 年 9 月、国による「人生 100 年時代構想会議」が開催され、この頃から「人生 100 年時代」という言葉が急速に広まった。日本は世界のどの国よりも急速に高齢化社会を迎えている。

高齢化社会はなにかとマイナスイメージが先行しがちであるが、「人生 100 年時代」を先取りするかのように、SV 会の会員たちはエネルギッシュな活動を展開している。彼らは、活動を離れても、親睦会、学習会、談話会「会員のひろば」などで、自分自身を切磋琢磨し、いわゆる第二の人生を歩み、第二の青春を謳歌している人たちだ。

■親睦会：社会を見聞し、交流を深める■

最初の親睦会は 2006 年のゴルフコンペであった。会員の社会見聞を広げようと「見学会」が 2008 年 9 月から始まった。その後 2016 年から「お花見会」を企画した。また、任地に赴いた会員が中心となって、「視察旅行」も企画された。また、2019 年、異色の親睦行事「シニアの蕎麦打ち体験講座」を開催した。

【見学会】･･･海洋研究開発機構（08 年 9 月）、キリンビール工場（09 年 8 月）、シルク博物館（11 年 2 月）、JICA 二本松青年海外協力隊訓練所（13 年 7 月）、宇宙航空研究開発機構 JAXA（14 年 1 月）、戦艦三笠（14 年 12 月）、江戸東京博物館（16 年 8 月）、海外移住資料館（09 年 11 月、17 年 3 月）、三菱みなとみらい技術館（19 年 4 月）。

宇宙航空研究開発機構（2014 年 1 月）

JAXA 見学では、世界に誇れる小惑星探査機「はやぶさ」の宇宙開発技術力とプロジェクト管理力を実感し、我々会員世代の遺産が花開いたのだと自分の経験と重ね合わせて誇らしさと感じ取った会員も多かった。

【お花見会等】･･･千鳥ヶ淵公園（16 年 3 月）、生田緑地公園（17 年 4 月）、三渓園（17 年 12 月）、浜離宮恩賜庭園・浅草（18 年 3 月）、清澄庭園（19 年 3 月）。お花見会は、その地の歴史を訪ねる「小さな旅」でもある。歴史に詳しい会員の案内で、時空を超えてその時代に思いを馳せた。

【視察旅行】･･･ミャンマー視察旅行（14 年 1 月）、キルギス視察旅行（17 年 7 月）。両国では JICA 現地事務所や SV 時代の施設を訪問し旧交を深めた。

【その他】･･･蕎麦打ち体験講座（19 年 1 月＆4 月）。蕎麦打ち歴 20 年の会員師匠が期待に応えて 2 回開催した。

■学習会：80 歳になっても燃える向学心■

小中高の出前講座に出向く会員が多く、児童生徒に関心を持ってもらうプレゼン資料作成術など「出前講座関係」の学習会が多い。出前講座セミナー、チラシの作り方などが実施

戦艦三笠（2014 年 12 月）

された。また、苦手な会員向けにやさしく学べる「パソコン教室」も盛んだ。技術に詳しい会員や先輩会員たちが、お互いに会員同士が、教え合う。また、外部講師にも協力してもらう。60、70、80 歳になっても向学心は衰えを見せない逞しい会員がそこにいる。

【パソコン教室】･･･パワーポイント講座（07 年 02 月）、活かす会パソコン教室（09 年 07 月）、動画編集（16 年 07 月）、PC 使い方勉強会（18 年 08 月）、やさしい資料館入門（18 年 10 月）、パソコン入門講座（19 年 04 月）

【出前講座】･･･国際理解教育実践事例（2005 年 09 月）、出前講座レベルアップセミナー（14 年 10 月）、出前講座で役立つ！授業作りのポイント講座（16 年 06 月）、イベントとチラシのつくり方（18 年 12 月）

【その他】･･･NPO 勉強会（07 年 11 月）、SDGs 勉強会（18 年 07 月）、JICA 事業制度改革（18 年 09 月）

■談話会「会員のひろば」：自分自身を語る■

創立期の 2005 年 6 月、「大いに語ろう SV 経験」と題し、談話会「会員のひろば」が企画された。同じ会員同士でありながら、あまりお互いの経歴や経験が分からないとの反省から、“自分自身”について語ってもらおうというもので、当時の事務局が月 2 回程度の開催を計画した。第 1 回の登壇者は化学薬品会社の役員から日本語教師に転進した会員。動機やボランティア活動の喜びを、会員を前にして大いに語った。

2005 年は登壇者が後を絶たず大盛況であった。その後登壇者が減ったが、2013 年 7 月まで 45 回開催された。そして一時休止状態となったが、2015 年 6 月に新たな装いで再開し、2019 年 12 月現在まで 48 回実施されている。

初期の頃は会員の年齢も若く、再び海外に赴く者もおり、途上国での活動が多く語られた。最近は会員も高齢化し、自分の人生の「来し方行く末」についてしんみり語る会員も少なくなく、SV 会 15 年の歳月を感じさせる。

キルギス視察旅行（2017 年 7 月）

「会員のひろば」は、会員同士の交流が目的であるので、講師は会員が主体であるが、外部講師も招聘された。北野一人 JICA 協力隊事務局次長（11 年 9 月）、ピュ・イ・テェイン氏（ミャンマー）（13 年 07 月）、本田龍介 JICA 相談員（16 年 6 月）、越川和彦 JICA 副理事長（17 年 1 月）。越川氏は JICA の新政策“中小企業海外展開支援”について講演された。

■語ろう会：一人ひとりが人生の相談者で回答者■

2018 年 12 月 26 日、JICA 横浜で、「平成最後の年末、大いに語ろう！」と題し、日頃語れないことを率直に話し合おうと、SV 会で初めての座談会形式の「語ろう会」が開催された。「語ろう会」のチラシで、「他の人の語りを聞き、自身の来し方・行く末に想いを巡らせてみませんか。一人ひとりが、人生の相談者であり、回答者です」と呼びかけると、15 名の会員が参加した。

司会者が時間配分に苦慮するほど、参加者は時間制限など気にせずオーバーしながら、熱心に語っていた。語りは 13 時から 17 時まで休みなく 4 時間ビッシリ続いた。まさに「若きシニアたちの第二の青春賛歌」であった。

当日の様子を再現すると、①思い出話･･･若かりし頃の話、海外に目を向けるきっかけになった話、中高校時代に熱心に学んだ思い出、海外で一緒に仕事をした友人の思い出、任国への想い。②現在に生きる喜び･･･知力体力を英文読書につぎ込んでいる。SV 会の例会に出て皆の話を聞くことが楽しい。よき友に会って人生を楽しく生きよう。③人生の思索･･･IT 化や AI 化が進み、人間は今後何をやったらよいのかと思索の日々･･･等々。

「どうか皆さん、いつまでも元気で現役でいてください」と司会者のこの言葉で締めくくり終了した。この「語ろう会」に込められた熱い思いは、2019 年 5 月、8 月の「15 周年記念座談会」に繋がった。

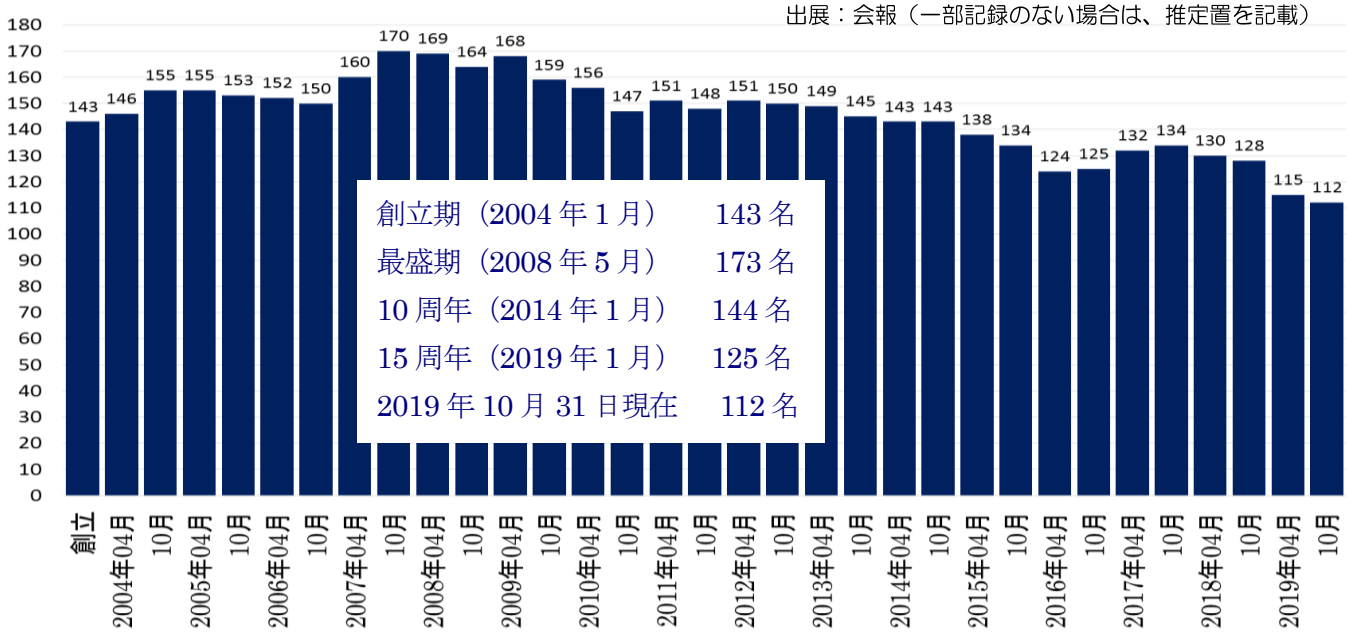
蕎麦打ち体験学習（2019 年 1 月）

浜離宮恩賜庭園・浅草（2018 年 3 月）

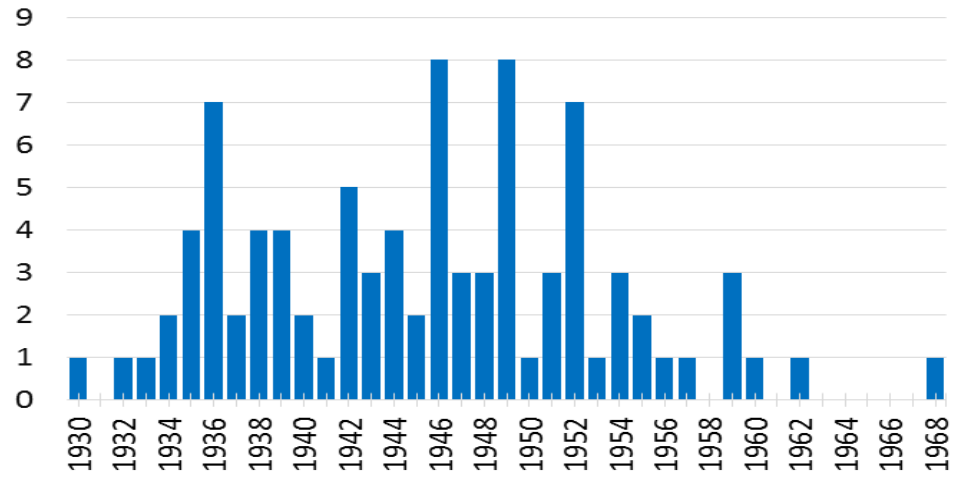
語ろう会（2018 年 12 月）

1．会員の推移

出展：会報（一部記録のない場合は、推定置を記載）

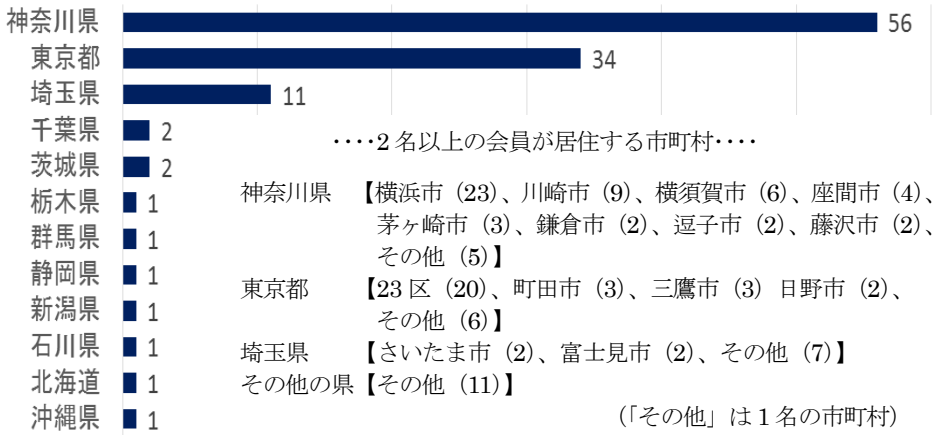


2．会員の年齢構成（会員の生まれた年）



アンケート調査（2019年4月）で生年を記載した会員は90名

3．会員の居住地域



‥‥2名以上の会員が居住する市町村‥‥

神奈川県　【横浜市（23）、川崎市（9）、横須賀市（6）、座間市（4）、茅ヶ崎市（3）、鎌倉市（2）、逗子市（2）、藤沢市（2）、その他（5）】

東京都　【23区（20）、町田市（3）、三鷹市（3）日野市（2）、その他（6）】

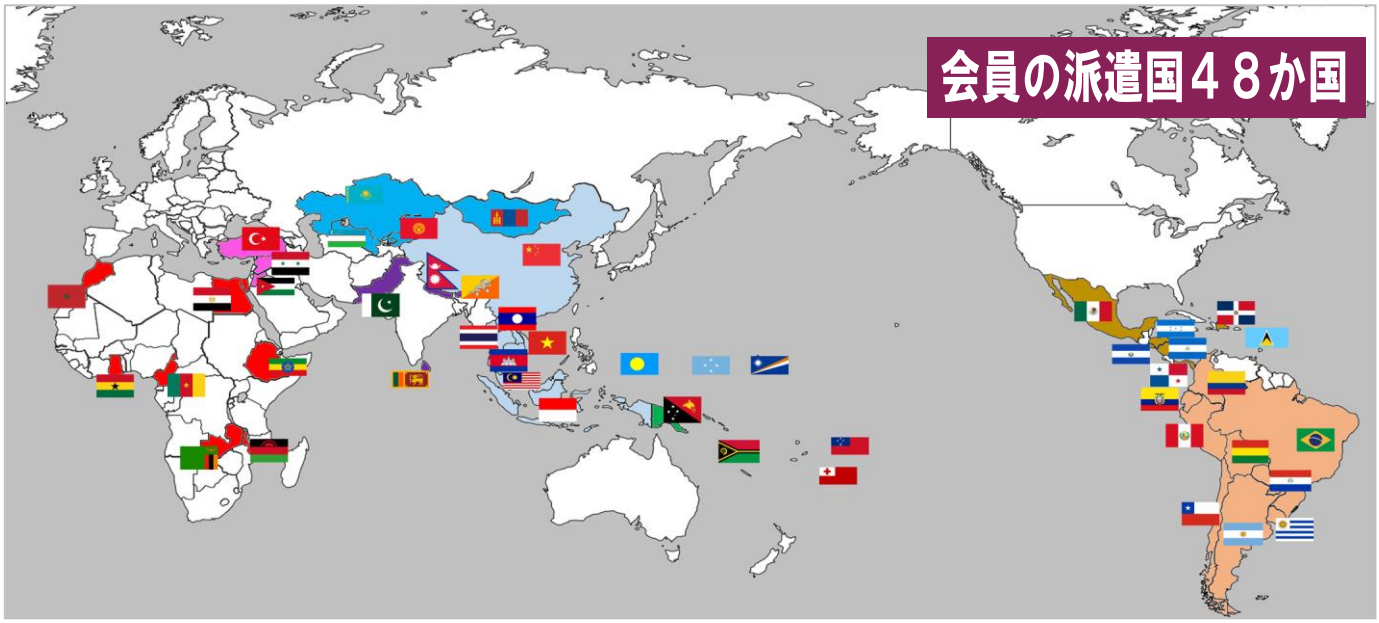
埼玉県　【さいたま市（2）、富士見市（2）、その他（7）】

その他の県【その他（11）】

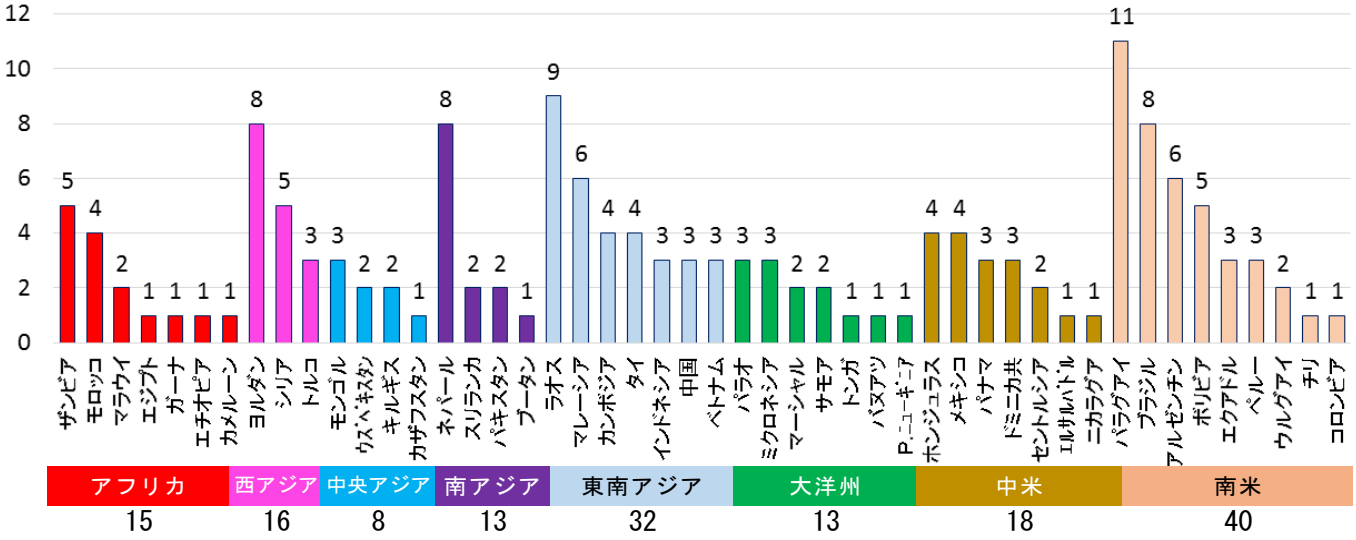
（「その他」は1名の市町村）

会員名簿（2019年10月31日）に準拠

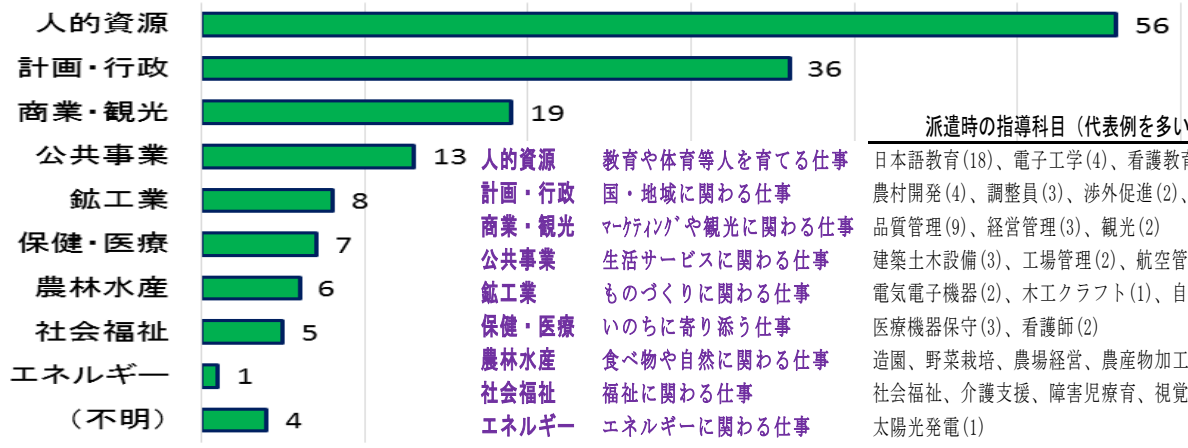
4．会員の派遣国、派遣回数



【会員112名の派遣国：48か国。総派遣回数：155回（一人当たり平均1.4回）】



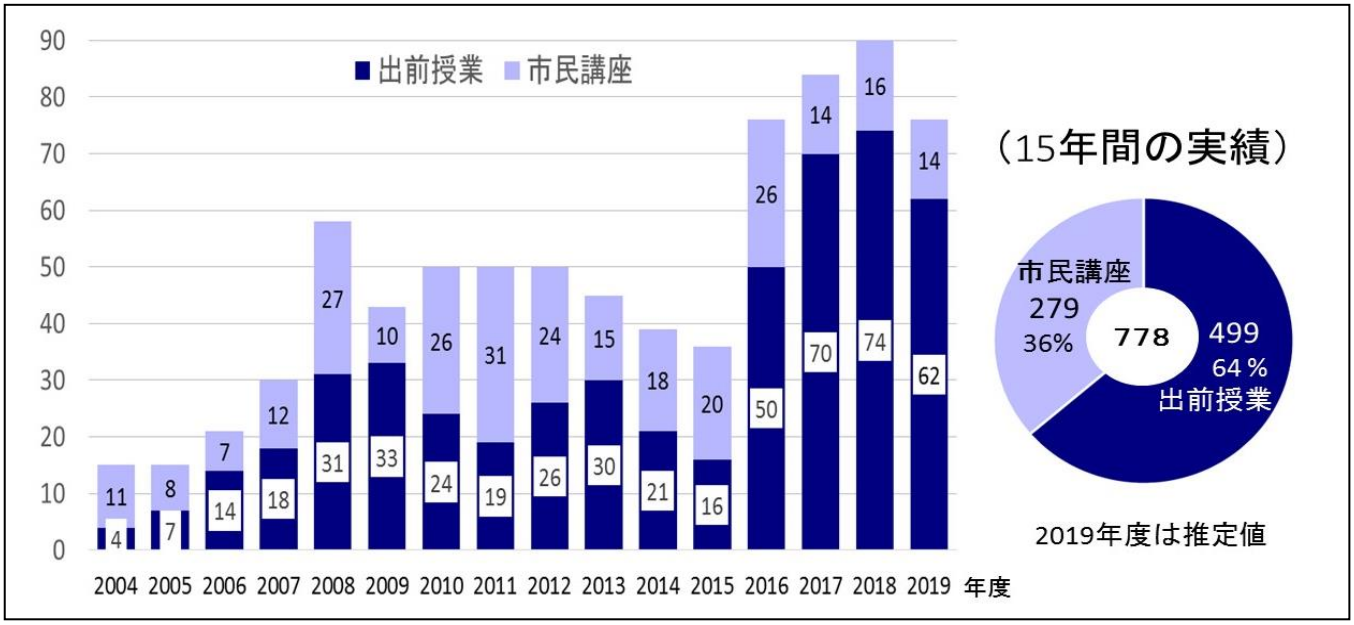
5．会員の専門分野（派遣時の指導科目）



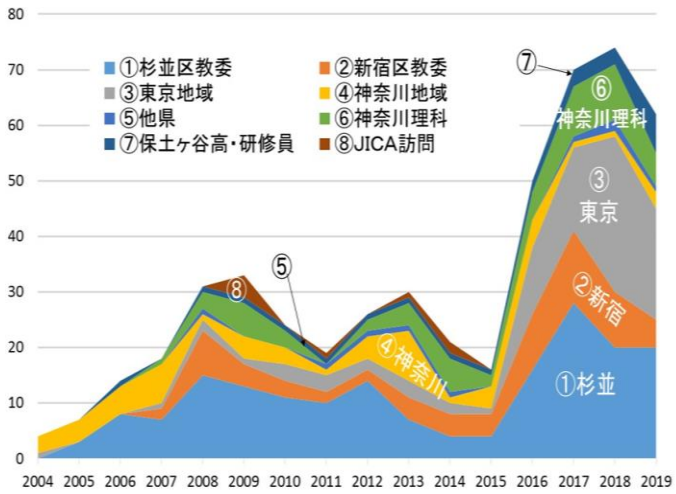
		派遣時の指導科目（代表例を多い順に列挙）
人的資源	教育や体育等人を育てる仕事	日本語教育(18)、電子工学(4)、看護教育(4)、学芸員(3)
計画・行政	国・地域に関わる仕事	農村開発(4)、調整員(3)、渉外促進(2)、環境行政(2)
商業・観光	ﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞや観光に関わる仕事	品質管理(9)、経営管理(3)、観光(2)
公共事業	生活サービスに関わる仕事	建築土木設備(3)、工場管理(2)、航空管制機器管理(2)
鉱工業	ものづくりに関わる仕事	電気電子機器(2)、木工クラフト(1)、自動車整備(1)
保健・医療	いのちに寄り添う仕事	医療機器保守(3)、看護師(2)
農林水産	食べ物や自然に関わる仕事	造園、野菜栽培、農場経営、農産物加工（各1）
社会福祉	福祉に関わる仕事	社会福祉、介護支援、障害児療育、視覚障害者支援（各1）
エネルギー	エネルギーに関わる仕事	太陽光発電(1)

【会員112名の総派遣数155回についてその専門分野を分類したものである。専門分野は最新のJICA海外協力隊の活動分野に基づく】

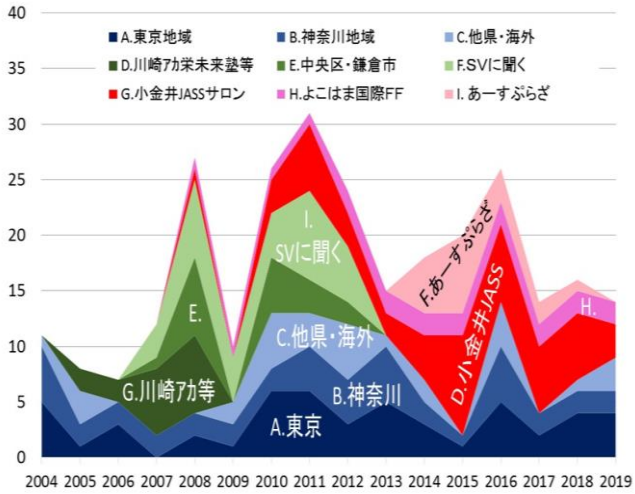
6．出前講座の実績（依頼件数の推移）



出前授業の実績（分野別）



市民講座の実績（分野別）



7．役員一覧（任期2年間、5月の総会で改選）

年度	2005	2007	2009	2011	2013	2015	2017	2019
理事長	掛川 周男	鈴木 庄一	角井 信行	舟田 正夫	須山 勝彦	須山 勝彦	政金 驍	鈴木 新
副理事長	藤谷 芳孝	角井 信行	野口 烝治	井上 節子	堀川 正照	桑田 和幸	鈴木 新	森岡 潔
副理事長	鈴木 庄一	森 昌植	井上 節子	木場 貞成	齋尾 恭子	木場 貞成	松田 信治	北脇 和夫
理事	小川 弘子	井上 節子	稲葉 大策	浅川 克彦	永渕 寛幸	石村 眞平	北脇 和夫	井坂 敏之
理事	角井 信行	木場 貞成	臼井 道雄	加藤 隆	桑田 和幸	鈴木 新	後藤 俊吉	後藤 俊吉
理事	鈴木 芳雄	須山 勝彦	奥谷 規子	齋尾 恭子	鈴木 秀秋	政金 驍	中澤 英利子	鈴木 秀秋
理事	山田 史子	田邉 光宏	小船井 達夫	須山 勝彦	政金 驍	松田 信治	橋本 敬次	中澤 英利子
理事	森 昌植	西田 圭介	木場 貞成	永見 正敏	後藤 俊吉	森野 謙	宮井 美津子	松田 信治
理事	高谷 裕博	野口 烝治	西田 圭介	堀川 正照	佐名木 規夫	山内 茂夫	森岡 潔	宮井 美津子
理事	細井 衛		舟田 正夫	森 昌植				
監事	今岡 昌恒	今岡 昌恒	鈴木 芳雄	鈴木 庄一	角井 信行	角井 信行	井上 節子	井上 節子
監事		仲井 儀英	藤谷 芳孝	鈴木 芳雄	野口 烝治	野口 烝治	永見 正敏	永見 正敏
顧問	藤田 公郎	藤田 公郎	藤田 公郎	藤田 公郎	藤田 公郎			

【2004年発足時】 会長：掛川 周男、副会長：鈴木庄一・藤谷芳孝・荏原直行、理事：石川暢子・今岡昌恒・大谷直子・小川弘子・加賀屋一・角井信行・桂宏子・久保田昌司・高谷裕博・竹野恒之・田村卓也・都筑まさ子・富田健一・錬石英太郎・堀内政雄・森昌植、監事：斉藤宏・高木敬三、顧問：藤田公郎

設立	設立総会	２００４年１月３１日
	法人格取得	２００５年１０月２１日　　東京都でNPO法人認証・登記
定款	目的 （3条）	この法人は、広く一般市民を対象に、海外ボランティアを目指す人や帰国ボランティアへの支援、地方自治体や各種団体が行う国際協力活動での講演会や相談会、小中高校・大学での出前授業、海外からの留学生、研修生、児童生徒への支援などの活動を通じて、国際協力、国際理解の増進に寄与することを目的とする。
	活動の種類 （4条）	①国際協力の活動　⑤観光の振興を図る活動 ②社会教育の推進を図る活動　⑥農山漁村又は中山間地域の振興を図る活動 ③子どもの健全育成を図る活動　⑦環境の保全を図る活動 ④まちづくりの推進を図る活動　⑧経済活動の活性化を図る活動
会員	一般会員	１１２名（設立当初：143名、入会者総数：396名）･･･途上国48か国での活動経験者等
	特別会員	数１０名･･･途上国からのJICA研修員、留学生、在日外国人等
組織運営	役員	理事長、副理事長（2名）、理事（7名）、監事（2名）
	会議等 （活動拠点）	定期総会（5月）、臨時総会（不定期）、理事会（月1回）、意見交換会（11月） 各種委員会（出前講座委員会、FF委員会等） 【東京】活動拠点（JICA東京）、定例会（第一木曜会、会員のひろば） 【神奈川】活動拠点（JICA横浜）、定例会（第三水曜会、SV体験発表会）
	広報	「会報」（関係者向け月刊紙）、ホームページ：https://jicasvob.com/　、Facebook 地域放送番組：湘南ビーチFM「シニアの挑戦」（偶数月第一水曜日）
	会員専用	出前講座資料館、公式資料保存庫
事業	JICA支援	JICA海外ボランティアをめざす人への支援、帰国報告会
	出前講座	出前授業（杉並新宿プロジェクト、JICA研修員プロジェクト、東京オリパラプロジェクト 神奈川県理科教育学校派遣プロジェクト、等）、市民講座（一般市民、大学生）
	在日外国人	「学校だより」翻訳プロジェクト、日本語学習支援プロジェクト
	国際協力	グローバルフェスタ、よこはま国際フェスタ・フォーラム
	海外展開	中小企業海外展開支援プロジェクト
公　開　講　座		SV体験発表会「シニアの挑戦！国際協力の現場を語る」（JICA横浜、毎月第3水曜日） 神奈川県立あーすぷらざ市民公開講座（2014年5月～2018年9月）…現在休止中
出版	授業提案 講座案内	冊子「授業提案書『総合的な学習の時間』」（初版 2008年8月、最新版 2019年4月） 冊子「もっと知りたい世界の事情」2010年7月
	SV体験	冊子「シニアの挑戦！国際協力の現場を語る（第１集）」2010年11月 冊子「シニアの挑戦！国際協力の現場を語る（第２集）」2011年11月 冊子「シニアの挑戦！国際協力の現場を語る（第３集）」2014年03月 冊子「シニアの挑戦！国際協力の現場を語る（第４集）」2017年12月
	広報誌 記念誌	冊子「帰国シニアの挑戦～地域社会と世界を結ぶ～」2013年05月 冊子「帰国シニアの挑戦～１５年のあゆみ～」2019年12月
主要実績(受託)	学校支援	杉並区協働事業「総合学習支援」（2006年度～2007年度） 杉並区教育委員会委託事業「総合学習支援」（2008年度～現在） 新宿区協働事業「総合学習支援、外国籍子弟支援」（2008年度～2009年度） 新宿区教育委員会委託事業「総合学習支援、外国籍子弟支援」（2010年度～現在）
	国際理解	MRAハウス助成金「青少年の国際理解教育等」（2019年4月～2020年3月）
	日本語支援	新宿未来創造財団「日本語学習支援」（2009年度～現在）
	子供支援	日本財団補助金「新宿プロジェクト」（2007年4月～2008年3月） 文部科学省助成金「子供の居場所作り等プロジェクト」（2008年7月～2009年2月）
	途上国支援	公益信託地球環境基金「ボルネオ島・野生ドリアン植林」（2009年8月～2010年1月）
	高齢者支援	高齢期雇用就業支援センター「セカンドキャリア・サポーター」（2007年8月～2008年8月）
	市民講座	さかえ未来塾　出前講座「異文化共生、シニアの国際貢献」（2006年7月～12月） かわさき市民アカデミー　出前講座「開発支援」（2007年10月～2008年2月）
受　　賞		JICA「グローバル教育コンクール2012」写真映像部門で受賞（2013年2月） 青年海外協力隊発足50周年 JICA理事長特別表彰楯受賞（2015年11月） 第12回JICA理事長賞受賞（2016年10月）
新聞雑誌	取材記事	『クロスロード2016』OB/OG向け号「OB/OG会の挑戦」･･･行政と協働事業に取り組む 『朝日新聞』2015年7月27日 「Reライフ 人生充実」･･･活躍の舞台 次は海外 季刊誌『エール』2019年秋号「“人の役に立つ”生き方」
	寄稿記事	『社会教育』2019年3月号「生涯活躍」･･･シニアの挑戦
保 有 資 格 等		日本語教育能力検定、民間・国連英検（通訳）、秘書検定、小学校・中学校教員免許、看護師、介護士、ホームヘルパー、技術士、測量士、中小企業診断士、自動車整備士、エネルギー管理士、公害防止管理士、危険物取扱主任者、電気主任技術者、一級陸上無線技術士、一級造園施工管理士、樹木医、建築士、情報処理技術者、博士号保有者、防災士、臨床心理士、理学療法士、図書館司書、学芸員、等多数

「15周年記念誌」で新たな文化創造を！

2019 年 11 月 27 日　意見交換会　JICA 横浜センターにて

2019 年 1 月編集委員を公募し、2 月に編集委員会が発足。20 数回の編集会議を開催し、会員および関係者の皆様のご協力の下、12 月に「15 周年記念誌」を無事刊行することができました。本記念誌は 2013 年 5 月に刊行した広報誌「帰国シニアの挑戦」の 2019 年版といえますが、今回の特徴は、「会員みんなで創る記念誌」、「会員の顔の見える記念誌」を目指したことです。そのポイントを述べましょう。

第 2 章「SV 会の活動」は主に各々の事業を統括してきた新旧 PM に執筆を依頼、第 3 章「SV 会の運営」については主に編集委員が執筆、それを基に全体像が見えるよう編集委員会が整理統合しました。

本記念誌の最大の特徴である「会員の顔の見える記念誌」を実現したのが、第 4 章「会員の活躍」です。多くの会員に登場して頂きました。2 回実施した『座談会』には公募した 20 名の会員が参加しました。『途上国への思い』では公募した 16 会員の途上国との絆が書かれています。また『児童生徒の感想文』では多くの会員から多数の児童生徒の「心温まる感想文」が寄せられました。スペースの関係でそのごく一部しか載せられなかったのは残念です。また『会員の提言』では 8 名の会員が応募されました。

なお、第 1 章「SV 会の歴史」と第 5 章「資料編」は編集委員会で作成いたしました。

このように、多くの PM や会員の参加を得て、15 周年記念誌が出来上がりました。この記念誌の編纂活動および編集活動が、会の文化創造を担い、新たな活動へと発展していくことを期待しております。

15 周年記念誌編集委員会
編集委員会を代表して　　広内 俊夫

【編集委員】左から右回りへ
斎尾恭子、井坂敏之、永見正敏、宮井美津子、北脇和夫、
広内俊夫、永渕寛幸、森妙子、山内茂夫、松田信治
政金驍（ベトナム滞在不在）

撮影 2019 年 10 月 16 日

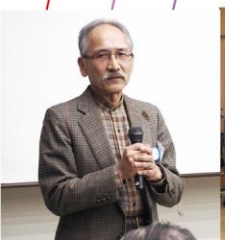
創立１５周年記念誌　帰国シニアの挑戦～１５年のあゆみ～

２０１９年１２月２５日　初版第１刷発行

〔発行者〕
特定非営利活動法人 シニアボランティア経験を活かす会

〔編集デザイン〕
創立１５周年記念誌編集委員会

〔発行所〕
特定非営利活動法人 シニアボランティア経験を活かす会
〒102-0093 東京都千代田区平河町１－６－１５　ＵＳビル８Ｆ
電子メール　：　info@jicasv.com
ホームページ：　https://jicasvob.com/

本冊子掲載の記事・写真などの無断転載を禁じます。

特定非営利活動法人
シニアボランティア経験を活かす会